東北帝國大學教授
小林好日著

日本文法史

刀江書院刊

目次

のみにて推しきはめがたきことあるは、そのもと人のたくみに出たることならねばなり。

それ故にある國學者は語源を研究するのは、古代の正義を求めるのだといふ。丁度ストア派が自然に即してゐる眞理（ἔτυμον）を知らうとして居たのと同じである。音義派が一々の音に內在してゐる意義を究めることに由つて、語義を解釋しようとしたことも、同じ考が根柢を成してゐる。

語法の問題に於ても、宣長は係結の法則を古今變らぬものとなし、

上れる世は更にも言はず、中昔のほどまでも自らよく整ひて違へるふしはをさ〳〵なかりけるを、世下りては歌にもさらぬ詞にも、この整へを誤りて本來もてひがむるたぐひのみ多かる故に

と云ひ、上代語に中古語と反したものゝあるには、「たゞ上つ世の一つの格と見ゆ」と云ひ、「てにをはのとゝのひにいたりては、もはら中昔の格とたがへる歌は百にひとつも見えず」と云つて片付けてゐる。ここに大きな矛盾を見逃せなかつた義門（註三）も、他の解決を試みることなしに、上代の一格も中古にないとは決められない、目に觸れないのは、古今互にたゞ物に書かれなかつただけだと說明して、言語不變の法則を辯護するにとゞまつた。

西洋の言語學も、わが國と違はず、長く謬見のうちに在つたが、十九世紀初頭に於けるサン

スクリットの發見は、この學問の方向に對して記念すべき急轉向を行はしめた。希臘・羅甸の諸語がサンスクリットと起源を同じうする一の共同祖語から變化したものであることを知るに及んで、希臘羅甸語を固定したものと考へたり、各國語に規範的の古典形式を求めむとする如き固陋な考を一擲して、凡ての言語が絶えず流動し成長してゆくものと考へるやうになつて、學問の視野はひらけ、言語の秘密があばかれるに至つた。わが國語の歷史的研究法の起つたのは、實に明治以降、この西洋の言語研究法の影響によるものである。

かの春庭が「詞の通路」に、

詞のはたらきてにをはなど、神代よりおのづからさだまりありて些も之にたがふ時は、其ことわりわからず聞えぬ事となるなり。其定りの意はふかきゆゑよしさへあるべきことわりあるべきことなるべけれど、人のつたなき心もてはかり知るべきことならねば

と云つて、國語に一定の法則のあることを述べると同時に、

今の世のなべての人のものいひさとび言にも詞のつかひざまでにをはなどおのづから其定りありてひとつもたがふことなく

と云つたのは、口語にも規則のあることを認めたもので、もし中古語を雅言とし、口語をそい

發達したことを考へる國學者固有の識見が無かつたならば、西洋に於けるやうな發見の如き驚異すべき事實が無くとも、聰明なる研究者には、歴史的研究に對する問題は既に與へられてゐたかも知れなかつたのである。

新時代の國語研究の一特色は、言語の時代をみとめ、歴史的に言語を研究せむとすることに在る。歴史的の文法は、こゝに於て軌範的の文法と袂を別たなければならぬ。總じて實用を目的として行はれる言語の取扱方は、常に規範的である。家庭に於ける訓練でも、學校での一層進んだ意識的な學習でも、或は外國語の習得でも同じ範疇に屬する。この教科的に取扱はれる場合の言葉は、常に成長のないもの、固定的なもの、不變的なものである。卽ち古代の言語を學ぶにしても、現代の言語を學ぶにしても、その歴史的發達の或特定の時代に於ける言語の習慣を概括して、一定の統一を與へたものである。言語は有史以前に於て想像すべからざる過去に起源し、次第に發達して來たもので、又今日生きてゐる言語であるならば、尚悠久の未來に向つて發達してゆく流動の狀態に在るものと云ふ如きことは考へない。それ故に、その述べる規則は何故に存在するのか、いかにして成立つたものか、その理由その歴史は敢て問ふ所でない。唯敎へられる規則をそのまゝに學び、一般の規則に對して例外があると云ふやうな場合に

は、唯それは口調の爲であると云ふくらゐの說明で滿足しなければならない。かくの如き規範的の言語教授は、古典を解釋する爲とか、辯論をなし文章を草する爲とか、何らか實用に供せられるもので、かゝる發音はよくない、この詞づかひは避けなければならないと云ふやうに、そこには正邪善惡の判斷を以て臨まれることになる。歷史的の言語研究が言語事實のあるがまゝの記述を目的とするのと大にちがふ。

今正字法の問題について云へば、實用的の言語教授に於ては、その取扱方は規範的で、かやうに書いてあるのは、かやうに讀め、かやうな發音はかやうに記さなければならぬと教へる。「はひふへほ」の波行音が、語間又は語末に在るときは、「ワイウエオ」とよむ。「ウグイス」といふ語は「うぐひす」と記さなければならぬと教へられる。これを言語の歷史的見方から說明するならば、語間又は語末の「はひふへほ」を、ワ行もしくはア行によむのは、發音の變化した結果で、むかしの發音は文字の示す通り「はひふへほ」であつた。平安朝中期以前に於ては、鶯はウグイスといふ語ではなく、「うぐひす」といふ語であつた。それが變化して今はウグイスと發音するけれども、假字は變化しないもとのまゝで記すのであると云ふ。それで、「やきいも」を「やきひも」と書かないのは、芋は昔も今も「いも」であると云ふことになる。常に歷史の上に

事實に説明される。今日の假名づかひの正不正の云はれるのは、天暦以前の假名の用ひ方が歴史的假名づかひとして、今日の正字法の規範とされてゐる爲である。

言語の歴史的研究に於ては、その方法は實證的で記述的である。吾々は言語上の事實について、正邪善惡を批判する權利はない。丁度歴史家が歴史上の人物の行動については語るが、その當爲を論じ、かく爲さねばならなかつたと云ふことは出來ないのと一般である。勿論社會では實際に善い言葉づかひとか、惡い言葉づかひとか、正しい假名づかひとか誤れる假名づかひとか云ふ。これは歴史的の立場から云ふのでなく、規範的立場から云ふのである。歴史的の取扱と、規範的の取扱とは、それ〴〵自己の立場を持つてゐて、相侵さざる平行線である。規範的取扱に於て、正不正の云はれるのは、單に社會の習慣の問題で、國語を國語教育上の對象として考へる時に起る事實である。國語教育の立場から云ふならば、教養ある社會の持つてゐる言語文字が上品なもの正しいものとして採用される。文字の上では歴史的かなづかひが正しいとされ、之に背くことは社會の感情が許さない。發音に於ては東京の中流社會の發音が上品なものと考へられ、東京の下町の捲舌の如き或は東北地方のシスヤチツの混用の如きは、善くないものとして排斥される。教養ある社會の文字言語の習慣は、之を習得すると否とが社會に出

て活動する上の利不利となるから、その文字の使用法を教へ、その話し方を教へることは、國語教育者の義務でなければならぬ。それ故に國語教育の立場から云ふならば、過去現在の規範を教へ、文獻の解釋鑑賞に資し、訛言を矯正し、正しい假字づかひを授け、一國の國字・發音・語法の統一を計ることが任務であるけれども、國語の歴史的研究の立場からするならば、下町の言葉も貴族の言葉も等しく言語上の事實で、その間に正邪善惡はないのである。

わが國語の研究も、長い間の實證的研究に由つて、多くの事實が闡明された。ガベレンツが(註四)日本の學問のうちで最も光輝あるものは、國語の研究であると云つた言葉は、決して誤つた言ひ方ではない。たとへば動詞の活用の研究に於いて、谷川士清が「日本書紀通證」に、五十音圖にあてゝ動詞の語形變化を吟味し、賀茂眞淵が「語意考」に同じ排列を試みて、初體用令助の五段を得、はじめて動詞に活用のあることが分つたが、ついで本居宣長が動詞の語彙を集めて一々活用を研究して見ると、その間に種々の違つたものゝあることを發見して、廿七會の類別を得た。その子春庭が更に之を五十音圖の列によつて類聚するに至つて、中古言に於ける活用の種類が明かになつた。その業蹟は誠に見るべきものがある。かくの如くして組織された文法が規範的文法として、中古語の性質を教へ、古典の解釋に寄與する所あるは勿論疑ふことと

於てさへ、唯これが萬世を律する國語の法則である如く主張されるに至つて、言語研究の眞の意義を失はしめた。その過は全く歴史といふ觀念を缺いたことに在る。これまで實證的に活用の事實が綿密に調査されて、折角中古語に於ける活用の法則が明かになつたのであるが、その誤れる言語不變の觀念が、言語事實の認識の上に災して、單なる一時代の法則であるものを、神代から遠い將來に亙る國民の言語生活を支配してゐる嚴かなる大法典である如く考へさせ、之に外れてゐるものは、皆俚言であり、中古語のみが雅言で、苟も日本國民たるものは、この雅言の法則を唯一の正しいものとして遵守しなければならぬと唱へしめるに至つて、救ふべからざる迷誤に陷つた。

言語は人間社會に自然に發達した社會事實であつて、ソッシュール[註五]の云つてゐる通り、それを話す主體の一機能ではなく、唯個人が受動的に記錄するところの制作物であり、共同社會の諸成員の間に行はれる契約の一種によつてしか存在し得ないものである。この契約は自由に選擇されたる契約ではなく、社會によつて強制されるものである。團體がその規約を委員會によつて協議立法するのと違ひ、言語は個人に對立し、社會大衆は何等の選擇を受けるものでない。中古の言語が現代の口語に變つて來たのは、社會の變遷と共に自然にかはらざるを得ずして變

つて來たもので、その間に正邪善惡の差別はない。あらゆる言語はそれが存在するが故に、正しいと云はなければならぬ。

八衢や玉の緒は中古言に於ける動詞や係結の事實を吟味し、優勢なる習慣を歸納して概括的の法則とした一種の規範的文法である。之を以て當時の言語にあらはれてゐる大體の法則であると云ふならばよい。春庭が云ふやうに、「かくて古への人はおのづからわきまへて用ひたがふることはなかりつる」ものと云へるの誤なるは勿論、之を以て古今を貫く不變の法則と考ふるならば誤である。言語は常に流動の狀態に在る。實際の言語は法則として概括するには餘りに複雜である。春庭は八衢に於て四種の活を立て、「隱る」の如きは、古事記萬葉の用例二箇を擧げて、「中昔よりは下二段の活にのみ用ひたり」と云つてゐるが、中古にも土佐日記その他に四段の用例があり、今昔その他院政時代にも幾多の用例のあるを見れば、中古以來相ついで同じ活用を以て現れてゐたと考へざるを得ない。之を以て見れば、「中昔よりは下二段の活にのみ用ひたり」と云ひ、「神代よりおのづから定りありて今の世にいたるまでうつりかはることとなく」と云ふ如き揚言は事實でないことが明かである。吾々は文法を純粹に學問の對象とせむとする時、かゝる過去の學者の爲した如き說明では滿足できないのである。

規範的文法と歴史的文法とはおのづから説き方がちがふ。規範的の文法は、たとへば助詞の「と」や「とも」が、動詞・助動詞等を受けるときに終止形をもつてするのを通則とし、連體形をもつてするのは誤であるが、許容せられるものと云ふ。然し連體形で受けるといふことも、歴史的に見れば例外ではなくて、一定の時代に於ける習慣であると云ふにとゞまる。又實用的の言語學習の場合には、忠實に文字のまゝを信じて記載せられてゐるものを言語そのものと思ふが、歴史的研究によれば、文字はその時代の記載の習慣を示すもので、文字よりもその背後の語られ且きかれる言語こそ眞の言語だと知る。この見方よりすれば、「たるなり」「ざるなり」を「たなり」「ざなり」としてゐるのは、むしろ音便化した撥音の記載法の發達してゐなかつた爲に過ぎないことを知る。「こそ」の係は已然形で結ぶ。成立つた條件を現す形と同じである。然し奈良朝時代の已然形の用法を説明すれば、この二つの形の同一であることの偶然でないことが分る。「ちらふ」「かたらふ」を「散る」「語る」の伸びたものと云つたのは、平安朝の言語事實から歸納された法則を本體として、逆に過去の形を説明しようと謀つたからである。奈良朝の言語と平安朝の言語との歴史的變遷を知つてゐたならば、それが前の時代に活動して今は亡びた文法的範疇たることを認識するに困難はなかつたらう。

わが國語の文法的範疇の起源を知り、その今日までの變遷を明かにすることが、わが文法史の目的である。吾々が之を成すに方つては、現代の口語は別として、各時代の文法事實の知識は、當時の文獻から得られなければならぬ。しかし吾人の求むるものは、言語の生きた歴史そのものであつて、時代から時代に移りゆく國民の思想感情が、發音器官によつて作らるゝ音聲に由つて、如何にあらはるゝかの理法である。音聲は一種の象徴である。言語による表現は、その社會の習慣を熟知して、一定の音聲に一定の意義を結び付け得るものにのみ分る。文獻に記されてゐる言語は、又一層間接である。文字が解釋され、それが表す音聲に還元されるまでは、言語と云ふことが出來ない。言語の歴史的研究とは、文字を正確に解釋し、之を聽覺的印象である音聲にまで還元し、その象徴的機構を明かにすることである。

又言語の歴史的研究は、必ずしも歴史時代にのみ局限しない。國語は文獻以前に長い生命を有つてゐた。一國語の最も古い形にまで遡つて尙その由來の究めがたいものは、同系語との比較によつて說明されなければならない。英語の breath と breathe と、一は無聲によまれ一は有聲によまれるわけは、古代英語まで遡れば分るが、doom といふ名詞とそれと同語源の動詞 deem との關係は、古代英語に於て既に一は dōm であり、一は dēman であるから、英語だけ

の歴史では、その差異の起る理由が分らない。そこでゲルマン語族に屬する他の國語との比較によつて、いはゆる母音變化 vowel-mutation であることを知るのである。さて、わが國語では同系語との比較研究はとざされてゐて、僅かにわが特殊の方言といはるべき琉球語の研究に多少の助を借り得るだけである。こゝに於てわが國語の先史的事實は、憶說の形に於て現れざるを得ない。我々は憶說を忌避する必要はない。憶說を得ることに由つて、文法事實がその本質を說明されることが多いからである。

文法の歴史的研究は、必ずしも各時代の文法事實の列擧ではない。又史料の有無、史料の適不適と云ふ偶然は、時代を追うて行はれる記述を許さない。吾々は若干の限られたる比較的明かにされてゐる時代を土臺にしてその前後を對照し、その中間はその對照によつて推測して、事實の變遷沿革を跡付けなければならぬ。國語史の時代區分の如きは、今遽かに論ずることは出來ぬ。たゞ、比較的に多くの學者がみとめてゐる時代區分を假りに取つて、(一)奈良朝時代、(二)平安朝時代、(三)院政鎌倉時代、(四)室町時代、(五)江戸時代以後の五期を立て、之を大きく分けて、(一)(二)を上代語、(三)(四)を中世語、(五)を近代語とし、又もつと大きく分けて室町時代の末を以て古代語と近代語の二つとすることが出來る。文獻にある言語は、そのまゝ當時の口語ではな

いて言文の比較的一致してゐた平安朝以前はとにかく、院政鎌倉時代以後、文語が固定してからの言語は、もつとも補促するに困難である。それ故に、吾人は今日の口語と古代語とを比較して、その變遷のあとを各時代の文獻に探り、生きた言語に具はる理法を以て、過去の言語を解釋して行く方法を採らなければならぬ。その爲には各地の方言は、言語の古形を保存する點に於て、少からぬ參考となる。室町時代中期以後は、比較的豐富なる口語資料が得られる時代である。同時に室町時代は、古代語から近代語への變轉期である。この意味に於て、この時代の資料から得られる文法事實は、わが文法史に對して重要なる意義を有してゐる。

註

(一)舊約創世記第一章五
(二)嘉祥中觀論疏一(大正大藏經二卷一四)、龍樹大智度論卷一〇(大正大藏經二五卷一、三五)
(三)義門、玉緒繰分波ノ卷卅二ウ
(四)Georg von d. Gabelentz, Die Sprachwissenschaft. 二四頁
(五)De Saussure, Cours de linguistique générale 第二版三〇・三一頁
(六)わが國語史上で最古の時代の總稱。奈良朝以前の言語で、記紀に存する遺物に由[illegible]

も廣傳の如く、古いものと信ぜられた。それ故に紀記萬葉の出來た奈良朝の名をとつて、こゝに奈良朝時代と云ふ。引用史料の甚だ多い、解說は卷末に添へた。引用書名は多少省略に從ふ。又引用文の假字遣はもとのまゝである。

第二章　名詞

國語に於ける名詞の著しい特色は、語形變化を有たぬことである。印歐語族諸語では、たとへば英語やドイツ語が男性・女性・中性を區別し、佛蘭語が男性・女性を區別するやうに、いづれも性の區別を文法上の範疇としてゐるが、わが國語では、「男」「女」「父」「母」といふやうに、特別の語彙を用ひるほか、「をとこ親」「をんな親」のやうに、熟語の形をもつてしたり、「をいぬ」「めいぬ」「をんどり」「めんどり」のやうに、接頭語をつけて自然の性をあらはす方法はあるが、文法上の性の區別とはいはれない。數も「くに〱」「しな〱」など、疊語を以つてあらはしたり、「もろ人」「叔父たち」の如く、接頭語・接尾語を用ふる方法があるが、名詞そのものに形態上の變化はない。これらの場合、唯、熟語もしくは接頭語・接尾語等、語詞構成の問題にすぎない。又印歐語では格に應じて名詞語形の變化があるが、わが國語では、格を示すことは、名詞に從屬してあらはれる助詞の問題である。それ故に、國語に於ける名詞の歴史は、文法形式の歴史ではなく、單に語彙發達の歴史にすぎない。

國語の名詞には一音節のものもある。「き」（木）、「そ」（衣）、「た」「て」（手）、「は」（羽）、「ひ」（火）、「や」（矢）などは其れである。この種のものが熟語となつたもので（衣手｜袖）、「なべ」（魚瓮｜鍋）、「をけ」（麻笥｜桶）、「こけ」（木巳｜苔）と云ふやうなものがあり、「みや」（宮）、「みち」（道）、「さよ」（小夜）の如きは、「や」（家）、「ち」（道）、「よ」（夜）に接頭語「み」「さ」などの附いた熟語である。更に「みやこ」（都）「みなと」（港）「まつげ」（睫）「ほのほ」（炎）の如きは、「み家處（やこ）」「水之門（みなと）」「目之毛（まつげ）」「火の穗（ほ）」又「火（ほ）の火（ほ）か」などと分析することが出來る。動詞から轉じた名詞もある。「きり」（霧）、「かすみ」（霞）、「をしへ」（教）、「めぐみ」（惠）の如きものである。「あか」（赤）、「くろ」（黒）「深さ」「強み」など、形容詞の語幹、もしくは其れに接尾語「さ」「み」の附いたものもある。然し多くの名詞は如何に分析すべきか分らぬものばかりで、その語根が一音節か多音節か知れないものが大多數を占めてゐる。名詞には外來語が多い。用言が語形を分析すると、大抵短小な語根に還元できるのに比べて、名詞が如何に分析すべきか分らぬものゝ多いのは、容易に外來語が吸收された結果に違ひない。

第三章　代名詞

今日の國語のみを考へれば、わが人代名詞は、名詞から轉用したものか、指示代名詞から轉用したものだけであるが、奈良朝時代には、次の如きものがある。

自稱　あ　あれ　わ　われ　　對稱　な　なれ

不定稱　た　たれ

このうち、「あ」「わ」「な」「た」等は古い形で、（一）直接熟語を作り、（二）種々の助詞と共に用ひられる。

（一）あご（吾兒）　あせ（吾兄）　あぎ（吾君）　あづま（吾妻）　なね（汝姉）　なおと（汝弟）

（二）あがせ　あがもふ妹　わが宿　わをしぬぶらし　わはそと思はじ

なが鳴く里　なを待つと　たが家　たが身とて　たにかも寄らむ

この形は、後には「が」を伴うて、體言を連ねる場合の

わが國　なが命　たが袖

等にのみ跡を留めて、接尾語の「れ」を附けた形、

われ　なれ　おれ　たれ

等に、その位置を譲つた。「わ」「な」「た」等の古形は、萬葉集東歌に、「ぬれてわきなば汝はこふばでも」とあるを除いて、助詞を使はずに單獨に用ふることがなかつたのに、新しい形は單獨にあらはれ、

わ゜れ゜醉ひにけり（記）
な゜れ゜なりけめや（記）
あめつちのかみを戀ひつゝあ゜れ゜待たむ（萬一五）
み立たしせりし石をた゜れ゜みき（萬五）

等とも用ひてゐる。「れ」は「ら」と同じもので、恐らく何ら一定の意味を持つてゐなかつたものと思はれる。

これらの代名詞は、前の時代から傳つて來て、紀記萬葉等わが最古の文獻に用ひられてゐた代名詞と思はれるが、中古以後今日に至るまでの代名詞の變遷の跡を眺めると、この種の代名詞は次第に用ひられなくなつて、種々の待遇の意味をもつ名詞や他の指示代名詞から轉用した代名詞が、そのかはりとなり、それが又出來たり亡びたり幾變遷を經て後世に及んでゐる。こ

れはすべて尊敬・謙遜等、待遇の言ひあらはし方を要求した結果で、たとへば今日の「君」とか「僕」とかが、待遇の意味から用ひられたことは云ふまでもなく、「あなた」「そなた」等の如きも、直接、人をさすことを遠慮したもので、やはり待遇の意味を持つてゐるものである。

奈良朝時代にすでに固有の人代名詞と並んで、この種の代名詞が現れてゐる。自稱の「まろ」對稱の「まし」「みまし」「いまし」等が、それである。「まろ」は古事記に、

白檮の生に横臼を作り、横臼に釀みし大御酒、甘らにきこしもち飮せ麻呂が父

と云つて、「私の父」といふところに、「まろが父」と用ひてゐる。この形は平安朝にも、

つゝゐつゝ井筒にかけしまろがたけすぎにけらしないも見ざる間に(伊勢)

さ破り給はゞ、まろも法師になりてこそあらめ、何せんにかは世にも交らはん(蜻蛉)

うちそばみ君ひとり見よまろ小菅まろは人すげなしといふなり(同)

旅人のかやかりおほひつくるてふまろやは人をおもひ忘るゝ(拾遺)

まろははしに寢侍らむ(源氏帚木)

など廣く用ひて院政鎌倉時代まで及んで、

丸ガ石ハ先ヅ此ニ置給ヘト云テ(今昔二四)

大將のうへとまろ放ちては、又兄弟などなきを(とりかへばや)

たゝの手にまかにたにゝおいてにすみてゐはづの原のうづらなりきま(萬代)

などと見えてゐる。

對稱の「まし」「いまし」「みまし」の例、

此の川に朝菜あらふ兒ましも吾も(萬一四)

いましもわれもことなるべしや(同)

いましをたのみ母にたがひぬ(同)

みまし親王の齢の弱きに荷重きは堪へじかと念ほしまして(續紀宣命)

など「まし」「いまし」は、「居る」の尊敬動詞「います」「います」から來たもの、「みまし」は「いまし」で、「まし」は中古にも往々用ひられたやうである。

一所いり給ひてましはえ知らじ(宇津保)

ましがつねにみるらんうらやましきを(源氏少女)

平安朝に入りては、「あ」及び「あれ」は用ひられなくなり、「わ」が、「わが」といふ形にのみ殘り、「われ」を普通の形とした。「われ」は今日、「われわれ」といふ複數の形に於て普通に用ひられてゐる、同時に對稱「みまし」「いまし」等も用ひられなくなり、「きみ」又は「なむぢ」「きん

ち」を用ひるやうになつた。「なむたち」は汝貴、「きむたち」は君貴の約である。

汝がもちて侍るかぐや姫奉れ(竹取)

きんぢがつかさのかみの、こぞよりいとせちに、のたまふことのあるを(蜻蛉)

きむち此の手をつたへほどこすものならば(宇津保)

汝が父にともいさめまほしうおぼしけんかし(源氏柏木)

「なむたち」は貞觀儀式に見える

佐渡與里乎知能所乎、奈牟多知疫鬼之住加登定賜比、行賜弖

の「なむたち」がつてい省略と思はれるから、まへから在つたかも知れない。「なむたち」は院政時代に及んでゐる。室町時代には「なんだち」となつた。「なむたち」の例

汝曹ナムタチ(色葉字類抄)

ナニテウ事ニカ候ト申ニナムタチシラスヤ娑婆世界ノ衆生ノ身ヨリ光ヲハナチテ云々(法花百坐)

心ハナムタチ法花經ノ名ヲ受持讀誦セムモノスラ福ハカルヘカラストノタマヘリ(同)

指示代名詞は古來變化なく、事物の指示代名詞の平安朝までに見えるものは、

近稱　こ　これ	中稱　そ　それ	遠稱　か　かれ、　あ　あれ

「こ」はもと單獨に、

こしよろし(紀)

とも用ひられたが、一般には「の」といふ助詞をつけて、「この」といふ形になり、

このみ酒(記)　　この山のへに(萬五)

など用ひられ、又「ことし」「こよひ」など熟語としてつかふ。この「こ」が本で、「これ」は新しく出來たものであらう。「これ」が今日も普通に近稱の指示代名詞として用ひられてゐる。

「そ」「それ」は、「こ」「これ」と同じ關係にあり、「そは」「その」「そが」といふ形を作る。「それ」が今日まで中稱の指示代名詞としてつかはれる。

「か」「かれ」は又「そ」「それ」と同じ關係にあり、「あ」「あれ」は平安朝に出來たもので、「あれ」は今日も普通の遠稱の指示代名詞である。

場所・方向の指示代名詞は、以上の事物の指示代名詞の名詞と熟語となつたもので、

ここ	そこ	かしこ あそこ あすこ
こち こなた	そち そなた	あち かなた あなた

「こ」は「處」(こ)、「ち」は「道」(ち)であり、「なた」は「の方」の約つたものである。英語で方向を示すに、例へば「この方」を this way と云ふのは、この國語の習慣と似てゐる。

不定稱の指示代名詞「いつ」は、「わ」「か」「そ」などと同じ過程で、「いづれ」を生じたものに違ひないが、しかし意義から云へば、「いつ」と「いづれ」とは違つた發達を成した。「いつ」は單獨にあらはれる時は常に時間にのみ關係して、

いつまゐりつるぞなどの給ふ(源氏紅梅)

旅ゆく人をいつとか待たむ(古今)

など用ひるが、「いづれ」は代名詞である。但し「いづく」「いづこ」「いづち」「いづら」など熟語の形で現はれる場合には、他の場所の代名詞と同じく代名詞の性質をもつてゐる。「いづこ」「いづれ」は今日は「どこ」「どれ」と變つてゐるが色葉字類抄に、「於何」をイドコニシテカと訓んでゐる例があるから、このころから變化は徐々として起つてゐたものと見られる。恐らく「いづこ」が「こ」のオ列音に同化して「いどこ」となり、省かれて「どこ」となつたと共に、それに類推して「いづれ」にも「どれ」といふ形を生じたものであらう。

わが國では、この指示代名詞が、他稱の人代名詞として用ひられる、他稱の人代名詞はわが國では古くから發達させてゐなかつた。今日に於ても、他稱に用ひるものは、本當に代名詞として感じてゐるかどうか疑問である。「この人」「あの人」「このかた」「あのかた」などを取つて

見るに、この人、あの人であり、「人」に「この」「あの」などが附いてゐるのであつて、「この人」「あの人」などいふ單純な代名詞としてゐるとは云へない。代名詞といふ意識は甚だ弱いものである。これに尊敬の意味を寓する時にも、「この」「あの」の下に尊敬の接頭語を附けて「このお方」「あのお方」と云つて、「この」「あの」と「方」とを分けてゐる。外國語の影響を受けるやうになつてから、彼とか彼女とかを用ひるやうになつてゐるが、まだ雅馴なる國語として感ぜられてゐない。ちかごろ彼氏といふ新語の出來たのも、この足りないところを補ふつもりと云へよう。文章のうちにはやゝ地位を得んとしつゝあるかも知らぬが、少くとも日常の對話に於ては勢力がない。昔に遡つても習慣は同じで、人のみを指す人代名詞は、不定稱の「たれ」だけで、そのほかは事物でも人でも、話題に上るものは、「これ」「それ」「かれ」「あれ」を以つて呼んだものである。それ故に往々文典に他稱の人代名詞として「かれ」「あれ」だけを擧げてゐるのは誤で、事物の指示代名詞と同じものを用ひ、事物の指示代名詞と同じく近稱があり、中稱があり、遠稱がある。

それははやう失せ侍りにしかば、これはその後あひ添ひてはべるわらはべなり（大鏡）

これは人の御際まさりて思ひなしめでたく、人もえおとしめ聞えねばうけばりて飽かぬことなし。加

れは人も許し聞えざりしに、御志のあやにくなりしぞかし（源氏桐壺）

國語に於ては、事物・場所・方向等の指示代名詞が單純なのに反して、人代名詞が各時代に異常なる發達をしてゐることは、待遇に支配せられた結果である。殊に使ひ慣れた語は次第に敬意が失せるから、それに代るものが出來てきて愈〻その數を加へた。「君」は名詞として尊貴を意味し、中古には尊稱であつたが、今日ではむしろ同輩以下に用ひられる。「おまへ」も今は尊稱ではないが、江戸時代には尊稱である。「あなた」は江戸時代には、

是お姫様、あなたを知らしやりませぬか。御總領の萬左衛門様ぢや（けいせい曉の鐘）
此子は盃をどうするのだ、あなたへさしねヘナ（品川楊枝）
あなた方が待つてござらつしやる（東海道中膝栗毛）

の如く、他稱であつたものが「そなた」が尊稱でなくなると、それに代つて對稱の人代名詞になつてゐる。「貴樣」も今は卑稱になつてゐるが、此ももとは尊稱である。江戸時代には例へば、

貴樣は一昨日お着きなされたげな云々……貴殿に賴みたい儀がござる（武道達者）

とあるのは、星合右衛門兵衛が同役八郎左衛門に云ふ言葉で、同じ人を貴殿といひ、同等の敬稱とわかる。宣長は遠鏡に、

貴様ノアダナ御心ヨリハ禮ガハシカニマシデヤ、貴様ハ禮ハアダニハナイ業平ツヤアダナト云ハシヤルガ

などと用ひてゐるが、文化頃にも、

きさまは何ともないやうぢや(膝栗毛)

といつてゐるのは、醫者が患者に對していつてゐるので、相當の敬意を含んでゐる。(註一)明治になつても方言には同等の間柄に用ひたと云ふ。

かくして一の尊稱が用ひ慣れて尊敬の意味を弱くすると、之に代つて尊稱をあらはす語が必要になり、新に種々の代名詞を作り出してくる。殊に階級制度の甚だしかつた時代には待遇の厚薄によつて各種の代名詞ができる。それ故に各時代に夥しい人代名詞がある。室町時代の人代名詞を狂言記その他から拾ふと、自稱に、

おれ　身　身ども　この方　わが　こなた　こち　それがし　みづから　わが身　わたくし　愚僧　愚

老　わらは　わらはども

など云ひ、對稱には

おのれ　おのれら　おのれめ　そち　そちたち　その方　なんぢ　なんぢら　われ　われめ　われさま

こち　そこもと　ここなもの　そこなもの　こなた　そなた　そこないと　そなたども　そなたさま

こなた衆　おの〳〵　おこと　おことがた　ぬし　貴所　貴方　貴邊　貴方たち　御邊　わ御寮　わ御寮たち　御坊　御坊さま

など、他稱には

あれ　これ　あれら　これら　かれ　それ　それら　あいつ　彼奴　あいつめ　あれめ　かいつめ　このひと　かのひと　このもの　あのひと　この方（カタ）　そなた　その方（カタ）　あなた　あの方（カタ）

などいふ。かゝる代名詞を一々列擧することは無益である。それは極めて夥しいもので、且生滅常なきものと云へば足るであらう。それは或時代に生じたと思へば、すぐ次の時代には亡びてゐる。「そなた」から「あなた」に至る間の時の隔はそんなに長いものではない。

今日普通に用ひられてゐる人代名詞は、

一人稱　わたくし　手まへ　ぼく　われわれ　吾人　わが輩
二人稱　あなた　きみ　おまへ　貴樣
三人稱　これ　それ　あれ　この人　この方　その人　その方　あの人　あの方
不定稱　だれ　どの人　どの方　どなた

等であらう。「わたくし」は中古文學に見えてゐるものでは、公でない自分の上をいひ、常に「には」とか「にも」とかいひ、「私は」「私も」などとは使はない。

私にはいかでめでたしとおもひはべらざらん(枕)
私にも心のどかにまかで給へ(源氏桐壺)
私ニハ思ヒモ立レズ(平家)

これが代名詞として用ひられるやうになつたのは、室町時代以後のことであるが、この時といへども、文學上には用ひられず、唯古文書講義筆記等俗語を含んでゐるものにのみ限られてゐる。上杉家文書大館常興の書状に、

爲上意御服一重被遣之候得其意可申下之由私迄被成御内書候同下進之候一段御面目至候（享祿二年二月五日長尾爲景宛）

とあり、抄物にも、次の如き例がある。

人ニ腹立テサセントテ私カ夫婦ノ體テソウト云ソ(山谷詩抄、一三)
隗曰(中略)先ヅ私ヲ用ヒラレヨソ(蒙求抄)
私カヲホヘタ、トチヘ行ク道デヤト云フ事マデヲボヘタソ(同)

口語法別記に義經記、忠信吉野合戦の事の

鎌倉殿の弟判官殿のわたらせ給候よし承て、よしのゝしゆうをやらこそ、まかりむかひ候へ、わたくしらは、何のゐこん候はねば、一まづをちさせ給ふべく候

を擧げてあるが、希有の例で疑はしい。或は「わたくしに」は「い」の誤寫ではないかと思ふ。

江戸時代には廣く「わたくし」を用ひ、それが轉化して「わたし」ともなり、「わし」ともなつてゐる。

　　靑鬼立ちて先にとほる者をとらへんとすれば私は辨說なしおとほし候へ(醒醉笑)

　　ワタシガ事ヲシンセツニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ

　　ワシガド紐ガコノゴロ度々ヨウトケル

とあり、宣長の「古今集遠鏡」には、次の如き例がある。

君・僕などが代名詞となつたのは、はじめは儒者などの間で、次第に武士の間に用ひられ、後に書生詞となつて今日靑年間の普通の代名詞となつたのである。

指示代名詞が人代名詞に用ひられることとは、國語の一の特徴である。今日の對稱の人代名詞「あなた」もその一例である。

ここ	こち	こなた……自稱	
そこ	そち	こなた	あなた　　そこもと……對稱
あそこ	そなた	あなた……他稱	

これらは皆、場所・方向等の代名詞の轉用である。場所の代名詞を人代名詞に用ゐることは中古以來の習慣であるが、方向の代名詞を人代名詞につかふのは、主に室町時代以後のことである。

このことあそこと少將ともろ心に(宇津保)
こゝにはいかに思ひきこえたりとか見る(蜻蛉)
そこをのみなむ、かゝるほどより明暮見し(源氏紅葉賀)
そこにこそ多くつひへ給ふらめ少しみばや(同帚木)
義澄ガ云ク、此ハ何ニ宣フ事ゾ、義澄ハ荒卷ヲ其ニ奉テ後云々(今昔二八)
こゝをばすてさせ給ひつるか、御供に參らむ(榮花)

これらは院政時代までの例である。

ソチハ童子ノヤウナル者デアルヨソ(蒙求抄一〇)
ソナタト我トハ、兄弟骨肉ニテ、同根生也(同)
これ/\こちのことか(狂言、寶笑)
「呼かけ道連に致さうと存ずる。」しゝ申し「こなたの事でござるか」(同、宗論)
たうこなたは慮外をなさるゝと申すぞ(同、金岡)

これは室町時代の例で、前の「こなた」は自稱、後のは對稱に用ひてゐる。

「おまへ」は江戸時代には尊稱で、

はあお前は原田右近樣でござりますか(武道達者)

は家來が主人に向つて用ひ、

如來樣明日はお立ちなされまする。私もいよ〳〵お供を仕る筈でございまする。それでお前へ暇乞に參らうと存じましてござるに(日本月蓋長者)

は國主が先代の後室に對していつて居り、その他を見ても目下に對するものではなく、少くとも對等の關係に於て用ひてゐる。それが今日は次第に敬意を失つて同等以下に用ひるやうになつた。それ故今でも下流階級ではなほ親愛の意味を以て用ひ、方言では、尊敬に用ひてゐる所[1]がある。尊敬が親愛の意味になり、後に自分より目下のものに向つて用ひるやうになるのが、國語の人代名詞の一般の變遷である。

註

(一) Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. III, Pt. II, Dalla: The Yonezawa Dialect に、貴樣は親愛の意味を持つ代名詞で、その複數の形「貴樣たち」は、目下の者に親愛を含めて用ひてゐると觀察してゐる。

（二）同前、米澤方言では目上にのみ用ひ、「おまへさま」を云へば、特別の尊敬で、士族に對して用ゐると云ふことである。

第四章　數　詞

國語の固有の數詞は、「ひとつ」「ふたつ」「みつ」「よつ」「いつつ」「むつ」「なゝつ」「やつ」「こゝのつ」「とを、そ」「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「いそぢ」「むそぢ」「なゝそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」「もゝ、ほ」「ち」「よろづ」で、熟語としては「つ」を伴はずに、「みそ」「いほ」「やほ」「ふたとせ」などとつかふ。

この數詞のうちに、倍加法によつて出來たものゝあることは、荻生徂徠が「南留別志」に、

ふたつは、ひとつの轉ぜるなり。むつはみつの轉ぜるなり。やつは、よつの轉ぜるなり云々

と云つたことに端を發して、早く注意を惹いたが、ガベレンツ(註二)は「いつ」と「とを」との間にも同じ關係のあることを說いてゐる。オストロネジア語族の言語に於て、サモア・マレイ等で lima マラガシーで dimi その他の方言で yima とも sima ともなる五の意味の數詞が、「手」といふと同語であるやうに、數詞の構成が手と關係あることは往々例のあることであるから、わが數詞の倍加構成法を、兩手の指を同數づゝ並べることから來てゐると考へるのも、あながち牽强

とは云はれまい。

「ひと」は「ひた」(直)で、「ふた」はその倍數、「はたち」は又これから出る。「ち」は「箇」で助數詞。「みつ」は充實の義で、「今一つ」といふことか。「よ」は「いよ」「いや」と同義、「や」は「よ」の倍數であるが、もとは澤山といふ意味、「よろづ」はまた之から出る。「づ」は「ち」と同じく助數詞、「ろ」は添加した成分である。それゆゑ孰れも多數といふ意味に過ぎなかつたものが、一は八となり、一は萬といふ義となつたものである。「やそうぢ人」は八十氏人、「やほよろづの神」は八百萬をあてるが、たゞ多數の氏人、多數の神のことで、萬葉集の「鶴をやつかづけ」の如きもたゞ澤山の鶴のことである。それを八の意味に使ふやうになつたのは、佛經に八正道・八寒八熱・八百弟子・八萬由旬など、八もしくはその倍數を用ゐる語の多かつたことから來たものであらう。「いつ」の「い」は接頭語で、「つ」は「手」と同語源、片手の指の總數。その母音變化が「とを」で、その間にも倍數關係があると見て誤なからう。「いほ」「いそ」「いか」などを見ると、「い」に五の意味があるやうであるが、これは熟語となつた時、「いつ」の「つ」の省かれたものと見る方がよからう。itu-po, itu-so, itu-ka 等の連結を考へると、省略されたものと見て間違ひない。「ほ」(もとpo)と「も」とは音韻轉換、それを重ねて「もも」といふ。これも「ち」も、

もとたゞ多數を漠然とあらはしたものである。

「なゝな」[註二]は白鳥庫吉氏の說によれば「並無」で兩手の同數の指を並ぶることと能はざることと、「ここの」は「屈無」で兩手の同數の指を屈折することと能はざるか、又は一手の五指を屈し終りて最早この上屈折すべき指なきかを意味すると云はれたが、屈無はよいとして「なゝな」の「なな」に「並」の意味があるかどうか。「な」は「似る」と同語根の動詞「なす」(「海月なす漂へる時」「眞玉なす吾が思ふ妹」など)のあることから考へると、「似無」ではなからうか。「なむ」「ならぶ」はむしろ「似」から來たものであらう。

「はたち」「よそぢ」「よろづ」等の「ち」「ぢ」「づ」等は、「ひとつ」「ふたつ」等の「つ」と同じく助數詞で、凡てもとは一般の基數詞をあらはしたものである。

みそぢあまり二つのかたち(佛足石歌)

比叡の山をはたちばかりかさねあげたらんほどして(伊勢)

こものよそ枝をりびつものよそぢ(源氏若菜上)

なゝそぢのしほにも過ぎ(千載)

などその例であるが、後には「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」等、みな意

味が局限されて人の歳を數へる時にのみ用ひられるやうになり、今はその中の「はたち」「みそぢ」が殘つてゐるばかりである。その外には「はつか」「みそか」といふやうなものが、日を數へる場合には殘つてゐる。

わが國固有の數詞は、十以上の數を數へる場合になると極めて煩はしく、十一は「とをあまりひとつ」、または「とをまりひとつ」、二十一は「はたちあまりひとつ」又は「はたまりひとつ」といふやうな不便なものであつたから、漢語の數詞が移入されると共に、いつか淘汰されて後には使はれなくなつてしまつた。

「ひとつ」「ふたつ」の「つ」、「よろづ」の「づ」、「みそぢ」の「ぢ」等は皆助數詞であるから、これを除いた形が本來の數詞で、古くはそのまゝ

みたにふたわたらすあぢしきたかひこねの神ぞや(記)
たかさしぬをなゝゆくをとめども(記)
昔なゝの翁の寄りあひつゝ(東關紀行)
なゝの寶をやらん方なくてこそおはしますめれ(宇津保)

など單獨につかふこと、「ふたとき」「みつき」「なゝとせ」など熟語のうちにつかふ場合と同じ

であつたのである。

奈良朝時代に助數詞として見えてゐるものは、物の箇數を示す「つ」と「ち」、人の數をあらはす「り」、日數を指す「か」のごときものであつた。

みそぢあまりふたつのかたち（佛足石歌）

夫(セ)ななとふたりさ寢てくやしも（萬十四）

えみしを毗儺利(ヒダリ)もゝな人（紀）

近くば今ふつかだみ、遠くあらばなぬかのうちは過ぎめやも（萬十七）

その後、助數詞が漢語でも固有の國語に由つてでも、種々の種類を發達させてゐるのは、支那語の影響と考へるべきものゝやうである。

支那語では、助數詞は同音語の區別に役立つ意味から大いに發達してゐる。Hua は話でもあり畫でもあるが、句を加へて一句話といへば話を意味し、張を加へて一張畫といへば畫を意味することが明瞭になる。國語では助數詞は缺くべからざるものでもないが、漢語が盛んに輸入された結果、支那語の習慣が自ら之に伴つて影響したものであらう。固有の數詞に比べると、漢語數詞は便利であつた。それ故に固有の數詞は忽ちに驅逐され、漢語數詞が之に代つて大小種

種の數をあらはす爲に、現にわれ／＼の間に自由に使はれてゐる。

序數詞も固有のものが、「二つめ」「三つめ」など使はれることもあるが、漢語によるものが多數を占め、「一番」とか、「一號」とか「第一」とかいふやうな助數詞によつて現される方が多い。

日本人の意識には、基數と序數とは嚴密に區別されず、基數を現す數詞を以て往々序數を示すに用ひることは、古今を通じて同じである。「なぬかの朝」といへば正月七日で序數詞であり、「ななのたから」といへば、七種の寶のことで基數詞である。今日に於ても「昭和八年」といへば序數詞であり、「八年かゝる」といへば基數詞であるのと、趣をひとしうしてゐる。

註

（一）Gabelentz, Ueber einen Eigentümlichkeit des japanischen Zahlworts (Z. für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft, 7 Bd)

（二）白鳥庫吉氏、日韓アイヌ三國語の數詞に就いて（史學雜誌明治四十二年）

第五章　動詞

〔一〕活用とその成立

わが國の文法では、今日まで普通に動詞を活用から分けて、口語では四段・上一・下一・加變・左變の五種、文語では四段・上一・下一・上二・下二・加變・左變・奈變・良變の九種としてゐるが、活用といふことは、嚴密にいへば明瞭でない。

そもそも悉曇の知識の上に出來た五十音圖は、いつかわが國の音韻を網羅した音韻排列圖と考へられ、その上に五音相通といふことを論ぜらるゝことが久しかつたが、賀茂眞淵が動詞を五十音圖にあてはめ、初體用令助の名の下にその變化と法の意味を考へるに至つて、用言に於ける活用研究の端緒を開いた。この示唆により、その後宣長が、五十音圖の各行に各種の動詞を檢討して、動詞の語形變化を正しく認識することを得て、そのいはゆる二十七會の分類を得たが、その子春庭に至つて、列により韻を同じくするものを一つにまとめることが出來たために、動詞を左の四種の活に分類し得るやうになつた。

(一)四段　(二)一段　(三)中二段　(四)下二段

この外に變格をあげた。この活用研究の由來するところは、五音相通卽ち母音變化にあつたが爲に、この意味に於ける動詞の語形變化を觀察するには便利であつたが、四段を除いたほかの活用の動詞には、全く母音變化を持たないものがあるのみならず、この外に「る」「れ」といふ成分を持つてゐる。四段活用は純粹に語幹につく母音の變化である。二段活用・變格は四段と同じく語幹につく母音の變化するものもあり、中には一音節語である爲に、語幹そのものの母音を變化して語基を作るものもあるが、要するに語基構成上母音變化を成し、且必要に應じて「る」「れ」を伴ふものである。然るに一段活用は何ら母音變化を持たず、唯語幹そのまゝ若しくは「る」「れ」を伴ふことにより語基を形作つてゐる。それ故に語形の變化を活用といふならば、一段活用に於ては「る」「れ」が活用で、「き」(着)「み」(見)「け」(蹴)等の語幹は與らない。これを一段活用と云ふのは、四段その他の母音變化と同一に見たからである。むしろわが活用組織は、

(一)語基構成用母音の變化

(二)接尾語「る」「れ」の添加

の二つの異なる原則の上に立つてゐるものと云ふべきである。純粹に第一の原則によるものは四段活用・良行變格活用、第二の原則によるものは上一・下一活用で、上二・下二・加變・左變・奈變はその混合である。

こゝに於て問題となるのは、この活用組織がいかにして發達したかと云ふことである。母音變化の方法と接尾語添加の方法とは、全く別種の原則であるが、どうしてこれが同一民族の間に出來たか、異なる民族の混和によつて二つの主義が併用せらるゝに至つたか、前者がまづ在つて後者がついで生じたか、後者が先に在つて前者があとで生じたか。多くの學者は四段活用をわが國の動詞の原形と考へてゐる。すでに鹿持雅澄も（註一）「用言變格例」で、すべての用言は四段に活くのが常格で、その他の活用はみなこの四段活用の變格であるとし、それをすべて四段に活いたものゝ轉音として説明してゐる。ホフマン（註二）の日本文典も四段活用の動詞を動詞の基本とし、他の活用は四段活用に「有(アリ)」「得(エ)」「爲(シ)」などが複合したものと考へたらしい。金澤庄三郎氏（註三）も「日本文法新論」に四段活用と奈行變格とを除き、その他は悉く良行變格の「有(アリ)」及び之と同一語根で母音を變へた「得」及び四段から轉じた「爲」の複合、良行變格は四段の一種、奈行變格は四段に「有」の複合して二段言に轉じようとする半途のもの、四段活用こそ動詞の原形である

と云ふ說を述べて居られる。

（註四）アストンは動詞を三種に分ち、第一種即ち四段活用を原形とし、第三種即ち一段活用は語根が單音節であるから之を第一種と同じく活用させると、連用形以外は語根の母音を失ふから［r］音を挾んで之を防いだもの、第二種即ち二段活用に屬する「得」の如きも單音節の語根であるから、之と同じ方法で活用させたもので、第二類中［e］の語根のものは皆この「得」の複合である。［i］語根のものは比較的少數で、往々第一類にも活用するから、明かに轉來のものであるが、然し語尾の uru が果して「得」か、單音節語根の何か他の動詞から來てゐるかは疑問であると論じてゐるが、根本たる四段活用は今日の四段の終止連體同形であるのとは違つて、奈變が「しぬ」「しぬる」「いぬ」「いぬる」となつてゐるやうに、-u, -uru の二つに分れてゐたらうと考へた。

（註五）チエムバレンはこの說をついで、琉球語の研究から四段の原形を奈變の如きものと考へた。四段活用と二段活用とは一は否定形が［a］に終り、他は然らざること、一は「る」を以て終る連體形をもち、他は然らざることとに於て根本的に相違してゐるが、琉球語の動詞が唯一種で、すべてこの條件を具備してゐることを見て、琉球語が日本語と分れざりし以前の共同祖語の俤を保存してゐると想像したから、日本語の原形は四段活用で、しかも終止形と連體形と形を異にし

てゐる奈行變格の如きものであつたと考へたものであらう。琉球語の活用は唯一種で、日本語で四段活用である「とる」は、琉球語で、終止形 tuyung 連體形 tuyuru であり、否定の終止・連體は turang なのである。

母音變化の方法と接尾語添加の方法とは別種のものである。そこで一派の人は「る」「れ」の語尾をもつてゐる活用を說明する爲に、「ゐる」とか「うる」とか既存の語が母音變化の活用に膠着して生じて來たとして、その發達を說明しようとし、一派の人はこの二種の方法を兼ね具へてゐるものを原形と考へて、兩者はこれから派生したと說明しようとするのである。今現に在る語の膠着として、異質の活用を說明するところに、大きい不自然さがある。又國語の動詞の大部分を占めてゐる四段活用をさしおいて、これを僅かに殘つてゐる奈行變格の如きものから變化したと考へることも穩當ではないやうである。むしろ四段活用が根本の動詞で、奈變はそれに何らかの他の影響が加つて生じた一種の變體の活用と見るべきではなからうか。問題はもつと根本に遡らなければならない。こゝにまづ民族の混和と云ふことが考へられる。日本民族が異種民族の混和に成ることは、人類學者の一致してゐる定說である。しかも一體として日本民族をこの島に形作つたことが、太古に在つたといふこともほゞ一致してゐる。然らば言語の混

和と云ふことを考へることも、又その後の文獻に見うる形となるまでの語形の變化が、殆ど想像もできないものであつたと考へることも不當ではあるまい。余は四段活用の如き母音變化をもつて動詞の語形變化を形作る習慣を持つてゐる民族の言語に、他の接尾語の添加を以て活用としてゐた民族の言語が混和し、母音變化の動詞が優勢を占めたが、接尾語添加を原則とする動詞も純粹な形ではないが、國語の中に地歩を占めて永い世代の間に甚だしい變遷を經て今日あるが如き活用組織のものに統一されて行つたものと想像したいのである。下二その他の「る」「れ」活用が或場合に、母音變化を持つてゐるのは、本來の性質ではない。「る」「れ」活用の本質は、語基の母音は變らず、それが必要に應じて、助詞・助動詞に連り、連體形・終止形に於て特に「る」「れ」が膠着するだけのもので、その本質を今日に傳へてゐるのは、一段活用の動詞である(今の一段活用に屬する者の起源は別問題である)。語詞が形を變へず接辭を膠着することにより、語法的關係をあらはすことは、膠着語一般に通ずる特徴である。接尾語添加に母音變化の原則を加味したのが二段活用や變格活用であるが、語幹そのもの丶母音が變化して、それが活用形を成す動詞が二段活用・變格活用の中にのみあることは、注目すべきことである。「る」「れ」活用では、語幹が一定であることが本質であるならば、今日の一段活用の如く、「る」

「れ」活用はすべてに通じて、初めは語幹が一定してゐて、單に「る」「れ」を膠着するものでなくてはならない。今日の二段活用が母音變化を持つてゐるのは、言語混和の後に起つた現象である。今日二段活用に於て語基であるものは、もと二段活用のうちの「得」の如く或は一段活用の諸動詞の如く、凡て語幹であつたもので、形のつねに變らないものであつたに違ひない。從つて語幹に含まるゝ母音も一定のものではあるが、語彙によつて母音は異種であり、或動詞は[e]或動詞は[i]であり得ると共に、[o]もあつたと想像できる(活用形のうちには、加變以外は[o]がない。それは活用形の出來た時代には、まだ[o]は發達して居なかつたからであらう。然し四段活用にも、語幹には[o]がある)。加行變格活用が他のすべての動詞とちがひ、オ列に活用する形を持つてゐる異色のものであるのは、それがもと語幹の母音であつた爲である。過去の助動詞が續く時、「來し」「來しか」と云ふ形のあるのは、連用形も[o]であつた名殘と見える。或は[o]といふのは、當初は[u]との中間音であつたと考へれば、「く」の出たことの説明が容易になる。

「見る」「似る」には、「もる」「のる」といふ形がある。

人言のしげき間見るも會はずあらば終には子らが面忘れなむ(萬十一)

みもろは人の見る山、下邊には馬醉木花さき末邊には椿花さくらぐはし山、泣く兒もる山(萬十三)

似ニルニタリ(類聚名義抄)

此神形貌、自與天稚彥恰然相似(記下)

眼如八咫鏡、赫然似赤酸醬也(同)

「もる」「のる」は四段活用に類推してゐるが、「見る」「似る」と同源のものであつたに違ひないから、この「る」はもとは「る」「れ」活用の「る」とおなじもので、語幹が「も」「の」であつたらう。さうすれば加變と共に、オ列の語幹に接尾語を添加する「る」「れ」活用の動詞が、外にもあつたことが想像できる。しかるに後に母音變化の原則は、「る」「れ」活用の動詞の上にも勢力を及ぼして、語幹の母音を變化させることが、「る」「れ」の添加と共に、助詞助動詞につゞく語基を作る要素となつた。それ故に、語幹が二音節以上の動詞は、最後の音節の母音が變つた爲に、四段活用の場合の語基に比すべきものとなつたが、語幹が一音節であつた動詞は、語幹そのものの母音變化が、他の動詞の場合の語基構成母音變化のかはりとなつた。接尾語添加の動詞の上に生じた母音變化はどう云ふものでおこつたか想像できないけれども、元來母音變化を動詞活用の原則としてゐた民族の言語でないから、その變化する母音の數も異にし、言語混和の結果生じた變化であるから、はじめは不規則なものであり、活用の種類も多樣であつたと想像し得

る。これらのものと、今日ある二段活用の動詞との關係は複雜であらう。後に云ふ如く、比較的新しい時代に四段活用から變つて來た二段活用のあるやうに、個々の動詞の起源は雜多であらうから、今日の二段活用の起源を凡て之に求めるのではない。

接尾語添加の動詞の原形は想像できないが、何らか語幹にラ行音の接尾語を添加したものとだけは云へる。異種の言語を有するものが、合して一個の民族を形作る場合には、言語は統治の位地にあるものゝ言語に同化されることが通則であるが、同化された言語からの影響も亦殘る。又被統治者の言語の勢力がつよくて、それが國語として殘る場合には、殊に統治者の言語との鬪爭の迹を殘すことが著しい。英語が、ノーマン・フレンチ又はラテン・フレンチの借用語を多く持つてゐることは衆知のことであるが、之が文法形式にも往々影響して、agreeable, excusable, variable などの ible, able などの接尾語は、廣く固有の英語にも擴張されて、bearable, eatable, drinkable などを作り出し、複數語形として、英語固有のものは mouse, mice などの母音變化の方法であるのが、今日は多く s を添加する形式を取つてゐる方が普通である。これは初めは借用語のうへに起つて、固有の語彙にも及ぶもので、借用語が多數である時に見る現象である。琉球語の動詞の活用がたゞ一種であるのは、言語の混和も甚だしくなく、遠く群島に

孤立してゐた爲に、容易に統一した形が發達したものであらう。

國語の主要な動詞が母音變化を原則とする四段活用であつたことは確かである。助動詞は、もと獨立の動詞であつたものが、形式語になつたものに違ひないが、たとへば未來の助動詞の「む」「む」「め」のほか、「行かまく」「行かまほし」等の如く、「ま」と云ふ形があり、否定の助動詞は、後には「ず」「ぬ」「ね」と活用するが、本來「ず」と「ぬ」「ね」とは別の系統のもので、古くはナ行にのみ活いたものが、サ行に屬する否定の助動詞と別に在つたに違ひない。

新田山、峰には着かなな(萬十四)　　　　盜まく知らに(紀)

然らば、是は「な・に・ぬ・ね」と變化したのである。使役の助動詞も、後世下二段に活かせるが、平安朝の言語にも見える「吹かさぬ」「ならはす人」等、四段に活いたのが古形で、奈良朝時代にも尊敬の助動詞として活動し、四段活用であつた。助動詞に殘つてゐる母音變化は、必ずしも四段活用と變化の形式を同じくせず、その用法接續等もまた等しくはないが、四段活用はそれらの種々の母音變化に職能が聯想して、次第に一定の規則を生じて來たものであらう。

二段活用はどうして生じて來たか分らないが、接尾語添加を原則とする動詞が、母音變化を原則とする動詞からの類推で、種々の母音變化を語基の上に生じ、その母音の種類も複雜であ

つたが、やがて類推によりその亂雜のうちに統一を生じ、時を經て上二・下二といふ種類に纏つて行つたものと考へる。その類推に洩れたものが、左變加變の如きものだらう。左變は「せ・し・す・する・すれ」と活いてゐるが、「し」が「せ」となれば、下二段となり、「せ」が「し」となれば、上二段となる。加變は、「こ・き・く・くる・くれ」と活いてゐるが、「こ」が「き」となれば、上二段活用になる。

接尾語添加の動詞から二段活用となつたと云つたが、それは言語混和の時代の一般的傾向を云つたもので、二段活用が出來てから後の變化に於ては種々のものがあつたことを拒むのではない。四段活用から二段活用にかはつたものが多いかとおもへば、四段活用から二段活用にかはつたものゝあることは、文獻の上でも明かに見える。上一段活用のあるものが、上二段活用から轉じたものもあるかも知れない。日本書記卷七に、

熊襲梟帥有二女、兄曰市乾鹿文（乾此云賦）

と見えて、乾を「ふ」と訓ませてあり、同書卷五に、

委倭迹姫命仰見而悔之急居（急居此云菟岐于）

と見えて、「居」を「う」と訓ませて、いづれも上二段である。橋本進吉氏は（註六）上代に於ける特殊假

字遣から、乾にあてた假字を論じて、乾が上二段であつたことを論じ、我背兒爾吾戀居者吾屋戸之草左倍思浦乾來（萬十一）の浦乾來が、「うらぶれにけり」と訓むべきことを、論じて居られる。靈寸春吾山之於爾立霞雖立雖居君之隨意（萬十）の如きは「たつともうとも」と訓んだものに違ひない。又接尾語添加の動詞から出來た四段活用もあらう。さきの「見る」「ゐる」の如きものである。又同じものから良變にかはつたものもあらう。「居り」がそれである。

要するに、國語の動詞の原形は、一は四段活用で、奈變はその變格であり、他は接尾語添加の動詞で、それが母音變化の原理を取入れて、上・下二段を生じ、上一段活用の動詞は、もとの接尾語添加の動詞の俤を殘すもので、加變・左變は二段活用の別格である。

註（一）「おそらむ、かくらむといふことをおそれむ、かくれむと云ふに、第一位を第四位に轉じたる變格なるべきか（九）」
「爲はさむしすせと四段に活かすべき言なるに、將レ爲をさむと云ずしてせむとのみいへり。其はさむと云ては聞よからぬが故に第一位のさを第四位のせに轉じたる變格なるべし」（十七）
「居植ゑもとはすゑむすゐするすうすゑうわむうゐうるううううゑと四段に活く言なるを、すゑむうわむと云は聞よからぬが故に、わをゑに轉してすゑむうゑむと云（十八）」―（以上、用言變格例）―

（二）Hoffmann, Japanese Grammar. 217, 234, 240

（三）金澤庄三郎氏、日本文法新論　一四一―一五四

（四）Aston, Grammar of the Japanese Written Language, 2nd ed, (1877) p. 98-99.

（五）Chamberlain, Essay in aid of Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, 1895, P. 139—146.

（六）橋本進吉氏、上代に於ける波行上一段活用に就いて（國語・國文 創刊號）

［二］活用の變遷

春庭が動詞の語形を母音變化によつて分類したことに由つて、動詞の活用には四種の活のある事が分つた。同時に各語形が接續する助動詞・助詞も明かにされたが、四種の活がそれぞれ母音變化の數を異にするに從つて、各語形の承ける助動詞・助詞も一定しない。それで各語形をそれぞれ表はす法と接續する助動詞・助詞との關係から見て、同一職分のものは同一段に統一する時、六種の語形を區別することが出來る。春庭の活用研究を受ついだ義門は、かくして將然言・連用言・截斷言・連體言・已然言・希求言の六言を得た。今日の未然・連用・終止・連體・已然・命令の六段もしくは六形はたゞその名稱を多少變更しただけである。こゝに於て今日の活用研究の基礎は確定せられたのであつて、この語形の變化を目安として、文獻にあらはれた種々の用言はそれぞれ何活用に屬するものか判斷されてゐるのである。それ故に文獻にその例の乏しいものは、その何活用に屬するか分らぬものも少くない。たとへば、「たとふ」とい

ふ動詞は、「たとへて」「たとへば」といふ例で、「たとふる」といふのは少いが、拾遺集に「みな人の命をつゆにたとふるはくさむらごとにおけばなりけり」、信明集に「ほどもなくやみぬるあめにたとふるはいかに悲しきなみだなるらん」とあるから、下二段であることは確かであるが、又「たとひ」と云ふ例も多数であるから、四段にも活くものと思はれる。然し四段として活くその他の形が無いから、確かなことは分らない。義門も「何れの書にかありけん花はいまくすおたれさたとはばといへる事ありしやうにも覺ゆればなれど慥ならず」と云つてゐる。大日本國語辭典にも「たとふ」の條に、他動詞としてあげ、この語の活用に適當なる用例なけれど、たとひと名詞法にいへば存し置くと斷つてゐる。

八衢が活用形を段によつて排列し、之に接續する助詞・助動詞を檢して、之によつて動詞の所屬を調べたときは、

> さるは神代よりおのづからさだまりありて、今の世に至るまで、うつりかはることなく、いさゝかもたがひあやまるときは、其ことわからず、そのこゝろきこえがたきものにしあれば

と云つて、神代より不變のものとし、

> かくて古への人はおのづからわきまへて用ひたがふることはなかりつるを、後の世となりてはやう／＼

　　みだれゆきつゝ誤ることのみおほくなりぬるを

と云つて、今の世の用法を訛つたものとしたが、義門が之を受けついで、あまねく用例を調査して見ると、必ずしも八衢の說の通りではないことが分つた。そこで「指出廼磯」に、「すべて古書を見るに、必八衢にのみ泥みてはあるべからずとは、我も既くよりおもひ居るは」といひ、「磯の洲崎」に「詞八ちまたに神代よりおのづから定ありて云々といへるなどは全くしかなりとは思はねど」と頻りに疑念に惱んだが、假字遣に定格あることゝ比較して、「詞の活用といふことも亦然也さはあらずや」と論じ、てにをはに於ける古今の相違を「玉緒繰分」に、「たゞこの例の多少の今古互に物に見えざるのみの事と思ふべきなり」と解釋したと同じ態度を以て臨み、その歷史的變遷を明かにすることができなかつた。

今日に於ては、平安朝の文獻にある活用が活用史上の一事實に過ぎないことは學問上の常識である。古今を通じて變らないものゝ存在を考へることの理由のないことは勿論、平安朝の言語もまた變遷途上の一顯現で幾多の不規則なものゝあつたことは想像するに難くない。八衢のいはゆる四種の活詞の如きは、畢竟大體の概括である。われ〳〵は奈良朝に於て動詞にはいかなる活用が存在し、それがいかに變遷して、今日に至つてゐるかを觀察しなければならない。

八衢にあげた動詞を統計すると、

四段　九八〇　　その他　五〇四

になつて、わが國語總體のうち四段が優勢であるが、この傾向は奈良朝でも同樣であつて、且後世、下二段・上二段であるものが當時四段であつたものが少くない。

加行では、「放く」「著く」など。「はく」は、

弦作留わざを知るといはなくに(萬一二)

牛にこそ鼻繩波久例(萬一五)

梓弓つら弦取波氣(萬二)

のやうに、「はけ」「はくる」「はくれ」とも活き、「さく」は、

紐とき佐氣弖(萬二)

紐とき佐久流ときちかづきぬ(萬二〇)

親は佐久禮ど(萬一四)

のやうに、「さけ」「さくる」「さくれ」とも活くが、

つら波可めかも(萬一四)

見も佐可ずきぬ(萬三)

のやうに四段にも活いたのである。左行では「馳す」「寄す」など。

さゞれしに駒を波佐世弖(萬一四)

日ろ豫嗣爾豫嗣より來ね(紀)

あぜそも今宵與斯ろ來まさぬ(萬一四)

「馳す」は分らぬが、「寄す」は下二段にも、

風のむた與世くる波に(萬十四)

かむさぶるあらつのさきに與須流浪(同一五)

はまなみはいやしく〲に高く與須禮ど(同二〇)

の如く活く。多行では「隔つ」が四段活用と見えるのは、

白雲の千重に邊多天留つくしの國は(萬五)

天の川敝太而禮ばかも(同八)

とある。これも、

やすの川なかに敝太弖て(萬一八)

とあるのは下二段にも活いてゐたことを示す。麻行では「とゞむ」。

行く船を振等騰尾かね(萬五)

ときのさかりを等々尾かね(萬五)
よのことなれば等登尾かねつも(同)

下二段活なのは、

沖つ洲に船は等杼米む(萬一四)
こゝだくに君が見せむとわれを等登牟流(同一八)

羅行はもつとも多い。「隠る」「恐る」「忘る」「垂る」「觸る」「離る」など、いづれも後世は下二段であるが、

青山に日が迦久良婆(記)
みやま我倶利底(紀)
かしこみうけたまはり懼理います(續紀宣命)
いもは和素邏珥よのことぐも(紀)
白髮の上ゆ涙多利(萬二〇)
こぞこそはやすく肌布禮(記)

これらも、

つくば山可久禮ぬほどに(萬一四)

吾は和須禮ず家をしぞ思ふ(萬十七)

まよかき濃にかき多禮(記)

と用ひ、前例妹は忘らにの同じ句が、古事記には妹は和須禮士と下二段に用ひてある。

これと反對に、後に四段のものが、奈良朝で下二であつたものとしては、

うじ多加禮とろゝきて(記)

と云つてある如き例もあるが、一般には奈良朝に四段であつたものが、當時下二段に活く例も生じ、平安朝以後、下二段專用に變つたものが多い。そのうちには「恐る」の如く、長く四段として活いてゐたものもある。院政時代にも、

綸言ヲ奉ル職事ハ極テ恐リ思ヒケレドモ(今昔)

御國いみじくおぢおそり給ひけりとなん(宇治拾遺)

あやまれなんとおそりおほして(同)

四天王ノ此經一句一偈タモテムモノニハ百由旬内ニヲソリアラセントチカヒ(法華百坐)

魔エン魔界ノヲソリモ候マシキ(同)

の如く、依然として四段系統の用法が多い。平安朝に於ては、下二段としての用例がないでは

ないが、むしろ奈良朝時代の引續きとして四段の形式が勢力を占めてゐたと見るべきである。

「忘る」の如きも

佗しさの千種の數も忘られぬべし(竹取)

花かたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらむかずならぬ身は(古今)

やどりせし人のかたみの藤袴忘られがたきかににほひつゝ(同)

忘らるゝ身をば思はずちかひてし(大和)

人にわすられて(後撰雜上)

忘られぬ心ぞ今はうらめしき(古今六帖)

の如きは、やはりまだ四段としての用法が存在したもので、之を口語法別記に「忘れられ」の約として説明してゐるのは、歴史的變遷を無視したものと云はなければならない。

「埋む」のごとき、下二段となつたことの極めて新しいものもある。奈良朝時代には用例がなく、平安朝時代には、

散る花は道見えぬまでうづまなむ別るゝ人も立ちやとまると(拾遺)

西のわたどのゝ戸より出づるみぎは近ううづませ給へるを(源氏梅枝)

うづみたる火おこし出て、火桶參らす(同幻)

の如く四段で、中古・中世を通じて同じ形である。院政鎌倉時代の例、

　僧此レ若シ死人ヲ埋メルガ活テ云フカト思テ掘テ見レバ(今昔十二)

　手すさびに問ふ灰占のあたりまでうづめど消えぬおもひなりけり(夫木)

今昔のは存在態で、下二段の一段化と誤解してはいけない。室町時代にも

　母ト子トヲ并テハ、エ養マイホドニ、子ヲ埋ミ殺イテノケウソ(蒙求抄六)

　穴ヲ一掘レハ、二ノ穴ヲ埋ムホトアルソ(史記抄二)

のやうな形しか見えない。

奈良朝時代、四段活用であつたものが、平安朝時代に上二段となつたものがある。「もみづ」は萬葉集には、

　子持山若かへるでの毛美都麻氏(萬、一四)

　秋風もいまだ吹かねばかくぞ毛美照(同、八)

のやうに四段であるが、この時代にすでに、上二段への變化はあらはれてゐる。「生く」も奈良朝時代は四段で、

　伊家流しるしあり(萬、一八)

とあり、平安朝時代にも、

いかまほしきは命なりけり(源氏、桐壺)

と云つて四段であるが、院政時代以後、上二段となつた。蜻蛉日記に「生くる人ぞいとつらきや」と見えるのは珍しい例であるが、その頃にも多少の變化は起つてゐたのであらう。

「和ぐ」と云ふのは、反對に奈良朝時代に上二段であつたものが、後世四段になつたもので、奈良朝時代に

海つ路の名木名六ときも(萬、九)

わが心どの奈具流日もなし(同、一九)

など、凡て上二段であるが、平安朝に於てすでに、

かずならぬ世をうきふねの寄るべなみひゞきのなだのなぐをこそ待て(貫之朝臣集)

のやうに、四段になつてゐる。八丈島方言その他に「凪ぐ」を「なぎる」と云ふのは、古い形が殘つてゐて、後に一段に轉じたものに違ひない。

言語は常に變化するものであるから、活用にも不規則のものゝあるのが當然である。

「なずらふ」は、一般に下二段であるが、

かへりくる道にぞ今朝は迷ふらむこれになずらふ花なきものを（後撰）

うちのおとゞになずらふ人なしかし（源氏常夏）

と云ふ例を見れば、四段としての形もあつたことを認めなければなるまい。「わぶ」も

夕ぐれはたれもさのみぞ思ほゆるまちわぶ君ぞ人にまされる（和泉式部）

の如き四段の例があれば、上二段とのみは片付けられない。

「そほつ」も

あさみにや人はおり立つわがかたは身もそほつまで深きこひぢを（源氏常夏）

の如き例があり、不規則なものと云はなければならない。

「さすらふ」にも四段の形がある。

あるまじきさまにさすらふたぐひ（源氏總角）

ゆきさすらひて（金葉集）

「まなぶ」は院政鎌倉時代に上二段に活いた。

此の歌の道をまなぶることをいふに、唐國日の本のひろきふみの道をまなばず（千載集序）

「たゝふ」が同じころ四段に活いた例がある。

きよみ川いつるみなとにしほみてばせかれてたゝふ浦の入うみ(夫木)
五月雨のころにしあればあら小田に人にまかせ我水たゝひけり(山家)

かくの如く、各時代に不規則な形があるから、用例の限られてゐるものゝ如きは、之を何活用と決めてしまふことは危險である。例へば「こぷ」(掘)の如きは、

天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而(古事記)
こぞの春いこじて植ゑしわが宿の若木の梅は花さきにけり(萬、八)
島國の淡路の三原の篠さ根こじにいこじ持ち來て(琴歌譜)
秋の野は根こじにこじて持ちぬとも(古今六帖)

の如き、連用形の用例しか見えぬ。これを以て見れば四段の動詞とも上二段の動詞とも見られて、いづれとも決定することが出來ないと云はなければならない。

活用の種類から云へば、奈良朝時代には下一段活用はない、「蹴る」と云ふ下一段活用の動詞のあらはれたのは、平安朝時代で、奈良朝時代に下二段活用に活いてゐたものゝ變化である。從つて奈良朝時代の動詞活用の種類は八種である。日本書紀に見える

蹶散、此云俱穢簸邏々箇須

はワ行下二段活用である。それ故に當麻蹶速はクヱハヤと訓まれてゐる。平安朝時代には、又ヤ行下二段活用としても見えてゐる。

蹶鞠世間云末利古由(マリコユ)(和名抄)　蹢万利古由(コユ)(新撰字鏡)

の如きはその例である。「クヱ」「コユ」ともいつたやうである。類聚名義抄に

蹴蹶蹷　クユ　コユ

とある。この形は院政鎌倉時代にはクヱルと轉じたやうだ。

蹢クヱツ(類聚名義抄)　蹴クヱツ(色葉字類抄)　蹶クヱツ(字鏡集、寛元本、白川本)

と見える。「ける」もすでに、落窪物語に、

かの典薬の助はけられけたりし病にてしにけり

からけたつるわかとのも中納言とおはしますなり

只今の太政大臣の尻はけるとも

さとよりて一足づゝける

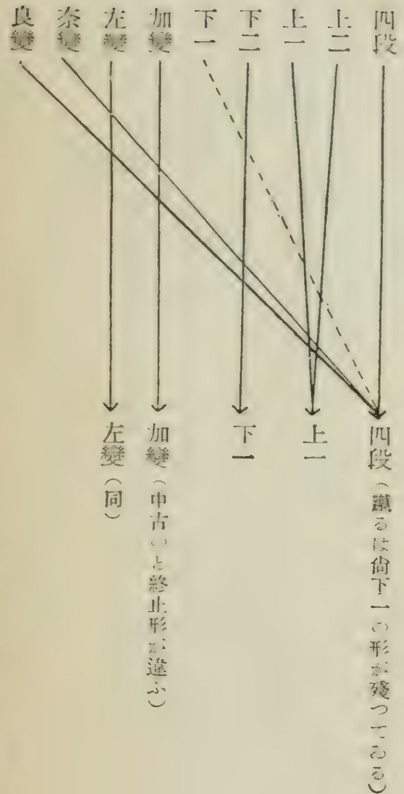
などてあまりけさせけむ

など見えて居る。平安朝に於て動詞の活用は九種となつた。これが又今日の文語の動詞の九種

の活用である。今日の口語の動詞の活用は、

四段　上一　下一　加變　左變

の五種であるから、中古の活用のこゝに至る變遷を表せば次の如くである。



この變化の根柢を成すものは、二段活用の一段活用に變つたことと、諸活用一般に連體・終止が同形になつたことである。

上二段活用が上一段活用にかはることは、特殊の動詞には古くからその例があつた。

八拳須至于心前啼伊佐知伎也(記)

何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流(同)

唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故白都良久(同)

とあるのは、「いさちる」といふ動詞で、次の

陸奥國荒備流蝦夷等乎(續紀宣命)

とて「荒びる」といふのがあり、また、

心悪子乃心荒比流(祝詞)　　井南加比流(日本靈異記)

とも見える。その他「ひる」「ゐる」などが、同じく上二段から轉じて出來た事は前に述べた。

前節に述べたやうに、母音變化の活用原理と、「る」「れ」の添加の活用原理とは根柢に於て別種のものであるから、その相混ずるところに、一段活用の如き、加變・左變の如き、兩種混淆の活用形式を生じたもの、早晩兩極に引かれて、同種を統一して兩々相對立すべき運命のもとにあつた。卽ち、四段活用類似のものは四段活用として統一され、「る」「れ」活用を以てゐるものは、母音變化をすてゝ自己の原理に歸一すべきものであつた。それは畢竟複雜を避けて簡單を求め、亂雜を去つて統一につく類推の心理である。上一段活用が上二段活用から生じたことや、特殊の語彙には、上二段に活用すると共に、上一段活用化してゐるものゝあることは、

その變化の方向を早くから示してゐるものと云ふべきである。もと／＼二段活用の如きは早くあつた母音變化の原理に、「る」「れ」活用の原理が加つた爲に、一時生じたもので、平安朝に於て既にあらはれてゐる上一段活用・下一段活用のあとを追うて、時を追うて一段化してゆく途上に在つたものである。後に下一段活用の「蹴る」が四段活用にかはつたことは、これは又別種の理由があるに違ひない。それ故に平安朝に於て既に二段活用・加變・左變の終止形は、しばしば連體形の如く、「る」といふ語尾を生じてゐる。卽ち一段活用の如く、終止「る」、連體「る」、已然「れ」といふ形式となつて、「る」「れ」語尾を有するのは、大同團結せむとする傾向を示してゐるのである。

大方にさみだるゝとかおもふらむ(和泉)
まくるとも見えぬものから(同)
つゆ年ふるべくもあらず(同)
常よりも物あはれに覺ゆる(同)
つとめて(歌)などきこゆる(同)
まいておとがひほそく愛敬おくれたらむ人はあいなうかたきにして、御前にさへあしう啓する(枕)
火をけのはたにあしをさへもたげてものいふまゝにおしすりなどするらめ(同)

これは一端を擧げたものだが、かゝる例が極めて多い。かゝるものを或ものは轉寫の誤として訂正してある本もあるが、それは言語を固定して動かぬものと考へることから來る偏見である。後世に至る變化は、徐々として起り、その起ることも遠いものであると考へるならば、これらのものゝ正體も分つてくる。文部省の「現行普通文法改定案調査報告」に、助詞の「と」を承ける場合を擧げて、「搜ラバ其夥シキハ推シテ知ルベシ」と云ひ、「ものなり、ことよナドノ省カレタルモノノミナリ」と解してあるが、むしろ一般に連體形と終止形との同形とならうとしてゐる現象の顯現と見る方が正しい。

この現象は動詞・助動詞を通じて院政鎌倉時代以後一層著しくなる。

今一人の御息所は、いとやさしくおはせし。(大鏡)

されば參る下人もいみじういそがしがりて進みつとふめるといへば(同)

汝ヂ其後ハ何ニシテ世ニ有ラムト爲ルトテ、尙合セムト爲ル(今昔、三〇)

如レ此ニシテ既ニ一年ヲ經ル(同、一〇)

妻ヲ二人持テ其レニ蠶養ヲセサセテ糸多ク儲ケル(同、二六)

カノ燈臺鬼ヲ見給ニ、手ノユヒヲクヒサリテ血ヲハタシテカキタル(傳康賴自筆寶物集)

コノ心ヲヨミテハムヘルトソ承給侍シ(同)

夜打強盜山立海賊ナムト申テアサマシキコト、モ侍メル(同)

林ヲ焚テ獵時ハ、多クノ獸ヲ得ルト云ヘ共(平家、七)

我レハ近ク被レ失スルト思召スゾ(同、三)

哀其ノ馬ハ、一昨日モ候ヒシ、昨日モ見エテ候、今朝モ庭乘シ候ツルナト、日々ニ申ケレハ(同、四)

其氣ニテヤラン、是ハイタチニヲツル(吾妻鏡四)

室町時代に於ては、終止と連體が完全に同一になつてしまつた。之と並んで母音變化の原理と、「る」「れ」添加の原理とを對立に導くべき〔e〕〔u〕韻い〔e〕韻一個となり、〔i〕〔u〕韻の〔i〕韻一個となることも、平安朝から院政時代に亙つて次第に多くなつてゐたことは、各種の辭書の訓や歌學書によつて想像される。例をあげると、

和名類聚抄、毛群部獸體　䶑、字世流、以レ鼻動レ物也
類聚名義抄　闔　トヂル　蹻　クエル　淪　カヘル　更　カヘル
童蒙頌韻　䶑　ウセリ
伊呂波字類抄　經　ヘル　淪　カヘル　蹴　クヱル　總　フサネル
和歌初學抄　糸　へる(綜)
古今集序註　ヨミタカヘルコトモアルベシ

など見え、かゝる語形の文學の上にあらはれないのは、口語に於ける變化であつたからであらう。鎌倉時代には、

字鏡集　墮　オチル　耄　ヲイル　渝　カヘル　溼　ツユノタレル

など字書に同樣の形の見えるほか、

いせ島や月のひかりのさびる浦は明石には似ぬ影ぞすみける（山家集）

老がよのふけるは月にながめせし人めもしらず涙落ちけり（萬代和歌）

歌は、秀句を思ひえたれど、本來いひかなへるがよきなり（無名抄）

ヒジリ還ラザリケルコソ、元啓ガ父ニハヲトリテ覺エレ（沙石集）

など文學の上にも、口語の自ら影響したものが見えて來た。室町時代に至つて、この現象は口語としてはよほど進んでゐたと想像される。狂言記には、次の例など見える。

湯をかける如く（栗田口）　扇ぎ除ける如く（同）　聲も枯れる（同）

締めるによつて（末ひろがり）　戯れるを以て（同）

出家を供につれる（惡坊）　傘を吳れるぞ（同）　衣を吳れるぞ（同）

よう切れる太刀で御ざる（武惡）　涙をとめるぞ（同）　斯うと云ふてくれるならば（同）

動詞だけについて見れば、二段に活く舊い形よりこの方が多い。江戸時代になつてからの書

き改めもあるかと思はれるが、必ずしもさうばかりとも限らない。一方抄物を見ると、

四千里ニ聞エルホトニ、セヨトユイツケラレタソ(桃源抄一)

コチコソ生具ヲヒロケウスレ、住持ノヒロケルハワルイソ(同三)

袞ハ龍ノ頸ヲマゲル貌也(錦繡段抄五)

ソノマヽ蓑ヲ衣ナガラ、日夜ニソトフセル也(中華若木抄下)

一聲ナレトモ、多クニ聞エテ碎ケルヤウナソ(三體詩三)

の如きは稀であつて、

腰間ニハ百箭ヲヲビ、臂ニハ双刀ヲカクル也(中華若木抄上)

マドロメバ夢ヲ見テ聊カヲボユルナレドモ(同)

敵ノカタヘ見ユルヤウニ旌旗ヲアゲテ(同)

百千ノ船ドモニ火ガツイテ燒クルホドニ(同)

春雨ノ中ニ絲ガノブルホドニ、ミス〳〵柳モ枝葉ガノビテ(同)

のやうなものばかりであるのみならず、文祿年間飜譯の天草本伊曾保物語や平家物語にも、一段化した形がほとんど見えないのは、まだ二段活用の形をもつてゐる方が品位あるものとなつてゐたからであらう。

天下ヲトラントノハカリコト運ラスル也(中華上ノ二)

のごとく、四段動詞の「めぐらす」を下二段活用の如く用ひたごときものゝ見えるのは、一段化せんとする動詞をつとめて二段活用の古い形で語らんとつとむる結果、四段動詞にまで應用した一種の類推ちがひ (False Analogy) であらう。江戸時代にも、

敵左衛門は大勢めしつるゝ(元祿歌舞伎、兵根元曾我)

尋ぬる敵なければその屋敷も出る(同、京ひながた)

の如く、二段活用は相當にあるが、文政年間の「假字遣轉考」(井上信好)には、東言と京言とを對照し、

東言	體言	こえ(越)	用言	こえる(越)	京言	體言	こえ(越)	用言	こゆる
同		もえ(萌)	同	もえる (正	同		もえ(萠)	同	もゆる (邪
同		うゑ(餓・植)	同	うゑる	同		うゑ(餓・植)	同	こゆる
同		すゑ(居)	同	すゑる (正	同		すゑ(居)	同	すゆる (邪

とし、東言を正しい言ひ方とし、京言を正しくない言ひ方としてゐるのは、時代の變遷を示してゐるもので、同時にこれは一段化の東方で早かつたことが分るし、又關西方言では二段活用の形式がこの時代までも現に行はれてゐたことを示してゐるものである。

(註一)湯澤幸吉郎氏が抄物について調査された結果、上二段活用を上一段に用ひたのはイキル一語、下二段を下一段に用ひたのは「無いではないが全體から見れば極めて少い」といつて、十一語を擧げて居られるのは確かにさうに違ひないが、それは上に述べたやうな理由によるもので、俗語としては相當多くなつてゐたのでないかと疑はれる。抄物と比較して西洋人の語學書とてかゝれた文祿舊譯伊曾保や平家に少いのも、この間の消息を語るものではなからうか。又氏の報告だけでは上二段の上一化が下二段の下一化よりも少いやうに聞えるが、之を今日の方言の分布と比較して見ると、實は反對のやうである。上二段の上一化した例のあまり見えてゐないのは、上二段の動詞の總數が少い爲に、用ひられた場合の少い結果ではなからうか。下二と上二の總語數はかりに八衢に擧げてある語數で比較すると、一は四〇二、他は六七の割合になつてゐる。用例の多い少いだけでは、下二の下一化が上二の上一化と比較して多かつたとはいはれないだらう。

(註二)東條操氏が、室町時代と江戸時代との言語變遷を、土地の上にそのまゝ移してゐるのが、本州の方言と九州の方言であると云つて居られるが、それは音韻・語法萬般の現象の上から見てよく中つてゐるが、九州に於ては上二段活用を上一段として用ひてゐる地方は廣く、下二段を

下一段として用ひてゐる地方は狹い。之は移して室町時代の兩者の關係を考ふるに參考となるだらうとおもふ（國語調査委員會口語法分布圖參照）。

「天正日記」には一段化したのが、

はれる　めしつれる　哭れる　たをれる　知れる　とめる　定める　やける　あげる　くづれる　ぬける

の十一個で、晴れるの如きは六十八個あつて皆一段。尙二段の形を殘してゐるのは、

定む　付く　いづ　なだむ　はじむ　わかる　よす

の七個、「出る」「上る」「付る」等書いたのは、孰れだか分らぬもの。上二段活用の動詞の出てゐるものはたゞ一個で、「おりる」と云ふ動詞だけである。これも上二段の數が少いから使はれることも少く、從つて上二の上一化と下二の下一化との先後は分らぬと感ぜしめる一つの例とも出來る。然し二段の一段化はこのごろは大分多くなつてゐたこと丈は明瞭らしく、狂言記は口語法別記に、

狂言記の事に就ては、狂言は、謡より古いもの（脇師をあどと云ふなど）のようだけれども、一旦中絶して豊臣氏の頃、再興したものらしいから、用語は天正の頃のものであらう、因て其頃のものとした

と云つてあるが、その用語を天正頃のものとすると、狂言記の二段化の多いのとこれは大體一致するものといへる。

「つる」「れ」添加の原理に對する母音變化の原理は、奈行變格活用を早く四段化しようとした。既に鎌倉時代にも、

命ハ限アリ恩ニハ死ヌ習ナレハヤ(平家延慶本)

と見え、室町時代には、次のやうに見える。

始メト云フハ死マサキノコトソ(蒙求抄六)

他のすべての活用に於ては連體形が終止形を同化してゐるのに、この活用のみその反對なのは、奈變が母音變化として極めて四段活用に類似してゐたから、四段活用に類推して母音變化の語類に統一されたものである。

今日に於ては、奈變を四段としてゐるのは、殆ど全國的で、たゞ中國・四國・九州等に間々「ぬる」「ぬれ」の二つ又は一つの形を殘してゐるのみである。

良行變格活用は、終止形がイ例である點に於て四段活用とちがひ、中古以前には

人さはに入り袁理とも(記)

かく戀すらば生けるしるしあり(萬一八)

女をば奥におし入れて、男やなぐひをおひてと口にをり(伊勢)

のやうに用ひてゐたが、室町時代には四段に轉じて

キツネノワキニ白毛カアル(蒙求抄七)

此僧兩人ノ云イヤウヲ擧ニ似馬祖ニニシタハ、此二子ホトハ眼カアル(碧巖抄、八)

前代ノ者カ盜人テヲルナント云テ(百丈清規兩序)

上に猿奴があがつてをる(狂言、柿山伏)

この時代の博士家訓點を傳へてゐる六臣註文選に、

世居(ヲレリ)ニ東裔ニ　諸賢處(ヲレリ)ニレ之

など、「居れり」とあるのは、「居る」が四段化してゐた爲に外ならない。「侍り」は次の例のやうなものから見ると、すでに院政鎌倉時代に四段活用化してゐたものだらう。

下シ畢テ煎リ焼ナドシテ試(コヽロミサ)セケレバ、事ノ外ニ侍レリケリ(今昔一九)

以上四段活用即ち母音變化の原理でゆくものと、一段即ち「る」「れ」添加の原理によるものと、二つの大きな種類にわが動詞は統一されようとしてゐるのに外れて、尚一種の變格を殘してゐるのが、加變と左變とである。

加變は一般には、「こ・き・く・くる・くれ・こい」と活用してゐるが、方言によつては、

きよう(東京府、群馬、栃木、茨城、福島、山形、青森、山梨、長野、岐阜、香川、大分、宮崎諸縣の處々)

きろ(茨城の一部)

きよ(奈良縣、宮崎縣)

きい(大分縣、宮崎縣)

の如き形を用ふるところがあり、又「けえ」「けい」といふところもあり、動搖してゐることが分る。

左變に至つては殆ど四段化してゐるものもあり、上一段化してゐるものもあり、その左變に活くものも、中古時代のものとは大いに趣がちがふ。四段もしくは上一段にかはつた左變動詞は一字の漢語に熟語となつたもの丶中に多數ある。

愛　譯　略　謝　議　辭　解　熟　服　復

などは殆ど全國一般に四段に用ひてゐる。又、

高　焙　通　封　案　感　談　判　煎　損

等は上一段に活用させるのが、關東方言では一般の慣習である。

固有の國語左變動詞、もしくは二字以上の漢語の左變動詞は、尙左變につかはれるが、これが、關東方言では殆ど全く左行上二段活用に活かせてゐる。

これらの左變動詞の變化は、室町時代にはまだ少く、江戸時代以後生じたものである。

はあ聞き分けました五百拔いて進じよ(狂言末廣がり)

ころもかへして藥せんじよ(守武千句)

さりとはじよさい〳〵、よく判じられた(鹿の卷筆)

永日の時を期さぬは呑む禮者(寶曆、川柳)

ほとゝぎす二十六字は案じさせ(明和、川柳)

どこへでも通じる樣に(浮世床中)

室町時代には、

阿難モ羅漢果ヲ證ス事ハ、ヤスケレトモ、證シテハ、佛ノ侍者ヲエセマイホトニソ(桃源抄一)

の如きもないではないが、大多數は

イカニ威姬ヲ愛スルトモ惠帝ノサシツキナラハ、文帝ヲコソ立テ太子トセウトハセラルヘケレソ(史記抄九)

食スルラウ(桃源抄一)

上古、紙カ唐紙チヤホトニ、破テ損セウソ(桃源抄二)
今一度參セウトテ、イラシモタ時ノ事ヲ(同)
サラウニハ一向ニ報セマイ歟(同一)
チツトシタ赤子ヲ浴スルトモ諸如來ト云心ソ(同)
人ナマイリカヨウソト禁セラル、ソ(山谷詩抄、十一)

かくの如くして、中古時代の動詞に見た九種の活用は、次第に變化して、今日は簡單なものになつた。

a　行く　Yuk -a -i -u -e　　死ぬ　shin -a -i -u -e

のやうな母音變化によるものと、

b　起きる　oki -ru -re　　明ける　ake -ru -re

のやうに、接辭「る」「れ」の添加によるものとの二つの大きな種類の外には、「來る」「爲る」の如き少數の不規則動詞のあることとなつた。かくして出來た活用の二大種類の間には、凡そ次の如き語法上の差異を生じた。

(一)一は未來の助動詞「む」が「う」になつたために、その未然形と結び付いて才列長音の未來形と云ふべきものを生じ、四段活用が五段活用となつた。それ故に今日の口語では、四段

活用は五段活用といふのが至當である。

例　書こう　讀もう　死のう

他は未然形に前記の「う」が結び付いた上に、特殊の語形變化を生じ、「よう」といふ未來形を作り出した。

例　起きよう　受けよう　見よう

(二)一は助動詞「まい」に附く時、終止連體形を用ひ、

例　書くまい　よむまい　死ぬまい

他は未然形をつかふ。

例　起きまい　受けまい　見まい

(三)一は連用形から「て」「た」に續くときに、左行のほかは不規則の形を生じてゐる。

例　かいて(た)　讀んで(た)　死んで(た)　取つて(た)

他はかゝることがない。

例　起きて(た)　受けて(た)　見て(た)

(四)一は語尾と可能の「れる」とが約つて、下一段に活くが、他はかゝる習慣がない。

例　よめる　書ける

(五)一は受身の助動詞「れる」、使役の助動詞「せる」がつき、他は「られる」「させる」がつく。

これは古代語に於て、「る」「す」と「らる」「さす」との對立に比べられるものである。

註(一)室町時代の言語研究、五九、六三
　(二)國語の方言區劃　二四

〔三〕活用形の變遷

早く動詞の語形を五十音圖に配當して、谷川士淸が未定・已定・告人・自言と稱け、眞淵が初體用令助と稱けた頃には、活用形に於ける認識も猶不充分なものがあつたが、動詞の語尾變化に於ける法の意味の或程度まで認められたことは否むことが出來ない。

春庭の活用分類は、活用の種類を確定したものであつて、之によつて、各活用形や所屬の助詞・助動詞も明かになつたが、各活用形の段による配列であつた爲、或ものは四段、或ものは三段、あるものは五段となり、從つてその各活用形の分擔する職能は、活用の種類によつて區々として一定する所がなかつた。たとへば春庭は四段の活については、

第三の音くすつふむるは切るゝ詞と體言へ續く詞とをかねたり。受くるてにをはも二つをもちひて、切るゝかたより受くるてにをはは　めり　らん　べきらし　と　とも、續く詞よりうくるてにをは、かな　まじ

にをよりなどなり

といひ、中二段の活にては、

第三の音、つふむゆるうは四段の活の第三の音の切るゝ詞のかたにて、受くるてにをはもその切るゝかたのめりらんべきらしとともなどを用ふるなり。又此音にるもじをそへたるは四段の活の第三の音の體言へつゞく詞のかたにて、うくるてにをはもそのかたを用ひてかなまでにをよりなど也

と云つて、四段では一個の形で兼ぬるものを、二段では別々の二個の形で言ひあらはしてゐるのである。それ故、二段を標準とし「く」「つ」「ふ」「む」「ゆ」「る」「う」と、之に「る」をつける「くる」「つる」「ふる」「むる」「ゆる」「るる」「うる」とを、それ〴〵切るゝ詞と續くる詞とし、之に四段の活を並べるならば、四段の同一の形は二回繰返される。かくの如き手續を以て凡ての種類の活用に亘り、活用形にそのあらはす職能を結びつけて、同一の職能を有するものは之を横に統一する時は、もつとも多くの活用形を有する奈行變格活用の有する活用形の數だけ一切の動詞の活用形が出來る。これが今日數へられてゐる未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六種の活用形である。上代語の動詞の活用を、その語形變化を基としてその職能を分類するならば、この六種を以て動詞活用形のあらはす職能を分類する事が出來る。

今日の口語のみについて活用形を舉げるならば、前節のべた活用の變遷の結果、終止形と連體形と同形となつて左の五個の活用形となる。

否定形　連用形　終止連體形　假定形　命令形

この古今の活用形を比較する時、又その間に職能の變遷がある。之を述べることが本節の目的である。

一　未然形　この形は、「ば」をつけてまだ成立たない條件を假定する語形であるから、未然形と稱けられてゐるものであるが、今日の口語ではさる言ひ方はない。假定條件をあらはす能力は、全く他の活用形に移つてしまつてゐるから、口語ではこの形は「ない」を附けて否定を現す用法から否定形と稱けられてゐる。中古語の例。

たき名といはゞ罪もこそうれ(後撰)

上にとりきばしるからむといふ(源氏紅葉賀)

かゝる用法は、近代語になると漸くすたれて、「降らば」は「降るならば」、「行かば」は「行くならば」と云ひ、つひに「ば」を省いて「降るなら」「行くなら」と云ふ形になり、直接動詞そのものゝ未然形は使はなくなつた。室町時代に於て既にこの近代語の形が、やがて古代語に於ける

未然形の代りとならうとする勢を示してゐる。

若周ヲ火德トスルナラハ、秦ハ土德トシテコソ五德運ニハ合ヘケレソ（史記抄四）

天子ノ思召チカエル事カアルナラハ、諫ヲ納ル、ソ（山谷詩抄一二）

サル人材ノ臥龍ノ如キモノヲ起スナラハ、雨ハフラウソ（同一三）

影ヲウツイテ見ルナラハ、ハツカシウソウスヨ（同一五）

一ツキリホドクナラバ錦繡ニハナルマイソ（蒙求抄四ノ四）

云ふならば殿上までも切り上りさうなものの面魂であつたによつて（天草本平家）

さしまへがあるならば彼奴を爲留めたうござるが（狂言抜殻）

ロードリゲースも形容詞についてであるが、「なくば」を「ないならば」と並べ、「なかつたらば」を「なかつたならば」と並べて、同じ意味を示すものと教へてゐる。「ならば」を省いた「なら」は、

女房にもつなら此方がをとなしやかだ（浮世床中）

安くては嫌だ。高くやるなら乗りやせう（膝栗毛四ノ下）

のごときもので江戸時代になつて出來た形で、この形が今日に於ては未然形の本來の職能を傳へてゐる唯一のものになつてゐる。

二　連用形　用言に連る形。「剝ぎ取る」「見にくし」のやうに熟語となることもあり、「くりかへし讀む」といふやうに、修飾の働をするものもある。

この形はまた單獨でも熟語としても名詞として用ひられる。

帶　扇　袷　賄　書置　勝負　早起　炭取

これらの用法は古今を通じてかはらないが、中止法の用法は今日殆ど廢れた。

（一）あたらものに言ひおもふ（落窪）

いと心なき樣にこそ思ひいはめ（和泉式部日記）

君はいと口惜しく見つけられぬ事と、思ひ臥し給へり（源氏紅葉賀）

（二）細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて（枕）

の如き中古語の場合は、今日の口語では使はれなくなつてゐる。（二）の如き他の語を隔てる場合は、記載語には尚使はれるが、口頭語にはあまり使はれない。

これらの中止法のかはりには、助動詞「つ」の連用形の「て」の助詞のやうになつたのを用ひて

頭陀袋をグツト首にかけて、如意とかいふ物を手にもつて出た所は能いが（浮世床、初ノ下）

といつたり、

ぼく〳〵した婆もあればひい〳〵たもれの新造子もあらあな（浮世床、初ノ下）

といつて、已然形に「ば」を附けたものを用ひたり、

大雪は降るし雛はさつばり氷に閉ぢられて(浮世床、初ノ下)

と云つて、終止連體形に「し」をつけたり、或は室町時代既にその例があるものだが、「たり」といふ助動詞の時の意味を失つたものを用ひて、

此三體ノ増註ノ序書タリ又増註スル外ハ未聞名聞名著者也(三體絶句抄一)

の如くいふのが、近代語に於ける一般の習慣である。

三　終止形と連體形　終止形は文を終止する形であり、連體形は體言に接續する形であるが、前節に述べたやうに、中世以後その形が同一になつたから、同じ形が終止と連體とを兼ねあらはすやうになつた。それで今日の口語では、たとへば「おつる」の變化である「おちる」が、文語の「落つ」「落つる」のかはりに使はれてゐる。「死ぬ」「死ぬる」のかはりに、「死ぬ」を用ゐるのは、連體形が近代語に於て亡びた唯一の場合である。

連體形は體言に接續するものであるが、また次の如き場合は體言に準じて用ひられたものである。

もろ〳〵の遊ぶを見れば(萬五)

春雨のふるは涙か櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ(古今)

この用法は、今日は用ひられなくなり、「の」といふ助詞を添へてあらはしてゐる。これは近代語の特徴で、室町時代の狂言には、

いやお山伏、起すのは別の事ではおぢやらぬ(狂言苞山伏)

のごときものも見えるが、一般に中世までは、

中玉カ歸舟ノクルヲ望ミマウサウソ(山谷詩抄、一五)

春ノ來ルハヨイガ、老ノ來ルハイヤヂヤソ(中華若木抄中)

石弓ヲモツテイクヲ見テ(莊子抄一)

の如く、古代語のまゝであるから、狂言の形式は新しいものであらう。

終止形はまた上代語では、「と」「とも」を添へて、まだ成立たない條件を假定するに用ひる。未然形に「ば」を添へた假定とは、順説と逆説とのちがひである。

院政鎌倉時代以後、連體形が終止形にかはるやうになると共に、「とも」は連體形につくやうになつた。連體形を終止に用ふるのは、既に平安朝時代にも屢々例のあることは前に述べた通りで、從つて「とも」が連體形につくことも當時から例がある

びんなき事作るとも、ちぎりきこえしことはすて給はで(枕)

石切り通し作るとも、おとぎゝもあるまじき事と思ひ知りたれば(狹衣)

院政鎌倉時代以後はこの現象が極めて多く、文部省の「文法許容事項」に許容事項の一として擧げられたのも、その爲である。

骨肉の命は盡くるとも(日蓮御書諸願成就鈔)

動功に申し替ふるとも、自ら退くとも(神皇正統記)

懸命の合戰するとも、又籠て戰ふとも(鎌倉大草紙)

この形のかはりに鎌倉時代以後「も」を用ひるやうになり、室町時代には「ても」を用ふるやうになつたことは助詞の項に讓る。

四　已然形　この形は「ば」「ど」「ども」を附けて、

(一)已に成立つた條件(「ば」「ど」「ども」のつくとき)

(二)條件の已に成立つたものと假定する(「ば」がつくとき)

につかひ、又「こそ」に應じて文の終止を成すものとされてゐるが、奈良朝時代には既定の條件を現はすに、「ば」を附けないことが少くない。

唐土の遠きさかひに、遣されいませ、海原のへもにも沖にも、神つまりうしはきいます、諸の大御神たち、舟の舳に導き申し（萬五）

佛の（中略）さきはへたまふものにありとおもへおろがみ奉る（續紀宣命）

又「ば」がつかないで、他の助詞の附いてゐることがある。

飛鳥川七瀬の淀にすむ鳥も心あれこそ波立てざらめ（萬七）

天地の神はなかれやうつくしき吾が妻さかる（萬一九）

わぎもこがいかにおもへかぬば玉の一夜もおちずいめにし見ゆる（萬一五）

又「こそ」の係に關係なく、已然形はあらはれてゐる。次の如き場合は、後のものならば皆終止形が普通あらはれなければならぬ。

言はれぬものにあれや（續紀宣命）

越の海の信濃の濱を行き暮し長き春日も忘れて思へや（萬一七）

海原の根やはら小菅數多あれば君は忘らす我忘るれや（萬一四）

又「こそ」以外の係に對する結びとしてもあらはれてゐる。

たまかづら花のみ咲きてならざるは誰が戀ならめわは戀ひ思ふを（萬二）

見えずとも誰戀ひざらめ山の端にいさよふ月をよそに見てしが（萬三）

かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひに寢しく今し悔しも（萬一四）
めづらしき君を見むとぞ左手の弓とる方の眉根かきつれ（萬一一）
視渡せば近き里廻をたもとほり今ぞわが來れひれふりし野に（萬七）

助動詞の例が多いが、いづれも已然形を用ひてゐる事は同じである。抑ゝ已然形が既定の條件を表すことと、「こそ」の結びに用ふることとは、今日關係がないやうに見えるが、もとはその起源を一にしてゐると思はれる。

已然形は既定の事實をあらはし、單獨に、

さきはひ給ふものにありとおもへ（續紀宣命）

と云ふやうに云つたが、ついで强めの助詞又は疑問の助詞に由つて助けられる場合を生じ、一方にこの種のもののうち、「こそ」と共に用ひられるもののみ殘り、又一方に於ては「ば」「ども」の附いた形のみが殘つたものであらう。從つて、中古時代にもその以後にも、逆說の條件を現すときには、

あだなりと名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人もまちけり（古今）
かたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ（同）

の如く、「こそ」のある時には、「ども」を省くことがあり又順說の條件をあらはす時に、

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しきものを(古今)

しづかなるところなれ、時々もまかりうつりて心やすやすと思ひたまふるなり(宇津保)

の如く、「こそ」がなくして已然形があらはれる習慣もまゝあるのである。故に已然形の本義は成立つた事實、確定した事實をあらはし、

四日風ふけば、えいでたゝず(土佐)

ふくからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ(古今)

次に未然形がまだ成立たない條件を假定するのに代つて、同じことを成立つたものとして假定する云ひ方を生じた。

しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中(古今)

われ人を起さむ、手たゝけば山彥の答ふる、いとうるさし(源氏夕顏)

又或事柄が實現すると、他の事柄がついで起ることを示すことにも用ひるやうになつた。

これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける(土佐)

これかれまかりあがる〻所にて思ひめぐらせば、家路と思はむ方はなかりけり(源氏帚木)

已然形はこの意味に於て、最も多く比較的後までつかはれてゐる。

漁人ガ尋ネ來レバ、洞中ノ人避ニケテ秦亂ヲイタト云ソ、今ハ晉也ト、漁人ガ云ヘバ、驚也(錦繡段抄五)
諸鳥は却て嘲れば燕のいふは(天草本伊曾保)
季貞參つてかの由申せば(天草本平家)

ロードリゲーズの日本語典に、

あぐれば　　あぐるに　　あぐるところに

を並べ、

あぐれば　　あげたれば　　あげたに　　あげたところに

を並べてゐるのも、室町末期から江戸初期に於ける用法を示してゐるものである。已然形に「ば」をつけて、已に成立つた條件を云ひあらはすものは、室町時代に於ても、助動詞「たり」を作ふものには豊富にあらはれるが、そのほかは「なれば」「あれば」「ござれば」等を外にしてその他には殆どなくなつた。

貴方ノ詩テ戒サシムタレハ、サツト夢覺テ黄粱未熟ノ時ノヤウナソ(山谷詩抄八)
一度ヌケタレバ叶フマジトテ死シタレハヲカシキ事ソ(錦繡段抄一ノ一四ウ)
と云はれたれば、信俊涙を抑へて申すは、幼少より御憐みを蒙つて片時も離れ奉らなんだれば、上下りの時も何卒して御供を仕らうずることでござつたれども、平家より許されなんだれば(天草平家)

かういふ形に於てのみ著しく目につく。しかもこれもしばしば、

年ヨツタニヨツテ大夫ニナサルヽ、ソ(蒙求抄一)

山ノ樓臺ヲウチカコウタ程ニ(山谷詩抄一三)

以ての外惱まされたによつて(天草平家)

の如き形によつて、いひかへられてゐる場合が相當に多い。その他の例は

軍は勝負のことなれば(文祿舊譯伊曾保)

心にまかせぬ海路なれば、浪風を凌いでいく程に(天草平家)

昔を忘れぬ花であれば、少將花のもとに立寄つて(同)

外には五常を亂らず禮儀を正しうする人であれば(同)

もはや思召し切つたと見えてござれば(同)

既にかゝる身に罷成つてござれば憚り存ずる(同)

かくの如くして今日は既定の條件を示す已然形の本義たりしものは失はれて、もつぱら假定の言ひ方になつてしまひ、全く未然形のもつてゐた意味を奪ひ、(一)まだ成立たない條件を假定する場合か、(二)條件は已に成立つたものと假定する場合につかふ。それ故に、この形は今日の口語からいへば假定形と稱けるべきものである。唯「こそ」に結び付く場合に限つて、在來

の意味が殘つてゐる。

　學校に行けばこそ、本もよめるのだ。

已に成立つた條件をいふ場合、

　人のいへば我もしか思ふなり

といふ如き言ひ方には、

　人がいふから自分もさう思ふのだ

など、別の言ひ方をして已然形はつかはない。

室町時代、「程に」とか、「間」とかいつてゐるのは、同じ傾向のあらはれてゐるものである。「されば」を「さあるほどに」と云つてゐるのも、已然形を用ゐる習慣の衰へた結果である。

　霜カフルホトニ、氷カハラウスト、君子ハ知ソ(山谷詩抄一三)
　舟ヲナラヘテヲイテ、其上ヲ渡ルト云カ、毛詩ニモアルホトニ昔モアルホトニ、ナセニナラヌイフハト云テ、一人ソ云破テ橋ヲカケタソ(蒙求抄四)
　總シテ橋ヲバ虹ニ比スルホトニ垂虹ト名ヅクル乎(中華若木詩抄下)
　人々未明ヨリ起キテ、サワギマワルホドニ、晏眠スル者ハ一人モナキソ(三體詩法抄三ノ二)
　又子ヲ失フ間、イツモナクヨリ外ノ事ハナイソ(錦繡段抄四)

アマリノンドガカワク間、サラバ蓑ヲスイデ(中華若木詩抄中)

「間」は院政鎌倉時代に始り、

如レ此常ニ呵嘖シ給フ間、此ノ御弟子ノ比丘、白地ニ他行ストテ、一ノ河ヲ渡ル間、若キ女有テ亦同ク此ノ河ヲ渡ルニ、女河ノ深キ所ニ至テ、殆ド流レテ顚レヌベシ(今昔四)

加様ニ怖キ事ヲ耳申アリク間、此法師都ニ置イテハ、叶フマシ、遠流ニセヨトテ(平家五)

舌ノ所ニ耳ヲ用ル間、身ノ病ト成リ給フ也ケリ(同廿八)

大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし(保元)

「から」を用ふることも室町時代に例がある。

民ヲアナトルカラ、ケガヲスルゾ(山谷詩抄一一)

わが身に應ぜぬ樂を工むから、一旦その樂をも遂ぐれども、その道から落ちて身を過つものぢや(天草本伊曾保)

辛勞スルカラ煩ホトニナシゾ(蒙求抄四)

江戸時代、文化文政頃には、今日の如く普通になつた。

いやと申してなど使つてあるから、矢張能い事と思つて(浮世床中)

こつちにも荒神様があるから、さう旨くはいかねへのさ(浮世風呂三ノ下)

事實の接續に用ひたものも、江戸時代には已然形を用ふるよりは、むしろ、

脇道へ切れると、泥濘へ踏込むのさ(浮世床上)

廊下へ轉ぶとすぐに雑巾だ(同)

といふ言ひ方をしてゐる。これも今日普通の言ひ方である。

「ども」に續く場合は、室町時代にも、今日のやうに終止連體形に「けれども」がついて、

山里はものゝ寂しき事こそあるけれども、世の憂きよりは住みよからうずるものを(天草本平家)

といふやうな用法が多少見えるが、當時はなほむしろ

谷ハ隣ヘヲキノリタウ思ヘトモ(山谷詩抄五)

宗資ハ汝南ノ太守デハ、アレトモ、(蒙求抄一〇)

何ト云國テソウト、問ハントスレトモ(錦繡段抄四)

風ハ吹ケドモ、香ハナイゾ(中華若木詩抄中)

といふ方が普通であつた。「かゝれば」は、「カウアル程ニ」「されば」は、「サルホドニ」「サールニヨリテ」と云ふことが、

カウアルホトニ、始終天下猶々治ルベシト(山谷詩抄上)

サルホトニ新ニセントシタカ不成ソ(古文眞寶抄下)

サアルニコリテ、吾朝ノ諺ニモ、百姓ハ草ノナビキト云ソ(中華若木詩抄中)

の如き例の多いのに(「こそ」のつく場合は「サレバコソ」を用ふ)、「されども」には尚

サレトモ以レ誤就レ誤ニテ(古文眞寶抄下)

と用ふる例の多いのは、已然形の順説に比して、逆説の場合の遲くまで殘つて居たのと平行してゐる。

終止連體形に「けれども」をつけるのは、この時代には

サハアルマイケレトモ、民ヲ惠マン爲ソ(蒙求抄一〇)

禪僧ニハ依經ト云事ハ入マイケレトモ(桃源抄一)

承嚴ハ功德ハ、イカヌケレトモ(同)

三十棒打テクレフケレトモ許スソ(碧巖抄五)

のごとき、むしろ用言以外のものに多い。それ故に、

むかしの風が殘つてはあるけれど(太平樂卷物)

勿論、中には頼母しい者もあるけれど、居候にゐるほどの者だから(浮世床下)

まだしも色白だから七難も隱すけれど(同)

のやうな用法は、江戸時代に定まつたと云つてよい。

「こそ」に應ずる終止の用法は、室町時代には尚殘つてゐて、

帝王ニ成タ樂ハ今コソアレト云テ悅ハレタゾ(蒙求抄二)

コレハ太白テコソアレ、長庚トハナセニシタゾ(山谷詩抄九)

サヤウノ者コソ、コヽニアレ羊裘ヲ衣テ澤中ニ釣ヲ垂テイタゾ(中華若木抄中)

過つて關白殿へ無禮の由を申さうずとこそ思へ(天草本平家)

恩を知る者を人といふ。恩を知らぬは畜生とこそ云へ(同)

世にあればこそ望みもあれ、望みのかなはねばこそ怨みもあれ。(同)

といふ形が多く保たれてゐるが、次のやうな形もあつて、已然形を以て結ぶ習慣の失はれてゆく兆が見えてゐる。

一度出テ文王ヲタスクルデコソ殷ハ周ノ手ニ入ル也(中華若木抄上)

サテコソ山谷詩ニモ……ト作ルゾ(錦繡段四)

この係結の呼應の失はれてゆくのは、早く已然形を失つたもの、たとへば、

竹雲ノ本ハ無點ナホドニ、ゴテコソ候ラウゾ(蒙求抄四)

サコソホシカルラウ(同一〇)

こゝで失へといふ儀にてこそあるらう。(天草本平家)

まことにさこそおぼすらう(天草本平家)

の如き場合から起つて、動詞にも及んで行つたものと思はれる。「らむ」が係結の呼應を失つてゐることは院政鎌倉時代にも既に往々例がある。

現安穩後生善所ノ藥草ニコソハ候ラム(法華百坐)

五　命令形　平安朝時代の一般の通則として、四段・奈變・良變には「よ」を添へず、その他の活用には「よ」を添へるが、四段奈良變で「よ」を添へたものもある。又その他の活用にして「よ」を添へないものもある。四段奈良變以外のものには、「よ」の添へたものが命令形であると云ふのも惡いし、四段に添つた「よ」は、その他の活用形に添つた「よ」とは、別物であるといふのもわるい。中古以前のものでこの通則に合はないものは、

せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ(源紅梅)

さりともあこは我が子にてあれよ(源帚木)

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも(古今)

これらは、四段・良變に、「よ」の添はつた例である。

上卿曰、乘ヨ騎二三廻、後上卿曰、下ヨ、次引二立南殿一(建曆御記)

よき人のよしとよく見てよしといひし芳野よく見よよき人よく見（萬一）

は前者は上二段の例、後者は上一段の例で、いづれも「よ」を添へない。下二・左變には殊に多い。

ちはやぶる人をやはせとまつろはぬ國を治めと（萬二）
この濱に月夜飽きてむ馬しまし停め（同一九）
おくつきはしるく標たて人のしるべく（同一八）
つとめもろ〳〵進めもろ〳〵（佛足石歌）
逆事伊佐世止伊射奈比佐面（續紀宣命）
したり柳の蘊せ吾妹（萬一〇）
事計りよく爲吾が兄子あへる時だに（萬一二）

加變には「よ」を添へない方が本體である。

雨ぞ降るちふ歸り來吾が見（萬七）
更に夜さりこの寮にまうで來（竹取）
家に造麿まうで來（同）
猶この男尋ねてゐて來（大和）

陸奥の安達の眞弓わが引かばすゑさへより來しのびしのびに(古今)

しりへの方なる地にしぶきと云ふもの生ひたると云へば、取りてもて來といへばもて來りけり(蜻蛉)

とかくあそばし慰めてとくことといひやりたるに(枕)

さらばそのありつる文を賜りて來となむ仰せられつる(同)

中納言例食フ樣ニシテ水飯持來ト宣ヘバ侍立ヌ(今昔二八)

萬葉の東歌を見ると、關東方言には古く「よ」のかはりに「ろ」を用ひてゐたことが分る。

あどせろとかもあやにかなしき(萬一四)

白雲のたえにし妹をあぜせろと(同)

あが手とつけろこれのはるもし(萬二〇)

今日の關東方言に存する命令形の「ろ」は、その由來するところが古い事を知るであらう。關東方言で命令形に「ろ」を附けるのに對して、關西方言では、「よ」を附けるところがあり、「い」「え」をつけるところがある。「い」や「え」は、「よ」の變化である。

方言分布の上で見れば、加變の全國ほとんど凡て「こい」といふのを除けば、その他は靜岡・山梨・長野・越後以東は「起きろ」「教へろ」「見ろ」「爲ろ」といふ形を用ひ、それより以西は、左變かほとんど「せい」であり、上一・下一は京都・和歌山・大阪・香川までは「起きよ」「起き

い」「教へよ」「教へい」「見よ」「見い」のやうに、「よ」と「い」とを混ぜてつかひ、それから九州までは大抵、「い」を附けた形を用ひてゐる。室町時代に「よ」が既に「い」になつてゐたことは次の例で分る。

心猿カナント褱動モセイカシ(山谷詩抄、一三)
出テ仕ヘイト云ントスレハ(同、九)
彼の内々云ふたる高札をあげい(狂言かくすい)
太郎冠者、案内者をせい(同)

「天正日記」に

するがのもの、江戸へ御こし候はゞ、めしつれくれろと申て七人参る

とあるのは、關東方言のあらはれたものである。

〔四〕 音韻變化と活用形

動詞の活用は、母音變化と「る」「れ」の添加から成るものであるから、五十音圖の同行に於て行はれるもので、初は確にさうであつたことが、發音と假字との一致してゐた奈良朝時代の

文獻に於て認められてゐるものである。しかし發音の變化は、このもの丶上にもあらはれて、平安朝時代になると必ずしも同行に活用しなくなつた。平安朝の初期に於て、既に五十音圖の同行を守つてゐるとは云はれない。音便はもつとも早くあらはれた多様の音韻變化の現象である(ア行ヤ行のエの混淆を別として)。その後も尚變化を重ねてゐるから、今日に於てはまして複雜な形式になつてゐる。その著しいものは、波行にはたらく動詞で、

買　わ　い　う　え　お(う)

となつた。ワ行とア行との混淆である。假字遣の上でこれらをもとの通り、

は　ひ　ふ　へ　は(う)

と記してゐるのは奈良朝時代の言語を標準とするからである。たゞ「買ひて」を「買うて」と記すことは許容されてゐた。すなはち平安朝以後に起つた音韻變化のうち、假字遣の上でも變つた發音通り記すことがみとめられたものが、音便である。それ故、假字遣と云ふのは、平安朝初期以前の文獻を標準とする假字の用法と云ふことが出來る。形容詞に於ても、同樣に音便があるが、いづれも今日の歴史的假字遣はみとめて居り、古くからさう書いてゐる。

催馬樂　左介乎太宇倍天太倍惠宇天。

新撰字鏡　娩　知比佐伊人也

和名抄　紛　之路以毛野　　大納言　於保伊毛乃萬字須豆加佐

「言ふ」が「言う」となり、「言ひ」が「言い」となるのは、轉呼音といはれ、「書きて」が「書いて」となり、「言ひて」が「言うて」となり、「白き」が「白い」となるのは、音便といはれてゐる。音韻變化としては、〔k〕とか〔h〕とかの子音の脱落から起る語形の變化で、全く性質は同じものである。わが口語では語間或は語末に〔i〕〔u〕の母音のあるのは稀であるのに、漢語の移入の結果、わが發音に〔i〕〔u〕が多く出來たため、國語の發音の上にも又同樣の現象が起るやうになつた。それが音便であり、それに後れて出來たものが轉呼音と稱せられる者である。音韻變化の現象としては同じ繼續である。それ故に音便といふものは、特に假字遣の上に許容されてゐる一種の音韻變化と云ふべきである。

音便をわけて四種とする。イ音便・ウ音便・促音便及び撥音便である。

一　**イ音便**　カ行ガ行の四段活用の連用形が「い」となるもの。今日の口語では「書いて」「書いた」「漕いで」「漕いだ」など、「て」「た」に連る場合にのみ現れるものであるが、平安朝以來種種な形にあらはれてゐる。

こゝにもおいたらじ(落窪)

そのほどしもあらう吹いたり(更級)

のやうに、「たり」に續くとき、

え堪うまじく泣いたまふ(源氏桐壺)

いとひききりに花やいたまへる人々にて(同夕霧)

のやうに「給ふ」につゞくとき、

つめつ開いつ戰ひしが(謠曲)

痛(イタウ)ナ數(ナゲイ)ソ(平家二)

のやうに、「つ」に接し又禁止の「な」に接するときにも見える。又この音便は、サ行の四段動詞にもあつて、

差(サ)いて　　差いた

といふ習慣が、愛知・岐阜・福井・石川・富山・岡山・鳥取・島根等の方言に見えてゐるが、古くは中央語に普く存在した現象である。

いとからしもおぼいたるはいかなるにか(落窪)

あやしきまで思ひあつかひ心をさわがい給ふを見侍るに(源氏行幸)

夢のやうに見ないて思ふこゝち世の中に又たぐひある事ともおぼえず(更級)

例ならでおはしまいしをりなど(讃岐典侍)

これは平安朝乃至院政鎌倉時代のものである。室町時代にも、その例がとぼしくない。

周瑜ハシスマイタレ(三體詩法抄四)

堂ナントニ銀燭トホイテ置テ(錦繍段抄五)

徳ガアレドモカクイテ云ヌホトニ(蒙求抄三)

純ハマシリモノナイソ、水ヲスマイタ處ソ(莊子抄一)

大野に火を放いた心地をして(天草本平家)

よな／＼近習の人にこの一門を滅ぼいて天下を亂らうずると企てらるゝによつて(同)

江戸時代にも、なほその例は續いてゐる。

など帶にある名をば落いたるぞと申さる(醒醉笑)

あれその錢のなかから見出いて御座あるはといへと(同)

二　ウ音便　ハ行四段の連用形が「う」となるもの。イ音便より少しく遅れて現れた。今日の口語では、「洗うて」「洗うた」などと、「て」「た」に連る時にのみ見るものであるが、これも古くは更に廣く連用形に起り、

ときぐ〳〵通ひ給うけるわかんどほり腹の君とて(落窪)
一人おはしまさんを思う給へて(同)
行ひ侍らむとなむ思う給へなりにたる(源氏宿木)
年ごろさてもいのしたまうしをえうけたまはざりき(宇津保)
眉の間の白毫の一つの相をおもうつべし(梁塵秘抄)

など、各種の助動詞、又「給ふ」などへつゞくときにも見えてゐる。又バ行・マ行の四段にもあらはれてゐるが、今日は山口・九州等の方言にのみ殘つてゐる。文獻の上では香藥抄(二條朝)に、

呼　ヨフデ

とあるのが、もつとも古く物に見えてゐるものである。又、

をりあそふ給へ大將軍(梁塵秘抄)
かいろの海にぞあそふ給ふ(同)
翠の冠者の君、何色の何摺かこりうだら(同)

これは「あそび」「このみ」の音便。鎌倉室町時代以後勢力を得たもので、新しい音便である。

殘り四騎ハ馬ヲ惜ウデ懸ズ(平家一一)
勇々敷忍ダル體ニテ(同、一二)

海上ニ出浮タル時(同、一一)

山ノ樓臺ヲウチカコウタ程ニ(山谷詩抄、一三)

サテ我ハ早ク製レ身ヲ五湖ヘヒツコウタリ(錦繡段抄二)

歛手ハツ、シウタナリゾ(蒙求抄三)

禮記デハ、尙レ筋トヨウタソ(同一〇)

たのうだ人が、此方の庭を聞き及うで見物にてござるほどに(狂言記)

江戸時代にも、初期には、

いきしなにつぼうだ花(醒睡笑)

いざ大なる歌ようで遊ばん(同)

など多少行はれてゐた。すべてウ音便は關西方言の特色である。

三　**撥音便**　マ行バ行四段とナ行變格との連用形が撥音便になるもの。今日の口語では「て」「た」に連るときの形である。このうちマ行のはもつとも古く、次の如き例がある。

手をきる〳〵つんだる菜(土佐)

木の根を掘り食むで(神樂歌)

御裳つむつ袈裟つむつ(催馬樂)

（註一）不如嬛(たゝむ(デ))而幽之離房(ムニハ)（文暦二年加點唐鈔漢書楊雄傳）

バ行撥音便は、音韻變化の手續がマ行のものより間接であるだけ、やゝおくれてあらはれ、文獻に見えるものは、堀河鳥羽朝以後のものである。石山寺藏嘉保二年加點阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌に、

喚　ヨムデ

とあり、天仁二年の童蒙頌韻に、

哈　ヨロコンデ　飛　トンデ　呼　ヨンデ　遨　アソンデ　覃　アソンデ

とある。奈行變格に於けるものは最も新しくあらはれ、物に見えてゐるのは鎌倉時代以後である。

去(イン)ジ康保(カウホウ)四年十一月十一日（平家、四）

ほうゆうしん。でよらんところなし（假名書論語）

しん。でのちにやむ又とをからずや（同）

日本人が漢語の發音に慣れることが久しくして、その影響のまゝ現れたものが音便であるが、さきに述べたイ・ウ音便について、各種の語形の上にあらはれたものがこの撥音便である。こ

の音便は平安朝時代以來、倘ラ行音にもあらはれてゐる。それは良行四段の連用形及び良行變格の連體形に於ける、次の如きものである。

知　シンヌ(童蒙頌韻)

わざとあんめるを早うものせよかし(源氏花宴)

深くすむべき水こそ出で來難かんべい世なめれ(同行幸)

去ヌル平治元年十二月(平家五)

篠僧等皆歸去ヌ(同六)

サレバ知ヌ叡慮ニ有ト申事ヲ(同四)

今ハハヤ老ノイタンナントスルコトヲ相感シテソ(三體詩法抄三)

倘ハ行四段の撥音便も、

おもんぱかる(平治二)

追んまゝる(太平記)

などあるが、これらは今日は廢れてしまつて、唯成語のうへにのみその名殘をとゞめてゐる。

四　促音便　ハ行・タ行・ラ行・カ行四段活用と良行變格活用動詞の連用形が促音になるもの今日の口語では、「て」「た」に連るときに起るもので、カ行四段の動詞としては、「行く」が「い

つて」「行つた」となる唯一の例があるばかりである。歴史的に見ると、もつと廣く連用形に起つて居り、「おつつく」「とつくむ」「ひつはる」「ひつさげる」の如き、この種のものゝ成語として今日まで殘つてゐる場合である。

父はむなしくなりたる由を申しておつかへして候ほどに(謠曲刈萱)

かつつくばうて刀ばやにすはり〳〵、すは〳〵と作つて(狂言鱸庖丁)

の如く他の動詞に連る場合のほか、

慇懃メヨ、罪作ニ頸ナ斬ソ(平家一一)

われら人おこなつつるときんば(假名書論語)

昔陶淵明ト云ツシ者又顏魯公ト云ツシ者(中華若木抄中)

明妃ハ昭陽殿ニイタショリモ痩セテ胡國ノ烏孫に嫁メ行ク也(錦繡段抄五)

李端ガ岳州ニアツシ時ニ(三體詩法抄三ノ二)

など種々の助動詞に連る場合にも行はれてゐる。この音便は仁明文德兩朝頃の加點と思はれる金光般若集驗記に發(太天)、有(太毛天)の如きものも見えるが、院政鎌倉時代以來文學の上に、

各弓ヲ取テ、箭ヲ放ツテ馳セ違フ(今昔)

百千の劍をもつてさきわるが如し(寶物集)

らむにしたがつてみなみづからくふなり(寶物集)

など、辭書に、

遵 シタガツテ　歌 ウタツテ　償 ツクノツテ　彌 ワタツテ　群 ムラガツテ

蹲 ウヅクマツテ

など、訓點に、

乃作(ツクテ)別詩曰懼然破(フテ)レ愁成レ唉(正安二年加點、遊仙窟)　可(シ)下以贖(ノクテ)二佳期一哉爲(タテ)八幅被(ツクテ)上(同)

など多くあらはれて來てゐるから、恐らく關東方言の影響によつて、廣く一般に行はれるやうになつたものであらう。これも漢語の影響で出來たものに違ひないが、平安朝に於ては時代の好尙にあはず、あまり行はれなかつたが、まへの撥音便と共に、關東方言には早くから流行し、武人が中央に活動するやうになると共に、京阪語の勢力範圍を侵し、名詞などにも武家語が瀰く現れたのと並んで、次第に行はれるやうになつたものと思はれる。この音便がもつとも多く軍記物語にあらはれてゐるのは、この臆說を裏書するものと云つてよからう。然し一般の口語には、やはり優雅なウ音便の方が好まれ、たまたま促音便は出來ても、やがてまたハ行四段動詞のごときは、再びまたもとのウ音便にかへつてしまつた。

今日に於ても、ハ行四段の音便は、富山・石川・福井・滋賀・三重より以西はウ音便とし、靜岡・山梨・長野から以東に於てのみ促音便として居り、その中間に於て愛知・岐阜・新潟あたりに於て兩者混淆して使つてゐる。

註

(一) 吉澤義則氏「國語說鈴」所載、括弧内の假字は博士の補讀

第六章　形　容　詞

〔一〕 活用の成立

形容詞は用言の一種で、叙述の品詞であることに於て類を同じくしてゐる。そのあらはす概念から云へば極めて近いものもあるが、一が事物の屬性を動的に說明し、他は靜的に說明することに於て、その間に本質上差別を認めることが出來る。「澄む」は動詞であり、「清し」は形容詞である。「富む」は動詞であり、「貧し」は形容詞である。これを形態の上から見れば、動詞は五十音圖の同行に活用するに對して、形容詞はカ行とサ行とに涉つて活用してゐる。富樫廣蔭が形容詞を稱けて音雜詞と云つたのも、この形態上の特徴から來てゐる。舊時代の學者が兩者を區別した最初の着眼點は、形態上の特徴に在つたことは爭はれない。現代の口語に於ては、形容詞は、

よ‖く　い　けれ　　　よろし‖く　い　けれ

と活用し、すべてに亘つて、活用が同一であるが、古代語に於ては、

よく　よし　よき　よけれ　　　よろしく　よろし　よろしき　よろしけれ

と活用し、久活用と志久活用の二種があり、語尾を「く・し・き・けれ」「しく・し・しけれ」と見る人は接尾語の「み」「さ」等を伴つて名詞となる場合、久活用では語幹「よ」につき、志久活用では語尾を加へた「よろし」を語幹と見做すと說明し、語尾を兩者共に、「く・し・き・けれ」と見る人は、活用を說くに、志久活用に於ては、終止形は語幹をそのまゝ使ふものと說明してゐる。

こゝに於て問題となるのは、志久活用の「し」が語尾であるか、語幹であるかと云ふことである。權田直助は「形狀言八衢」に於て、志久活の「し」を語幹に屬するものとし、形容詞活用の一に歸することを論じた。その大要は、

（一）「淺さ」「淺み」「淺げ」、「嬉しさ」「嬉しみ」「嬉しげ」の如く、「あさ」「うれし」は本言卽ち語幹であるから、「さ」「み」「げ」につくとき、志久活用では「し」と共に附く。

（二）名詞につく場合、久活用では淺瀨、深稲の如く「し」を伴はぬのに、志久活用では細女、空蜩の如く「し」を伴ふから、「くはし」「むなし」が語幹である。

（三）終止言を「嬉し」といひ、「嬉しし」といはないのは、同音が重なるのを嫌つて、一つの「し」を省いたもので、口語で「嬉しい」といふのは、「嬉しし」の音便である。「淺し」といふに對して「嬉しし」と云

ふ事のあつたことが分る。

(四)凡て活用語のはたらきは何れも一音である。然るに形狀言のみが「しく」「しき」の如く二音のはたらきたるべき筈はない。

と云ふのである。然し氏のいふやうに、无烟(ムナシ)といふものもあり、又、

いせのうみの渚によするうつせ貝むなしたのみに世をつくしつゝ(古今六帖)

のやうに「むなし」から熟語になることは確かにあるが、

おほろかに心おもひてむなごともおやの名立つな(萬二〇)

むな車にいをしほつみてもて來たり(宇津保)

月夜に空ぐるまありきたる(枕)

鷹飼のまだもこなくに繋犬のはなれていかむなぐるまつほど(拾遺、物名むなぐるま)

など、「むな」から熟語になる例も少くない。「戀ひし」「厭はし」「急がし」など「戀ひ」「厭は」「急が」は動詞の未然形である。「未だし」「甚だし」の「未だ」「甚だ」は副詞である。「かなし」は感動助詞の「かな」と同源のものを語幹として、それに「し」のついたものである。「大人し」「男々し」「女々し」等の「し」が語幹に屬しないことはいふまでもない。これによつても、志久活用の「し」が久活用の「し」と同じく語尾であることを思はしめるものがある。然らば、志久活用の形

容詞が、語尾の「し」と共に、「み」「さ」「げ」等の接尾語に接し、又は名詞と熟語になるのに、久活用の形容詞が「し」なくして、接尾語と接し名詞と熟語になるのは何故であるか。

これは形容詞にも發達の前後新古の差別があつたと考へなければならぬだらう。志久活用は久活用よりも新しいもので、久活用が既に「く・し・き」の語尾を具へて活動してゐた時、志久活用はたゞ、語幹に語尾の「し」がつき、唯この一個の形で、或は終止形にも用ひ、或は連體形にも用ひて、或時期を經過したことがあつたかも知れない。「遠々し越の國」など、「遠々しき」といふべきを終止形と同形なのは、この形のみで活動した名殘を示してゐるのである。助動詞はもとゝ獨立の用言であつたに違ひないが、それには「じ」の如き「らし」の如き活用のないものがある。これも形容詞の形を想はしめる。この段階が進むと、「く」とか「き」とかいふ語尾も生じ、中には不完全な發達のまゝでとゞまつたものも少くない。「すこし」といふ語は、「小」「少」「微」等の古訓點に見えるところからも、「し・く・しき」と活用したことが察せられるし、新撰字鏡に個小良須古志支奈留とあるにても活用してゐたことが分るが、古典にはたゞ「すこし」とのみ用ひて、「すこしき」「すこしく」といふ形は見えてゐない。普通、副詞形として用言を修飾するとき、

女みこすこしすぐし給へる（源氏桐壺）
すこし見ばや（同帚木）
すこし物の心を思ひしる（同夕顔）

と用ひ、「は」「も」「つゝ」に接するときも、

すこしは見せん（源帚木）
すこしづゝ語り申せ（同帚木）
色はすこしもあせずぞありける（貫之集）

などみな一様に、たゞ「すこし」といふ形であらはれてゐる。「けだし、けだしく」「但し」「もし、もしく」等の形は、この發達の初期の俤を傳へてゐるものであらう。さらば如何にして遍く發達して、しばらく終止形のみを持つてゐた形容詞が、「く」とか「き」とかの語尾を取つたかと云へば、それは或時期に於て、他の多くの「く・し・き」の語尾を整備してゐた久活用の形容詞に同化され統一されたもので、語幹に「し」語尾のついた形が第二次の語幹となり、「よろしく」「よろしき」といふやうになる。ただ終止形の「よろし」だけは、まへから存在してゐたから、そのまゝ用ひられたものであらう。權田直助が口語に「嬉しい」と云ふのを、「嬉しし」の音便と論

いたのは誤解である。連體形が終止形を同化したことは、動詞の條にのべたやうに、院政鎌倉時代以後の用言・助動詞一般に通ずる現象で、連體形の「き」が音便で「嬉しい」となつたことは爭ふことができない。小田清雄翁が皇典講究所講演で、

秋深み夜風烈ししうべしこそ四方の里人衣うつなれ（永長二年東谷歌合）

家苞にきのみな折りそ櫻花山の思はむこともやさしし（基俊集）

何ものも常に見るにはいとはしいつもあかぬは粥と大乘（無住雜談集）

等の歌を引いて、語學始まつて以來の大發見であると賞揚されたのは贔負の引倒しで、むしろ「嬉しい」といふ口頭語の形が出來た後、その影響で鎌倉時代以後文語の上に「しし」があらはれるやうになつたものである。

見苦シシトク〳〵罷出ヨト云（平家延慶本）

祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、美しし〳〵と嘆ぜられたり（源平盛衰記）

メテタキタカラニテハ侍レトモクチヲシシ、（康頼自筆本寶物集）

笠の內、あやししと見いれ立のけば（曾我物語）

云出セバハヅカシシ又浦山シサニ手向ヲスルニテ候（三體絕句三）

泣くはわれ、なみだのぬしは、かなししぞ（閑吟集）

世の聞えも恐ろししとあつて、急ぎ高雄へ送り奉られた(天草本平家)

等かゝる形は、皆新しいものばかり見える。要するに、歴史的にいふならば、久活用の「し」も志久活用の「し」も語尾たる點に於ては別のものでない。

そも／＼活用語尾を伴はない語幹そのものが、形容詞のもつとも原始的の形である。

あなおもしろ布當の原、いとたふと大宮どころ(萬六)

あなたふとけふのたふとさよ(催馬樂)

あなたのみがた人の心は(伊勢)

あなうたてこの方のたをやかならましがはとみゆかし(源氏帚木)

あな心どと思いて(源氏胡蝶)

のやうに、語幹そのまゝで文の終止を成すことがある。これがその古形の一用法である。今日の口語でも、

あいた　　おゝあつ

といふ言ひ方は殘つてゐる。又副詞法に用ひて、

いたなかば　　高光る　　宮柱太知り

としたのもある。又熟語にも用ひて、

なが引く　　遠白し

と使つてゐる。又後にはこの語幹を重複して、

なが〱　　ひさ〲

など副詞を造り出すに至つた。古くは助動詞に接續して、

今うたばよらし(記)

など用ひた例もある。形容詞の「し」の語源は分らない。又その發達した上からいへば、形容詞の語尾はカ行とサ行とに跨つてゐるが、その理由も定說はない。上田博士は(註一)〔ch〕といふやうな語尾が出來て、分化したものと論ぜられた。金澤庄三郎氏は(註二)左變動詞の「爲(ス)」であるといはれる。

加行に活いた形容詞語尾は、萬葉集を見ると、

まさかしよかば(萬一四)

かくだにも國の遠かば(萬一四)

といふ「か」といふ形がある。又、

速けむ人しわがもこに來む(記)

わかれなばうら悲しけを(萬一五)

しましくもさぶしけめやも君まさずして(萬五)

「けむ」「けめ」といふ形がある。又、

わが戀やまず本の繁けば(萬一〇)

玉梓の道の遠けば(萬一七)

梯立の倉梯山は嶮しけど(記)

玉きはるいのち惜しけど(萬一七)

「けば」「けど」といふ形がある。この種の語形は、まだその上に職能の分擔に關して、一定のきまりを充分に發達させてゐない。

しが無けばたれか掛けむよあたら黑繩(紀)

戀しけば來ませわが夫子(萬一四)

の如きは「けば」を未然形に用ひてゐる例である。否定の助動詞がついた「けなく」といふ形もある。

妹にこひつゝすべ無けなくに(萬一五)

嘆く空やすけなくに(萬一七)

又未來の助動詞についた「けまく」といふ例もある。

見ずかなりなむ戀ひしけまくに(萬九)

これらの形をカリ活用の形容動詞の約されたもの、又轉じたものとする說もあるが、實際に於て古く「かば」はあるが「からば」はない。「からむ」は萬葉集に唯一箇の例があるだけである。又已然形の「かれ」も萬葉集に一つの例があるが、「ば」「ど」「ども」に接するには常に「けれ」もしくは「け」を用ひてゐる。これを以て見ると、カリ活用の形容動詞の方が新しいもので、前記の形は形容動詞に似た性質をもつ一種の形容詞といふべきである。

東歌には次の如きものもある。

心にのりてこゝばかなしけ

悲しけ兒らに

なやましけ人妻かもよ

今日、九州方言の形容詞には「無か」とか「よか」とか種々の職能に於て用ひられてゐる。新井白石も東雅の總論に、

太古の語には善をばヒといひけり。ヒといふ言葉轉じてフといひ亦轉じてヨといひけり。そのヨといふ言また詞の助をかりてヨシといひしに、其詞亦轉じて今の如きは、中土東西南北の方言によつてヨシといひヨキといひ、ヨカといひヨクといひ、またヨフなどともいふ。其音の輕重淸濁、呼ぶ事の開合緩急また各州わかれたり

と云つてゐるが、東歌のは東國の古い方言的形式であらう。とにかくカ行に活用する形容詞の語尾が「け」や「きこ」の外にもあつたことが分る。畢竟「く」や「きこ」は之と同じ種類に屬するものに違ひない。又後世の形容詞とちがつて、これらの形容詞活用は動詞に似た法を具へ、助動詞にも連るものがあるから、動詞活用との問題も起つてくる。學者の間にしば／＼動詞と形容詞との關係が論ぜられてゐるが、余は半ばは動詞との關係を考へ、半ばは別方向に於ける形容詞語尾の發達を考へてゐる。言ひかへれば、カ行語尾に於て動詞と同方向の發達を考へるが、サ行語尾並に接尾語の「さ」「み」等につく形に於て、形容詞獨自の發達を考へる。動詞と形容詞とは、そのあらはす觀念からいつて類似したものである。同じ事物の屬性觀念を時として動的に說明すれば、動詞になり、時として靜的に說明すれば形容詞となる。わが國語と同一系統の琉球語には、動詞と形容詞とは形態上の區別がない。わが國語の形容詞にも、古くは動詞の形態に近いものがあつたと考へる。しかし靜的に屬性を說明する形容詞と、動的に屬性を說明する動詞とが、言語の發達するに伴うて自ら別々の品詞として分化して行くことは考へることが出來る。そこに「し」といふ語尾が形容詞特有の語形として屬性の靜的說明にあたる品詞の語尾となり、同時にカ行に活用した語尾の或ものをとり入れて一種の活用體系を成し、屬性の動的說

明にあたる品詞の活用體系とは別々な方向を取つて發達して來たと考へることが出來る。或は「し」は係屬關係を確めるものとして、高山・赤土などの「高」「赤」等について來たもので、「天つ風」「向つ峯」等の「つ」と初はあまり遠いものでなかつたかも知れない。形容詞の語幹そのものは名詞と區別できない。「築く」「掘る」から、「つか」(塚)「ほら」(洞)が出ると同樣に、「明く」「暮る」から「あか」(赤)「くら」(暗)が出て、後には一は名詞として發達し、一は形容詞として發達してゐる。連體形の用法に形式素を加へて活動を圓滑にするを得た形容詞は漸く發達せんとしてゐた股長(もゝなが)・根白(ねしろ)等の叙述形式の場合をも助けて下にも附くことになり、こゝにさきに發達してゐた動詞的の形容詞活用形式と結び付く端緒をひらいた。

別の活用體系が解體して、そのうちの或ものが組合されて職能を分擔し、他の活用體系を形作ることはその例が多い。「靜かな」「活潑な」と「靜かだ」「活潑だ」とは、明かに別の語類であつたものだが、今日の口語では一方は連體形を一方は終止形をつとめて、準形容詞の體系を形作つてゐるのと同樣である。要するに文獻以前に遡ると、形容詞には動詞に似たものもあり、奈良朝時代にその痕跡をとゞめてゐるが、いつか亡びてその活用形のあるものが新しく生じた「し」語尾と一緒になり、後の形容詞語尾の起源を成した。これが今日の久活用で、それについ

で志久活用を生じたものであらう。琉球語に「し」語尾を持つてゐないと云ふことは、「し」語尾の新しく發生したものであることを想像せしめるものがある。「遠い」といふ形容詞について琉球語と比較して見ると、わが國語では形容詞の語幹 tō 副詞形 tōku に對して琉球語 tū, tūku 又わが「遠さ」に對して tūsa、遠みに對して tūsan もほゞ似てゐるが、終止形・連體形に至ると tūsang tūsaru となつて、動詞と同じ形態を發達させ、わが「遠し」「遠き」の如き形は持つてゐないことに於て大に趣を異にしてゐる。それ故に、わが國語の形容詞は比較的新しい時代に、一種特別な形態を發達させたわが國語特有の語法的範疇と見るべきであらう。

〔二〕 活用形の變遷

奈良朝時代には、彼の「く・し・き」の語尾とちがつて、「か」とか「け」とか活用するものがあることを述べた。これは一時代まへに活動したものゝ殘存にすぎないことは、それがこの時代の文獻にその例が限られて居り、殊に「け」を終止に用ひたり、連體に用ひたりしたものゝ多數が東歌にのみ限られてゐることからも想像せられる。このほかに、この時代の形容詞に特有の語法としては、

妹に逢はずあらばすべ無み岩根踏む生駒の山を越えてぞあが來る(萬一五)

そを見れば心を痛み、みどり兒の乳乞ふが如く(萬一八)

の如き形のあることである。このごろはこれをマ行四段の動詞の連用形と說く人が多いやうであるが、やはり普通の說のやうに、形容詞語幹に接尾語の「み」の添はつたものゝやうである。かゝる用法としてあらはれてゐるもゝうちには、「逢ふを無み」「日を多み」の「無み」「多み」の如く四段に活いた實例のないものもある。

又奈良朝時代の普通の形容詞は、後世と同じく久活用・志久活用であるが、そのうちには尚發達の不完全であつた時代の俤をのこしてゐると思はしめる用法が少くない。

うるはしとさ寢しさねてば(記)

のごときは名詞法に違ひない。

香具山は畝傍をゝしと耳梨と相諍ひき(萬一)

これも「畝傍、をゝしきもの」といふ「をゝし」が、名詞法で畝傍と同格になつてゐるものとして、始めて、從來のこの歌に對する疑問がとける。風土記に三山相鬪とあり、香具山が畝傍及び耳梨と戰つたのであらう。「と」は並列の助詞である。

連體形として用ひたものは擧げるまでもなからう。枕詞となつてゐる次の如きものは、この種のもの丶遺形である。

あをによし奈良を過ぎ(記)

花ぐはし櫻のめで(紀)

形容詞が語幹のみで活動した時代のあとには、この種のわづかに「し」といふ語尾のみを持つてゐる形が、終止形としても連體形としても無差別に用ひられた時代があつたに違ひない。ここに擧げた外、仔細に研究したならば、副詞形として用ひられたものもあるらしい。

「く」及び「き」の語尾が分化してからは、「き」は連體形に用ひられて、「こそ」の係に對しては、この形で結んだ。この點が特に平安朝の形容詞と比較して、奈良朝時代の形容詞のもつとも著しい特色であらう

鮎こそは島邊も善(え)き(紀)

己が妻こそ常(とこ)めづらしき(萬一一)

野を廣み、草こそ繁き(萬一七)

この形が出來ないまゝはやはり「こそ」の結びには「し」を以て結んでゐた例がある。

子ろが襲衣の有ろこそ良しも（萬一四）

久活用・志久活用に、已然形の「けれ」「しけれ」の發達不完全なのも、奈良朝時代の言語が、平安朝のものと違ふところである。奈良朝時代に於ける已然形は、たとへば「ば」といふ助詞に接する場合にのみあらはれてゐる。

おのが身しいたはしければ（萬五）
わかければ道行き知らじ（萬五）
かへしやる使なければ（萬一五）
あが片戀のしげければかも（萬一七）

などは見えるが、「こそ」の結びに用ひられたこともなく、又「ど」「ども」に接する場合には、

畝傍山木立薄けど（紀）
あをによし奈良の大路は行きよけど（萬一五）
梅の花香をかぐはしみ遠けども（萬二〇）

のやうな「けど」はあつても「けれど」はない。

「けれ」はカリ活用形容動詞の「かれ」の轉じたといふ説がある。黒澤翁滿を始めとして草野清民氏に至るまで形容詞の活用中からこの活用を省いた理由はそこに在る、その正しくないことは

は前に述べた通り、「かれ」の發達が「けれ」より遲れてゐることから考へられる。動詞活用に類推して已然形の「け」が「けれ」となつたもので、「かれ」が「けれ」と轉じ、又約つて「け」となつたのではない。

平安朝時代になつて音韻變化の爲に形容詞の語形に著しい變化が起つた。それはイ音便もしくはウ音便である。

イ音便は連體形にあらはれてゐる。

にくいことを引き出でむぞあやしき(紫式部日記)
よしないことはきこえでといへば(落窪)
さすがに若い人にひかれて(更級)
あはつけい樣に世人はもどくなりしかど(源氏竹川)
顏にはべにしろいものをつけたらんやうなり(榮花)
それをだに苦しいことにこそ思されためれ(源氏胡蝶)

今日の口語の連體形は、皆この形の繼續であるが、文語には「かな」といふ助詞に續く場合にのみ限つて現れる。

噫悲しいかな

ウ音便は連用形にあらはれたものである。

雪たかう降る日(宇津保)

いみじうみぞれ降る夜(源氏帚木)

今日の關西方言はこの形を傳へてゐる。それ故に、この形は東西で慣習を異にしてゐる。

(東)　赤く　美しく

(西)　赤う　美しう

たゞ例外として東京語でも、「ございます」を附けるときには、この音便化してゐる連用形を用ひて、「おはやうございます」「堅うございます」など云ふ。しかもこれも、「ございます」をともなつた一種の慣用語のごとき場合のことで、「ございました」とか「ございません」とかなつたり、又、殊にその間に助詞を挾む場合には、この音便形は使はないこともある。

背はあまり高くございません

おいしくもございません

ウ音便はもと／＼關東方言には無いのであつて、例外として「ございます」につゞく時にのみ

この現象のあるのは、全く關西方言の混じたものである。丁寧な言葉にかへつて古く關西方言を使つた名殘とおもはれる。「ございます」につづく時でも、連結する形の多少の變化によつてウ音便にならないのは、その故であらう。

イ音便は平安朝には連體形に限られたが、鎌倉時代には名詞法にもこの形を生じて、

鬢鬚(ビンヒゲ)ノ黑イハ、如何ニト宣(ノタマ)ヘハ(平家、七)

のごときもあらはれ、室町時代に一般に連體形が終止形を同化するに及んで、終止形としても現れるに至つた。

尺三千トセラレタハ文字ガツマリテ聯句ナンドノヤウデワルイ(中華若木詩抄上)

日影ヲ見タト云フハ注ガナイ(蒙求抄三)

少々仰トシタ此僧只者テハ無イ(碧巖抄八)

馬大師推過シテ人ニ讓タモ好イ(同八)

これが今日も終止形として用ひられる形である。それ故に、上古からの形を今日に傳へてゐるものは、「よい」「よし」「けれ」だけで、これも「けれ」が「ば」に接する時の、

よければ　　正しければ

はもとこの形であるが、「ども」に接するところは、終止連體形に「けれど」「けれども」を附けて、

よいけれど　　正しいけれども

とつかふ。この新しい形は、江戸時代には、

これ〳〵香を嗅ぐ花を挿すなどの詞は古いけれど(浮世床上)

耳できくなら香を聞くといふが能いけれど(同)

など普通にあるが、室町時代には殆どなかつたと云つてよい。

(註一)夢覺テ坐スルコト久キケレトモサキニ久クイネタ程ニ其枕頭ガホヽニツイテ不消ソ(四河入海)

はたしかにその萌芽であるが、まだ普通は已然形をもとのまゝ用ひて、

羅漢果ヲ證ス事ハヤスケレトモ(桃源抄、一)

日本ニコソ少ケレトモ(同、二)

多ケレトモ、チツトモ不忘ソ(同三)

ウツクシサハ、ウツクシケレトモ、骨格輕キソ也(錦繡抄三)

本意テハナケレトモ、セメテ詩ヲ七千首ハカリ作ツテ(同)

詞スクナケレトモ、理カタヾシク、ヨウキコヘタソ(蒙求抄四)

倫侯テ爵ハヒキケレトモ、封邑ノアルモコソアルラウソ(史記抄、三二ウ)

のやうなものばかりである。

終止連體形に「けれど」「けれども」をつける形は、用言の已然形のかはりにも用ひられるやうになつた新しい習慣で、一見形容詞の已然形そのもののやうであるが、室町時代には用言について現れるよりもむしろ、「まいけれども」「ぬけれども」「うけれども」など、助動詞について現れてゐることは、動詞の項に述べた。こゝに於て、「けれども」の起源が分らないものになるが、その一種に

終になきませなんだけれども(狂言鶴立の江)

と云ふのがあり、「たけれ」といふ例は鎌倉時代にすでに

山林流浪ノ行者トモ成候ハヤト申サセオワシマシタケレハ(平家延慶本)

と見えてゐる。これが頗る「けれども」の由來も想はしめるものである。「けり」は室町時代には既に過去の意味を失ひ、

但シ通鑑ハアマリ繁多ナホトニ節要シテセウトハシ思タケルカソ(史記抄三)

坡カ石鼓歌ニハ此語ヲ取タケルソ(同、四)

トコナケル沙彌ヤ在家ノ者ナントヲ師ノ方カラ大德ト云事ハアルマイソ(桃源抄二)

等、「たける」「なける」などにもあらはれて居るが、「たけれ」と共にいづれも「たり」「なり」などの連用形について、促音便になつたものから出た。今日に於けるこの種のもの丶遺形である「たつけ」にも、吾々は「け」には單に感動的價値しか與へてゐない。このやうな意味になつた「たけれども」の場合に、「た」が一般に終止形に用ひられるやうになると、「けれども」が終止形について既定の條件を示すものと云ふ意識を生ずるだらう。その結果他の助動詞にも類推して、まづ「まいけれども」「ぬけれども」の如きものを生じ、遂には用言にまで及ぼして近代語に於ける習慣を馴致したと解釋して、なほ後いよい考を待たう。

つぎに形容詞の各活用形の用法の變遷を見よう。

一　未然形　この未然形は、

したばふる心しなくば今日もへめやも(萬一八)

ことしげくともたえむと思ふな(古今)

かくおぞましくば、いみじき契深くとも、絶えてまた見じ(源氏帚木)

など、「ば」「とも」を附けて、まだ成立たない條件を假定するに用ひる形は、今日も行はれてはゐるが、次第に用ひられなくなる傾を持つてゐる。又この形の「ば」に接續するものは、或時

代には「は」がワとなつたことがある。ロードリゲーズの日本語典に「なくんば」「ないならば」と並べて、

なくわ naqua

を擧げてゐるのは、明かにその發音を示してゐるが、天草本の平家物語又伊曾保物語等にも、

命惜しくば助けうぞ(天草本平家)

清盛入道御許しなくば、賴朝いかでか生きて(同)

志が淺くは、何故にこれまでは參らうぞ(天草本伊曾保)

などいづれも、「わ」と發音してゐる。同時にロードリゲーズが「よいならば」と擧げてゐるのは、既に今日の吾々がつかふやうな形が當時行はれてゐたことを示すものである。江戸時代には、「なら」となつた。

ハア、まアだ安いなら三百五十で(膝栗毛四下)

「とも」を用ひて假定をあらはす形も尚あるが、一般に文語に引かれて殘つてゐる形である。

二　**連用形**　この形は、

はまなみはいやしく／＼に高くよすれど(萬二〇)

かくながくおはしますたぐひもおはしけるものを(源氏乙女)

のごとく、用言を修飾する場合につかふことは、今と全く同じであり、この形のうへに平安朝に起つた次の音便、

世にながらありておもふさまに見え奉らむと思ふぞ(源氏紅葉賀)

のごとき形も、關西方言では今日も行はれてゐる普通の連用形である。江戸時代も同じ。その例。

いしこらしう江戸子ぢや何たら角たらいふても(浮世風呂)

つぎに、

一すぢはおもしろく、二すぢはかなしく、あはれなることは初よりはすぐれたり(宇津保)

のやうな中止形としての用法がある。これも、

雪のやうにつめたくはなく、又日にてらされてもとけません(國定讀本)

など、今日用ひられることがあるが、殆どすべて記載語で、口頭語とは云はれない。「つ」の中止形「て」が之を補うてゐることは、よほど久しいものである。

おれも年が老いたから記憶が惡くて、根が薄くなつたから(浮世床初上)

吸物おや無うて轉煞おやさかい、鹽が辛うて、トトやくたいちや(浮世風呂四中)

形容詞の連用形に「あり」の結びついたものが、形容動詞と稱せられるもの丶一種で、この形となつて、はじめて種々の助動詞に接續し、各種の敍述の目的を全うすることが出來る。それ故に、

これにつけても憎み給ふ人多かり(源氏桐壺)

うれはしき御心ちには、ものうかる音にのみ聞し召しなさる(増鏡)

の如き終止形・連體形の如き、普通の形容詞で十分なものは、出來ても後には用ひられなくなつた。

三　**終止形と連體形**　連體形が終止形を同化すると共に、終止形は亡びて、「い」語尾となり、もとの終止形をそのまゝ今日に留めてゐるものは、名詞に轉用した

からし(芥子)　すし(鮨)　おもし(重鎮)・あかし(證明)　仲よし　骨なし

或は人名として用ひられる

やすし　たかし　あつし

等のもの、又は助詞の助をかりて用言の修飾をなす

かくながくおはしますたぐひもおはしけるものを（源氏乙女）

のごとく、用言を修飾する場合につかふことは、今と全く同じであり、この形のうへに平安朝に起つた次の音便、

世にながうありておもふさまに見え奉らむと思ふぞ（源氏紅葉賀）

のごとき形も、關西方言では今日も行はれてゐる普通の連用形である。江戸時代も同じ。その例。

いしこらしう江戸子ぢや何たら角たらいふても（浮世風呂）

つぎに、

一すぢはおもしろく、二すぢはかなしく、あはれなることは初よりはすぐれたり（宇津保）

のやうな中止形としての用法がある。これも、

雪のやうにつめたくはなく、又日にてらされてもとけません（國定讀本）

など、今日用ひられることがあるが、殆どすべて記載語で、口頭語とは云はれない。「つ」の中止形「て」が之を補うてゐることは、よほど久しいものである。

おれも年が老いたから記憶が悪くて、根が薄くなつたから（浮世床初上）

吸物ぢや無うて轉熬ぢやさかい、鹽が辛うて、トトやくたいぢや(浮世風呂四中)

形容詞の連用形に「あり」の結びついたものが、形容動詞と稱せられるもの丶一種で、この形となつて、はじめて種々の助動詞に接續し、各種の叙述の目的を全うすることが出來る。それ故に、

これにつけても憎み給ふ人多かり(源氏桐壺)

うれはしき御心ちには、ものうかる音にのみ聞し召しなさる(増鏡)

の如き終止形・連體形の如き、普通の形容詞で十分なものは、出來ても後には用ひられなくなつた。

三 終止形と連體形 連體形が終止形を同化すると共に、終止形は亡びて、「い」語尾となり、もとの終止形をそのまゝ今日に留めてゐるものは、名詞に轉用した

からし(芥子)　すし(鮨)　おもし(重鎭)・あかし(證明)　仲よし　骨なし

或は人名として用ひられる

やすし　たかし　あつし

等のもの、又は助詞の助をかりて用言の修飾をなす

相手なしにはたす　　仕方なしに歸つた

の如きものに過ぎない。このほかには、

これはされば君の御滅でもなし、これは(天草本平家)

とりながら少將は慰まるゝ事もなし、夜晝たゞ父成親卿のことのみを歎かれた(同)

の如き、今日まで引續いてゐる。事實を並列する場合に、

暗さは暗し、しかく入道の孫とも知らず(天草本平家)

といふのも、今日尙次の如く殘つてゐる。

暗さは暗し道はなし(中略)ただれをうつて落ちました(國定讀本)

連體形は、

白き袷に薄色のなよゝかなるを重ねて(源氏夕顏)

のやうに體言を修飾する場合、

隨分によろしきも多かりと見給ふれど(源氏帚木)

のやうに體言に準ずる場合、又は、

日の影にしたがひてかたぶくらむぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき(枕)

の如く、「ぞ」「なむ」「や」「か」等の係の助詞に應じて文を終止するに用ゐるのが、中古以前の主な用法であつたが、今日は體言を修飾する場合は、イ音便の形を用ひ、體言に準ずる場合は、それに助詞「の」を伴ふ。その變遷のあとを見ると、室町時代には、

その儀ならば、老いた、若い、二千あまりはあらうず（天草本平家）

古ルイ衣ヲバ捨ラレイト云テ新シイヲトラスルゾ（蒙求抄七）

といひ、江戸時代にも、

扨妾な女中は幼いを連れ何方へござる（成田山分身不動）

のやうに單獨に用ひて、「の」を伴はないのは、もとの形の俤をとどめてゐるのである。「ぞ」「なむ」「や」「か」と連體形との呼應は、終止連體同形となると共に亡びて、係結の意識は失はれた。

四　已然形　この形は「ば」をつけて已に成立つた條件又は條件の成立つたものと假定する場合につかひ、「ど」「ども」を附けて已に成立つた條件をあらはすにつかふ形であつた。

日のあしければ、ゐざるほどにぞ、今日廿日あまりへぬる（土佐）

いやしけれどもをかしけれ（枕）

現代の口語では、

面白ければ見よう

嚴しければ怨まれる

の如く、まだ成立たない條件を假定し、もしくは條件の成立つたものと假定する場合、すべて假定に用ゐるから、今日では假定形と稱すべきことは動詞の場合と同然である。「ば」「ども」を附けて成立つた條件をあらはす用ひ方は、尚室町時代に、

平生公トハ、氣味カ同ケレハ、此豆粥ヲクレタト存ンゾ(山谷詩抄一三)

筆ヲ手ニスルコトモナケレバ硯ニ塵ガ生ズルゾ(中華若木詩抄上)

やゝあつてさてもあらうずることでなければ少將袖を顏におしあてゝなく〳〵罷出でられた(天草本平家)

の如きものもあるが、動詞と同じく、

サレドモ用フルモノナイホドニツイシヨウガ無用也(中華若木詩抄上ノ一)

コヽチアシイホドニ、ナントテマア今度ハ何ゾシカトシタ事ヲ見出テ云ワウト思テ(百丈清規兩序章)

サテ如レ此往來ガ多キ故ニ(三體詩法抄三ノ二)

月ノカゲガ低キホドニ城郭ノ影ガアルゾ(三體家法三ノ三)

才能ナキニヨツテ功名ヲナサヌゾ(中華若木詩抄上)

江水カマシテ浪ガ高キ間(三體ノ三ノ二)

樓ガヒキケレバ物ニサヘラレテ思フ一ホニナキカ樓ガイヤゾ高キホトニ月ニカヽル者ガナイゾ(同中)

サル上ハ船路モ危キホトニ専ハラ用心セヨトゾ(三體詩法抄三ノ二)

のやうな形が見え、江戸時代には、

こちとは樂はせずといゝから(浮世風呂二ノ下)

それでも安いから嫌だ(膝栗毛四ノ下)

のやうな形が多くなつて、今日の習慣の前蹤を成してゐる。

「ぞ」「なむ」「や」「か」に對して連體形で結ぶ習慣は、室町時代に連體終止同形になつたから廢れてしまつたが、「こそ」に對して已然形で結ぶ形は尚殘つてゐる。

文章コソ面白ケレト思フタゾ(蒙求抄四)

今更物を思はせうずることこそ悲しけれ(天草本平家)

それでも、

生テ用ガ、アツテコソ願イテハナイト也(蒙求抄七)

おのれを作にして、急いで上れと書いた事こそ恨めしい(天草本平家)

の如きものもあるのは、次の時代に全く失はれる前提で、江戸時代にはもうない。

註

(一)湯澤幸吉郎氏「室町時代の言語研究」所引。

第七章　副詞ご形容動詞

一　副詞と云ふ品詞類別上の概念は、西洋文典から得て來たもので、國語では他の品詞に屬するものが、文の構成上副詞の職分を得て來るものが多く、從つてこの品詞の存否、その外延の廣狹に就いては文法學者の意見がまち／＼で、まだ一定した取扱ひ方はないと云つてよい。

體言は實體概念をあらはすもの、用言は屬性概念をあらはして文の叙述に與るもので、共に文の主成分を成すに對して、副詞は用言に副用して修飾成分たる點に於て、同じく語形變化を持たぬ觀念語の中に體言と區別さるべき特質を持つてゐることは認めなければならぬが、稍もすれば、その職能のみに目を注ぐ時は、體言たるものを副詞としたり、連語たるものを副詞としたりする結果となり、文章法に於て論ずべきものを品詞法の問題として、語詞の運用上にあらはれる現象をもつて、語詞の本性と誤認する處がある。「今」「昔」「きのふ」「けふ」の如き名詞が副詞の職能を持つことは普通であるが、本體は名詞であるから、どこまでも品詞論に於ては名詞としなければならぬ。「遠く」「早く」の如きものが副詞の職能を得て來ることは、

すべての形容詞に通ずる現象であるから、之を副詞とすれば、形容詞はすべて副詞となる。それ故に副詞を立てようとするならば、他の品詞と劃然區別すべき獨自の形態・職能を有することを條件とすべきもので、「すなはち」「やがて」の如きものは、常に副用語としてのみ現れるから、安んじて副詞とすることが出來る。「大方」「ひたすら」の如きも、同樣な意味で副詞とするのであるが、これが「大方に」「ひたすらに」などなると、單語としては「大方」「ひたすら」と「に」とに分析し得る點に於て、一箇の副詞ではなく、副詞と助詞との連結で、連用修飾語として、文章論に於て取扱はなければならぬ。「花は」「山に」等が一個の單語として取扱はれないのと同樣である。「大方」「ひたすら」等は、時あつて「に」に助けられることがあると云ふだけで、「に」が附く爲に副詞と成るのでなく、それ自身既に副詞の資格を持つてゐるのである。之に反して、「靜かに」「徐ろに」等に於ける「靜か」「おもむろ」の如きは、副詞を立てる限り、それ丈では單語であり副詞であると云ふことは出來ない。屬性概念をあらはすと云ふ意味に於ては、副詞は形容詞と違はない。副詞として形容詞と分ち得べき特性は、それは形容詞が文の述語として叙述の働を有するに對し、依存的であり副用語たることに在るが、その依存的であり副用語たる所以は、かゝつて一に「靜かに」「徐ろに」と云ふ形を取ることに在る。それ故に、

これらは「徐ろに」「靜かに」と云つて、はじめて副詞たるものと云はなければならぬ。「靜か」「徐ろ」は副詞の語幹で、「に」は接尾語である。「爛漫と」「堂々と」など「と」のつく副詞も同樣である。單語とは、吾々の音聲をその性質に由つて分析して得る究極單位である。性質とは、その意義もあり、職能もある。「に」「と」は助詞の「に」「と」とその起源は同じうしてゐるであらうが、副詞と云ふ品詞の考へられる所以は、「靜か」「徐ろ」「爛漫」「堂々」等が、「に」「と」を伴ふことにあるのであるから、「に」「と」を副詞の外に置いて考へることは出來ない。「に」「と」そのものは、助詞であるか、接尾語であるか、單獨には論ずることが出來ない。同じ言語の材料も、人の用ふる時と場合とによりて、違つた性質としてあらはれ、人の思想の現れ方は主觀によつて必ずしも一樣ではない。或言語材料も單語として現れることもあり、單語の一部として現れることもある。「あか」は屬性を現す語幹としてあらはれ、語尾を作つて「あかし」と云ふ形容詞となり、「あかむ」と云ふ動詞となり、又それだけで「あか」と云ふ名詞としても現れる。それ故に「に」や「と」も、既に副詞であるものに連つた場合には連語として取扱ひ、「に」「と」を伴ふ爲に、副用語たる資格を得てくるものは、之を合せて一個の單語として副詞としなければならない。

すべての形容詞に通ずる現象であるから、之を副詞とすれば、形容詞はすべて副詞となる。それ故に副詞を立てようとするならば、他の品詞と劃然區別すべき獨自の形態・職能を有することを條件とすべきもので、「すなはち」「やがて」の如きものは、常に副用語としてのみ現れるから、安んじて副詞とすることが出來る。「大方」「ひたすら」の如きも、同様な意味で副詞とするのであるが、これが「大方に」「ひたすらに」などなると、單語としては「大方」「ひたすら」と「に」とに分析し得る點に於て、一箇の副詞ではなく、副詞と助詞との連結で、連用修飾語として、文章論に於て取扱はなければならぬ。「花は」「山に」等が一個の單語として取扱はれないのと同樣である。「大方」「ひたすら」等は、時あつて「に」に助けられることがあると云ふだけで、「に」が附く爲に副詞と成るのでなく、それ自身既に副詞の資格を持つてゐるのである。之に反して、「靜かに」「徐ろに」等に於ける「靜か」「おもむろ」の如きは、副詞を立てる限り、それ丈では單語であり副詞であると云ふことは出來ない。屬性概念をあらはすと云ふ意味に於ては、副詞は形容詞と違はない。副詞として形容詞と分ち得べき特性は、それは形容詞が文の述語として叙述の働を有するに對し、依存的であり副用語たることに在るが、その依存的であり副用語たる所以は、かゝつて一に「靜かに」「徐ろに」と云ふ形を取ることに在る。それ故に、

これらは「徐ろに」「靜かに」と云つて、はじめて副詞たるものと云はなければならぬ。「靜か」「徐ろ」は副詞の語幹で、「に」は接尾語である。「爛漫と」「堂々と」など「と」のつく副詞も同樣である。單語とは、吾々の音聲をその性質に由つて分析して得る究極單位である。性質とは、その意義もあり、職能もある。「に」「と」は助詞の「に」「と」とその起源は同じうしてゐるであらうが、副詞と云ふ品詞の考へられる所以は、「靜か」「徐ろ」「爛漫」「堂々」等が、「に」「と」を伴ふことにあるのであるから、「に」「と」を副詞の外に置いて考へることは出來ない。「に」「と」そのものは、助詞であるか、接尾語であるか、單獨には論ずることが出來ない。同じ言語の材料も、人の用ふる時と場合とによりて、違つた性質としてあらはれ、人の思想の現れ方は主觀によつて必ずしも一樣ではない。或言語材料も單語として現れることもあり、單語の一部として現れることもある。「あか」は屬性を現す語幹としてあらはれ、語尾を作つて「あかし」と云ふ形容詞となり、「あかむ」と云ふ動詞となり、又それだけで「あか」と云ふ名詞としても現れる。それ故に「に」や「と」も、既に副詞であるものに連つた場合には連語として取扱ひ、「に」「と」を伴ふ爲に、副用語たる資格を得てくるものは、之を合せて一個の單語として副詞としなければならない。

かくの如く副詞の外延を決定して副詞を見てゆくと、「か」「かく」「しか」「いと」「たゞ」「うべ」「いや」「いざ」「いさ」「はた」「いかに」「いまだ」「ゆめ」「けだし」「あに」「よし」「あたかも」「いや」「しば／＼」「また」「たとひ」「たまさかに」「しかすがに」「のどに」「すでに」「ねもごろに」「わくらばに」「しみらに」等は、最も古い時代から在つたものであり、「やゝ」「かならず」「つとに」「はなはだ」「もし」「いやしくも」「あきらかに」と云ふやうなのも、古い發生であらう。「さわさわに」「とををに」「ゆらゝに」「とゞろに」「もそろもそろに」「すく／＼と」「とゞと」といふやうな擬聲語から出來てゐる副詞もある。「さ」「いかで」「すこし」「やがて」「はるかに」「しづかに」「たをやかに」「そも」「おもむろに」「すこぶる」「つやつや」「たゞし」の如きは、平安朝以後に發達したものである。

「なに」と云ふのも、古くは副詞で、「何故」を意味し、不定代名詞として、「何者」と云ふ意味に用ひられるものは、その轉じて出來たものである。

木の暗になりぬるものを霍公鳥なにか來なかぬ君に逢へる時（萬一八）

の如きものが、奈良朝時代の用法である。

「なに」と並んで、「など」「なぞ」が同義に用ひられてゐる。

藤波の茂りは過ぎぬ足引の山ほとゝぎす何どか來鳴かぬ(萬一九)

秋の夜を長みにかあらむ何ぞこゝば寢の寢らえぬも獨り寢ればか(萬一五)

この奈良朝時代の中央語に對して、東國方言には、「あど」「あぜ」といふやうなのが在つた。今も千葉縣の海岸地方では「あじよ」と用ひてゐる。

こすげろの浦吹く風のあどすゝかかなしけ子ろを思ひすぐさむ(萬一四)

上つ毛野安蘇山つゞら野を廣み延ひにしものをあぜか絶えせむ(同)

「な」を「あ」と云ふことは、折々各時代の文獻に見えてゐる。

アセナコトゾ、コレカ曰ニハサフ見タヨト云心ゾ(古文眞寶抄下)

こちらのおむすじやうはあんとだの(世說新語茶)

「ど」と見えてゐるのは、「など」の省かれた形である。

鹽舟の置かれば悲しさ寢つれば人言繁し汝をどかも爲む(萬一四)

副詞は古くから助詞の「に」によつて助けられた。

か行きかく行き見つれどそこも飽かにと(萬一七)

あれやしかも思ふ君待ちがてに(萬一四)

ねもころ見れど、飽かぬ君かも(萬九)

の如き獨立の副詞にもついて次の如く連語を作つてゐる。

堅さにも、かにも横さも(萬一八)

しかにはあらじか(萬五)

ねもごろに思ひ結ぼれ(萬一八)

副詞を作る接尾語「に」「と」は、助詞の「に」「と」と相通ずるやうに、註(二) 古くは「な」「だ」があつて、「もとな」「さはだ」等の副詞に殘つてゐるやうに見える。これは名詞の格を示す「みなと」「まなこ」などいふことも通ずるやうである。「もとな」の「もと」は「みなもと」の「もと」と同語根と余は見てゐる。

副詞は他の品詞から轉じて來たものが多く、純粹の副詞として取扱ひ得べきものは、さう多くなからう。西洋諸國語でも、名詞の種々の格が名詞としての用法が廢れて副詞として取扱はれるに至つたものが多い。例へばローマンス語共通の副詞の接尾語 -ment は名詞の具格 mente で、「心を以て」と云ふ意味で、フランス語の bonnement (正直に)は、ラテン語の bona mente 即ち「善き心を以て」の意味である。「もとな」「さはだ」等の「な」「だ」が助詞として亡びてから は、「もとな」「さはだ」が孤立して副詞となつたものであらうし、「すぐに」もその一つで、實

町時代までは「すぐ」は「眞直」といふ名詞で、「すぐに」といふ一個の副詞になつてはゐない。次の例を見れば分る。

兩方ノ膝ヲ地ニ着テ、身ヲスクニシテ、頂マテ、スクニスルソ（勅規桃源抄一）

天竺テハ日本ノイロハノヤウニスクニヨムソ（同）

風ナケレバマツスクニフル、風カナケレハ斜ナ、横ニフリスクニフルゾ（山谷詩抄八）

スヂカウタ、マカツタヲタメテ直ニナイタソ（蒙求抄一〇）

「すなはち」の如きものも、今日では全く副詞と思はれてゐるが、平安朝までは名詞の性質を多分に持つて居り、尚純粹の名詞としても用ひられてゐたことは、

まろが子はすなはちよりふところにこそ入れゐたれ（宇津保國讓）

春立たむすなはちごとに君がためちとせつむべき若菜なりけり（六帖）

そのすなはち母宮うへよりおりおりさせ給ひて（狹衣）

かしこにものせらるゝちごをばすなはちよりなむ見侍る（宇津保）

この用法は平安朝から、院政鎌倉時代までも引續いてゐる。

わか宮はすなはちよりしんでんに通ふわたどのにおはしまさせて（榮花）

たれ／＼も思ひしる人も年月積りければすなはちのやうに（發心集）

次の如きものは、副詞の用をしてゐるが、上からの受け方は、なほ全く名詞の性質を持つてゐる。

生れ落つるすなはち女おのが布のふところにいだきて（宇津保）
あじろ車のしたすだれかけたりし出させ給ひしすなはち人まうできて（落窪）
明けぬればおりたるすなはち淺みどりなるうすやうにえんなる文をもて來り（枕）
さとにても明くるすなはち之を大事にして見せにやる（同）

副詞が常に「の」を介して、名詞の修飾になることの多いのは、この爲である。

やんごとなきまづの人々おはすといふことはよしなきことなり（源氏若菜）
さてもあるまじきおほよその人さへ（源氏みのり）

連語から來たものもある。英語などで altogether, nevertheless などの出て來たのと同じ變化である。「いづくんぞ」は「いづくにぞ」であり、「てんでに」は、「手に手に」、「なかんづく」は「中に就く」である。「なかんづく」は、色葉字類抄に「ナカニツクニ」とある。又

就レ中ニ近來亂リ風ヲ引テ水ノ如クナル物ヲ仕タレバ（今昔一九）
就中ニ若キ殿上人共ノ勇ミ寵タルハ、此ノ青經ノ君ヲ起居ニ付ケテ不レ安ズ極ク咲ヒケレバ（今昔廿八）

初は「に」を伴つて副詞となつたものが、副詞としての用途が確定すると共に、その形態も孤

立するに至つたのであらう。「なぜ」の如きも室町時代には

ナセニ御說キナイソト思タレハ（勅規桃源抄一）

ナセニカウテ居ソト問タレハ（同三）

是ハ太白ニコソアレ、長庚トハナセニシタソ（山谷詩抄九）

ナセニナレハ遊仙ナル程ニ（錦繡段抄四）

のやうに、用ひたものが今は「に」を失つてゐる。方言には「なぜに」といふ形があるが、それが古いものであらう。

今普通に使はれてゐる「よつぽど」のごときものも、やはりかういふ過程で出來たもので、今日の如き用法は極めて新しいものである。「善きほど」から轉じて出來た。室町時代には、

棺ヲ綏ヲ鹿盧ニカケテ、穴ヘヨツホトニヒキ入ルソ（山谷詩抄一三）

ヨツホトニナ隱居セント思テ（同、一〇）

京ノ方コソ時刻ヲ打ツモヨツホト〱ナレ、山里ノ僧寺ニ打ハアワイカ長カツツ短カツツウツソ（湯山千句、下）

など「善き程度」「善き時刻」などの意味に用ひ、江戸時代になつても尙

やい〱よつぽどにあがけよ（近松、鑓の權三）

こなたもよつぽどの事いうたがよい(近松、鑓の權三)

などと、原義は保存されてゐた。すなはち古くは「よきほどに」が變じて「よつほどに」となつても、尙名詞と助詞「に」とから成る副詞的連語で、今日の如く、「に」が失はれて、純粹の一個の副詞が出來たのは、甚だ新しいことなのである。

國語の接續詞は一種の副詞で、接續副詞と云ふのが當つてゐる。文の終にくる用言、助動詞は、その活用形を以て他の文に接續してゆき、之を接續すべき他の語を要しない。「書をよみ字を習ふ」といふ場合、「よみ」と云ふ連用形が接續を司るもので、之に「且」や「さうして」などを加へることがあつても、それは接續の意味を副へる語ではあるが、接續を司るものでないことに於て、西洋の接續詞などと同視することは出來ない。この接續詞もまた新しい發生である。

二三日へだてゝつれ〴〵なる夕暮もしはものあはれなる明ぼのなどやうにまぎらはして(源氏明石)

など見えて來るのは、平安朝以後のことである。

めのと又ひとひとりばかりぞしりに乘りたる(狹衣)
そも〳〵いかなる御心にてかはかくおぼし立つらむ(宇津保)
されどかしこしとてもひとりふたり世中をまつりごちしるべきならねば(源氏帚木)

「かつ」の如きものは、まだ次の如き用法のもので、接續詞になつて居ない。

渚による波のかつかへるを見給ひて(源氏須磨)

戀のごとわりなきものはなかりけりかつむつれつゝかつぞ戀しき(後撰)

接續副詞があらはれて來たのは、漢文の訓讀の結果であらう。漢文で、副詞の「もし」と同じ語が接續詞として、以二威若力一而能制縛於人者(唐律)のやうに用ひられる所から、「もしくは」と云ふ語が出來た。「そもそも」は、「それ」「これ」など、發語として用ひられるものを比べて見ると、漢文の訓讀に、代名詞を當てゝ訓んだものから、起つたに違ひない。「そもそも」は、假字書きとしても、宣命に、

曾毛曾毛百足之蟲乃(續紀五九詔)

と見えて居り、同じく宣命の「夫」「惟」も、「それ」「これ」と訓んだであらうが、その頃はまだ純粹の口語にはなつて居なかつたらう。

「に」「と」を接尾語として居る副詞、もしくは助詞「に」「と」を伴ふ副詞は、良行變格の「あり」と結び付いて「なり」活用及び「たり」活用の形容動詞を作り出した。「靜かなり」「爛漫たり」は、「靜かに」「爛漫と」と、「あり」との結合であるが、その成立した結果から云へば、一個の形容

動詞とすべきもので、「明かに」「徐ろに」を一個の副詞としたのと同じ道理に由つて一個の單語として取扱ひ、「なり」「たり」はその語尾としなければならぬ。その活用はもと「有り」の膠着から生じたものであるから、その活用形は良行變格と同じであるが、特別なことは中止形として、「靜かに」「靜かにて」「靜かにして」、或は「爛漫として」の如き形を有することである。

風の音もいと冷かに、嶺の山邊も色づきて（源氏椎本）

鮨鮎ノ大キニ廣ラカナルヲ（今昔、廿八）

もとありし御しつらひは、いとたふとげにて、今片つ方を女しくこまやかになど一方ならざりしを（源氏東屋）

深更客夜闌ニシテ旅寢ノ床ノ草枕、露モ涙ニ爭ヒテ、只物ノミゾ悲シキ（平家七）

雲の色慘々としてくれの思ひふかし（海道記）

發生的に云へば、中止形が早くあつて、「たり」の膠着して出來た形容動詞はそれから出て來たと云ふべきだらう。それ故に、古く

秋萩の枝もとをゝに露霜おき（萬一〇）

庭もはだらにみ雪ふりたり（同）

ぬば玉の夜はすがらに哭のみし泣かゆ（同一五）

の如く、形容動詞としての形はなくて、副詞そのまゝが叙述の働をしてゐたものもあるに違ひない。

櫻の直衣いみじくはなばなと、うらの色つやなど、えもいはずけうらに、蒲萄染のいと濃き指貫に、藤の枝ことごとしくおり亂りて(枕)

のやうに、「たり」活用にも、外の活用形の無いものもあつた。

「なり」活用形容動詞の變遷は、指定の助動詞「なり」の變化と併行してゐる。連體形の「なる」は、既に鎌倉時代に「な」となつてゐる。

しなだまも、をかしなまひもまてしばし、てまもひまなし、かをもまたなし(藤原隆信朝臣集題文)

豊田兵衛尉、色ハ白ラカニシテ、顏ハ不覺氣ナモノ、只可憐ニ、任官希有也(東鑑)

室町時代には、文の終にも、「な」を用ふるやうになつた。

サテナウテハ我ナカラモ繁昌カ不審ナゾ(勅規桃源抄一)

法華宗ト云ヘハトテ經ハ殊勝ナゾ(同二)

得道シツレハ、六窓ハ靜ナゾ(山谷詩抄一三)

死タト云テ賓位ニヲキ事ハ、アマリナト云心ゾ(同、五)

我ヤウナ比興ナモノニ、タハレハ過分ナゾ(同、八)

此酒器ハカリハ、ナニトヤラ徒然ナト云ツテ(山谷詩抄、一三)

今日は多くの活用形が亡びて、連體形の「な」、假定形の「なら」があるばかりで、終止形は之と系統を異にしてゐる「靜かだ」「不審だ」と云ふやうな形が代つて用ひられてゐる。

「なり」活用の形容動詞は文語の上に出來たものと見えて、その語幹は殆ど漢語に限られて居り、室町時代の口語の姿を見得べき抄物にも、「なにたる」「なんたる」の如きものをわづかに見るだけであることを見ると、固有の語彙には、ひろくこの種のものはなかつたと見てよからう。

ナニタルヲ云ワウスヤラウゾ(勅規桃源抄一二)

ナンタル佛ニナラウスナント、云ゾ(同一)

此宅ハナニタル人ノ棲ミ老シタル宅ヤラン(三體家法二ノ上)

馬ノリノ一騎、來ルハ何タル人デアルラウゾ(三體詩法四)

それ故、抄物にあつては活用形容動詞を用ひた詩句を講釋するには、

マ一ヨ漠々トアルホトニ、一盃ノマント思フテ(中華若木、下)

婦娜ハ美人ノタヲヤトシタ貌也(錦繡段抄四)

挨拶ハ物ノ参差トシタルナリ(史記抄一二)

と云ふやうな語法を用ひてゐる。

副詞に「あり」が結び付いて、「ナリ」活用及び「タリ」活用の形容動詞が出来たと同じ理で、形容詞の副詞形に「あり」が結びついて、またもう一種の形容動詞が出来てゐる。これが、「カリ」活用の形容動詞と呼ばれてゐるものである。それが良行變格と同じ活用を成すことは、他の形容動詞と同じで、今日の文語ではその終止形・連體形・已然形は使はぬが、初は完全にすべての活用形を持つてゐた。

此の泊の濱にはくさ〴〵のうるはしき貝石など多かり(土佐)

世の中に多かるふる物語のはしなど見れば(蜻蛉)

餘の上達部さま〴〵多かれど記さず(榮花)

此外ノツトメヲホカリトイヘトモ(傳康頼筆寶物集)

此は院政鎌倉時代までの習慣である。今日の口語では未然形に推量の助動詞「う」の添うた場合と、連用形に「ない」の附く場合だけ殘つて居る。連用形は促音便になつて居るが、これは鎌倉時代以後のことである。

カイナキ命ノ惜カツルモ歸リ上リタルウレシサモコノ人々ヲ今一度見奉見ヘ奉ムカ爲ニコソ有ツレニコ

ハイツクヘソヤ(平家延慶本)

は珍しい例だが、次にあげた室町時代の第一例と比べると、その習慣は、事實はそのころから多少有つたものと見てよからう。室町時代には、それに接續するものに、今日よりやゝ廣い用法がある外、

此ノ花ノ如クウツクシカツツル物ソト(山谷詩抄、五)

ソレテハメタト、故事ニ見エテ、キタナカラウスヲ(三體詩抄一)

毘陵ニ隱居シテ家貧カツテイクラノ辛苦ヲシテ有タレトモ(三體絶句五)

ソコト云意デモクルシカラヌソ(三體詩抄一)

魏文公ノ古樂ヲキヽ、タウモナカツタト同事ソ(史記抄一)

のやうに、今日同様、未然形と連用形とだけになつた。同じ抄物に命令形の例も見えるが、口頭語に使つたかどうか分らない。

註

(一)拙稿、古格の助詞と萬葉集の「もとな」「さはだ」(「國語と國文學」昭和六、十一)

第八章　助動詞

助動詞は主に動詞に從屬することによつて、概念を得る品詞である。それ故にいかなる概念を持つてゐるか、言ひ換へれば助動詞の意義の上から分類することが出來る。又動詞に從屬するには、多く動詞の語形を變化しなければならない。されば動詞との接續から分類することができる。又助動詞はそれ自身活用をもつてゐる。隨つて活用の種類の上から分類することができる。

助動詞の變遷も、またこの三つの方面から觀察しなければならぬ。たとへば使役をあらはすものは、奈良朝に於ては「しむ」であるが、平安朝に於ては、「す」「さす」であり、左行四段に活く尊敬の助動詞、波行四段に活く繼續態の助動詞は奈良朝を以て終り、推量の助動詞「あり」は平安朝に新に出來てゐるといふ類、平安朝以前に於て終止形に從屬した「まじ」は院政鎌倉時代以後動詞活用形變化の結果、或ものは未然形につくやうになつた。又「る」「らる」が平安朝以前は下二段に活いてゐたのに、院政鎌倉時代以後下一段に變化しはじめ、江戶時代以後甚だ

しくなつたといふ如き類である。それ故に、余は以下意義によつて助動詞を分類し、その動詞との接續や活用形の變化はそれに併せて觀察して見たいと思ふ。

一　受身可能及び自發の助動詞　今日の受身の助動詞は、「れる」「られる」で、下一段に活用してゐるが、その古形「る」「らる」が平安朝の受身の助動詞である。「る」「らる」は下二段に活用してゐる。この助動詞は又可能にも自發にも使はれる。

俊蔭が船ははし國にはなたれぬ(宇津保)

庭なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくていもねられず(更級)

今日は京のみぞおもひやらるゝ(土佐)

など、それぞれ受身・可能・自發の例である。奈良朝時代には、「る」「らる」は、

もろこしの遠き境に遣はされいませ(萬五)

おほかたかく伊波流倍枳朕にはあらず(續記宣命)

男のみ父の名負ひて女のこは伊婆禮奴物にあれや(同)

の如き例も稀にはあるが、この時代にもつとも普通の形は、「ゆ」「らゆ」で、下二段に活用してゐることは「る」「らる」と違はない。

我が宿に生ふるつちばり心ゆも思はぬ人の衣にすらゆな(萬七)

たちばなの本に道ふみやちまたに物をぞ思ふ人にしらえず(萬六)

妹を思ひいの寝らえぬに秋の野にさを鹿鳴きつ妻思ひかねて(萬一五)

「らゆ」の例は最後の可能に用ひられた「寝らゆ」が一つあるだけである。「いはゆる」「あらゆる」といふ語は、この「ゆ」の成語として今日に残つてゐるものである。「る」と「らる」とは接續する動詞の種類を異にし、「る」は四段・奈變・良變に、「らる」はその他の動詞につく。從つて「ゆ」と「らゆ」も同じ關係にあると思はれるが「らゆ」は用例少く、而も、

伊喩之之乎（イユシシヲ）(紀二六)

の如きものがある。恐らく受身可能等の意味は「らる」「らゆ」に於て「る」「ゆ」が持つてゐるもので、「ら」は「らる」「らゆ」が「る」「れ」活用の動詞に附くのを見れば、「る」「れ」語尾の影響であらはれたものに過ぎなからう。はじめは四段・奈變・良變以外の動詞にも、單獨の「ゆ」のみが附いたと疑はれることは、「見る」が「見ゆ」となつて可能を表し、遂に本動詞となつてゐることを、「きく」と「きこゆ」の關係、「思ふ」と「思はゆ」の關係から想像することができる。

「らる」が動詞に連るときには、その膠着の度を進めることが多く、「捨つ」から「捨てらる」が

出來て「すたる(廢)」、「かふ」から「かへらる」が出來て「かはる」となるやうに、本動詞になるものであるが、その習慣は今日も種々の新しい語彙を作り出し、「教へる」から「教はる」、「仰付けられる」から「仰せ付かる」、「かぶせられる」から「かぶさる」、「まけられる」から「まかる」、「やめられる」から「やまる」、「つとめられる」から「つとまる」、「持たれる」から優遇の意味の「もてる」などが出來てゐる。

左樣に連る場合にも、「せらる」が「さる」となることが室町時代から始まつてゐる。

遷タル四千餘家ヲ復サレタレバ(史記抄四)

蒯通ニ云ワサレテカウシタゾ(同一二)

上々根ノ人ニハ何トシテサレンソト問ンホトニ(碧巖抄三)

是はいかな事、まだ誠にされぬ(狂言墨繩)

「る」「らる」の一段化は、用言の一段化と前後して居り、その尊敬に用ひられたもので、「れる」「られる」となつてゐるものが、既に鎌倉時代に例がある。

右はかきくもるといへる五文字ぞ、ことはなれてをかれるやうにみえ侍れど(千五百番歌合)

今度參れと仰られるぞ(古今著聞集)

それと同じく可能の「る」「らる」も「れる」「られる」となつたが、「れる」は又動詞の語尾と約つて、例へば「よめる」「行ける」の如きものが出來た。これは四段に活く動詞に限るもので、室町時代から往々その例がある。

三字カヨメヌ(桃源抄、四)

江戸時代に一般の慣習となり、今日に及んでゐる。

二　**使役の助動詞**　今日の使役の助動詞は「せる」「させる」であるが、文語では「す」「さす」といふ。この「す」「さす」が時代を遡ると、平安朝の一般の使役の助動詞であつた。それではもつと古くはどうであつたかと云へば、奈良朝時代には、「しむ」を用ひた。それは、

夕されば汐を滿ちしめ、あけされば潮を干かしめ(萬三)

妹が手をわれにまかしめ(紀)

いかしやくはえの如く仕へ奉りさかえしめ給へと(祝詞)

の如きものである。

平安朝時代に入ると、この「しむ」は極めて稀になつて、土佐日記には「す」「さす」九個あるのに、「しむ」は、

御船すみやかにこがしめ給へと申して

たゞ一個、竹取でも「す」「さす」三四十あるが、「しむ」は、

させてこそ取らしめ給はめ

男どもの中に混りて夜を晝になして取らしめ給ふ

のたゞ二個のみである。源氏物語にも、「す」「さす」は數へ切れないが、「しむ」は一二個あるだけである。皆「給ふ」を伴ふものばかりで、多くは尊敬の意味に轉じてしまつてゐるものである。

「す」「さす」は下二段、「せる」「させる」は下一段に活き、前者から後者が變化して來たものであることは云ふまでもないが、今日の方言に見える形式は、その變化の中間過程を示して雜然たるものがある。

せ	せる	せれ	せ	せる	すれ	せ	する	すれ
させ	させる	させれ	させ	させる	さすれ	させ	さする	さすれ

これらの方言形式と並んで、

さ　し　す　せ

の如き四段に活いてゐるものがあるのは、注意すべきものである。方言の分布を吟味すると、下一段に活くものと四段に活くものと混用してゐる地域は極めて廣く、四段のみの形式をもつてゐる地方も少くない。それ故に、それらの方言にあらはれる活用を併せ掲げると、

さ　し　す　すれ

の形式は京阪から中國四國方言に多く、愛媛縣の、

さ　し　す　しやあ

の如きは四段である。已然形の「しやあ」は「せば」の約つたものである。この四段に活く形は、遠く中古からつゞいてゐた。次の如くである。

木の葉をも宿にふたさぬ秋風の（宇津保）

さらずはおほんふみもならはし奉らじ（同）

心ざまさとくて琴などもならはす人あらば（落窪）

箏こゝろに入れたりとてこれならはせよと北の方のたまへば（同）

いさゝけわざせさす物もなし（土佐）

たゞなる身をもてうつりもらさむことよ、我になりて思ふに、難しかしと、終夜思ひ明して（とりかへばや）

この四段に活らく形は、奈良朝時代に於ては、尊敬をあらはす助動詞であつたものである。當時の使役の「しむ」の「し」も、もと恐らく尊敬の助動詞で、使役の意味は「む」にあつたものであらう。形容詞から出た動詞「たかむ」「ひろむ」等と比較すると、この想像も不當ではあるまい。

「す」と「さす」は接續する動詞の種類を異にし、「す」は四段・奈變・良變につき、その他には「さす」がつく習慣であるから、左變につくときは「せさす」となる筈であるが、「せさす」が約つて單に「さす」となつてゐる例が往々見える。

いざさせ給へ。みむとのたまはすれば(和泉式部日記)

よき男の車とゞめてゐないさせたる(枕)

たゞ袖をとらへてとうざいをさせずこひとりてもてこずは(枕)

けしからず人にてんつかるべきふるまひはさせじとおもふものを(源氏若菜下)

佛をむかへ奉りて說法をさせまゐらすべきよし仰せありければ(寶物集)

「せさせ」の約ることは、「せ」が使役で、「させ給ふ」といふ尊敬に連る時にも同樣にあらはれる現象である。

その日の夕つかたたてまつらさせ給ふ(源氏若菜上)

いよ〳〵みち〳〵のざえをならはさせ給ふ(源氏桐壺)

琴ひくときかせ給ひてひかさせ給ひければ(金葉)

それ故に室町時代以後は、「せさせ」といふよりも、この省略形の方が優勢になる。

餘所へ嫁入リヨサセイト云(蒙求抄四)

人ヲ殺スニ犬ニサセゴトハ心得ヌゾ(同四)

德宗ノ時、宮市ヲサセラレタゾ(古文後集抄)

殊に漢字を根柢とする左綾に於ては、ほとんど皆この格である。

イクサヲシソコナウタレバ、皆生害サセラル丶ゾ(蒙求抄四)

母ノ子ヲ育テ、生長サスル如クニ自然ヨ待ツテ(古文後集抄)

天公カ此三人ヲ窮餓サセテ(同)

「しむ」は平安朝時代に於て、使役として用ひらるゝことが殆ど無くなり、纔かに尊敬の意味に殘つたが、院政鎌倉時代に再び今昔物語・法華百坐等に見る如く、極めて普通に使役に使はれ、以後この語が復活したのは、漢文訓點の影響から來たものだらう。

亦多クノ鷲ヲ飼テ生類ヲ令レ食シメ、亦常ニ海ニ網ヲ令レ曳メ(今昔一九)

コ、ニヤスマシメテツヒニ寶所ニイタラシメテネカヒニシタカヒテ財ヲアタヘムカコトシ（法華百坐）

大鏡にも、使役としても、尊敬としての用例も見える。

皇太后宮にいかで啓せしめんと思ひ侍れど、宮のほとりの人にあひ侍らぬが口惜しさに。

殿入道せしめ給ひて後の事なれば。

三　待遇の助動詞　もつとも古く動詞に添うて、尊敬をあらはす形式は、サ行四段に活用してゐる助動詞である。これは從來サ行延言と稱せられたものである。

なが名のらさね（萬五・九）　よさしまつる（續紀宣命）　かりほつくらす（萬一）

この形式は平安朝になつては成語として、「御佩刀（ミハカシ）」「御弓（ミタラシ）」などわづかに名詞のうちに殘つてゐるばかりで、文法的範疇としては亡びてしまつたものであるから、平安朝の語法を本として說く舊時代の文法に於ては、延言と稱せらるゝに至つたが、實は動詞の未然形につく助動詞であつたのである。「しる」「きく」「おもふ」「織る」から、「知らす」「聞こす」「思ほす」「織ろす」となつてゐるのは轉音である。

やすくにと平けく知ろしめせよ（祝詞）

くはしめをありと聞こして（記）

ま人言思ほすなもろ（萬一四）

女鳥のわが大君の織ろす機(記)

この助動詞は、主に四段活用の動詞に附くものであるけれど、稀にはその他の動詞にもつき、その場合には、多くは未然形が他の音に轉じてゐる。「ぬ」(寢)から出來た「なす」がある。

吾をまつと奈須らむ妹を(萬一七)

玉手さしまきもも長にいは那佐むを(記)

我か開かむに入り來て奈左ね(萬一四)

これは下二段についたものである。

一段活用の動詞の「きる」「みる」について、未然形がエ韻に轉じて「けす」「めす」となつてゐるのもある。

汝が祁勢流おすひの裾に月立ちにけり(記)

わがせこが蓋世流ころもの針目おちず(萬四)

體言に轉じた「みけし」、

ぬばたまのくろき美斯をまつぶさに取裝ひ(記)

もこの格である。「めす」は、次の如し。

よしぬの宮をあり通ひ賣須(萬一八)

大君の賣之し野べには標結ふべしも(萬二〇)

平安朝になつては、受身と同じ形の「る」「らる」、使役と同じ「す」「さす」が尊敬の助動詞として用ひられるやうになつた。

御覽じだに送らぬ覺束なさをいふ方なく思さる(源氏桐壺)

としかげ十六になるとし唐土船出したてらる(宇津保)

などは、「る」「らる」の例である。

「す」「さす」は單獨に用ひて、

泣く／＼ちぎりのたまはすれど(源氏桐壺)

の如きものもあるが、多くは、

心づよく念じかへさせ給ふ(源氏桐壺)

召してこそ使はせおはしませ(和泉式部日記)

のやうに、「給ふ」「おはします」等、助動詞化した尊敬の動詞と共に用ひてゐる。

尊敬の動詞が助動詞として用ひられてゐるものは、奈良朝時代に「めす」「ます」「たぶ」「た

まふ」等のものがあつたが、平安朝に至つては更に次の如きものが加つた。

おとどいとをかしとほのきゝおはす(源氏)

生れたまひつる御子をうつくしみおはさふ(宇津保)

されど歸りいましにけり(源氏)

なほみるにそでこそは見たうばむによく(宇津保)

召使はせおはしまさむと思し召さむ限は召してこそ使はせおはしませ(和泉式部日記)

などは、この種のものとして數へるべきものである。

謙讓をあらはすものとしては、奈良朝時代に、「まつる」があつたが、平安朝になつて、そのほかに「たてまつる」「まゐらす」「きこゆ」「仕うまつる」「まうす」の如きものができた。

女子も侍らねばむすめにし奉らむ(落窪)

げにいかならむと思ひまゐらする氣色にはあらで(枕)

身に染みてめでたしと、若き人々思ひきこえたり(源氏若紫)

後々の御わざなど孝じ仕うまつり給ふさまも(源氏榊)

中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて(同)

「まうす」は奈良朝時代「まをす」と云つたもの〻、その末期に轉じたものらしい(萬葉に四個の用

例がある）、共に助動詞としては殆ど用ひられず、萬葉に左の三例があるばかりだから、この用法は一般には平安朝以後の習慣と云はなければならぬ。

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして飛歸るもの（五）

諸の大御神たち船の舳に導きまをし（同）

住吉のあが皇神に幣奉り禱りまうして（二〇）

待遇語の一種で尊敬・謙讓の意味ではなく、談話の對手に對する丁寧な言ひ方が國語には發達してゐるが、中古時代には次の如きものがある。

參り侍りと申し侍りつれば（和泉式部日記）

えゝさぶらはじと申せば（枕）

いかで尋ねむと思ひ給ふるをいまにえこそ聞つけ侍らね（源氏帚木）

この意味の「たまふ」は尊敬の「たまふ」とちがつて、下二段に活用し、もつぱら「見る」「きく」「思ふ」といふ動詞につき、熟語の動詞に添ふ時には多くその間にはさむ。

不斷の三昧堂などいと尊く掟てられたりとなむ聞き給ふる（源氏浮舟）

いとほしう思ひ給へつゝみてなむ、いたう思ひ侍りつる（源氏若紫）

さわがしくのみ侍ると見給へむづかりて（宇津保）

稀には「知る」にも附く。

盗人仕ケシヨモ不ㇾ知給ハニズ(今昔、廿九)

「侍り」「さぶらふ」は、今日の「ます」と同じ價値に用ひられてゐるが、源氏物語など平安朝の文章には「侍り」が多く、「さぶらふ」は榮華物語や今昔物語など、院政時代以後に多いのを見れば、「さぶらふ」は新しい言葉で、それが鎌倉時代頃から大に勢力を得て、今日の書牘文の特色をなしてゐる「候」に發達するやうになつたものであらう。

この「さぶらふ」は室町時代にはすつかり形が崩れた。

夏ナラハイカニ蚊カ多サウラウラウト、云タヨナントスヽソ(桃源抄三)

骨相コソ奇怪ニサウラヘ(山谷詩抄一三)

御出シサフヘト云テヤルソ(同二)

ヲレハイツテミウテサウタヲ、ナニトヤラウシテ、イカテミサウヌソ(同三)

即位初元年に、五十七ニアタツテソウ(同一五)

今日「になる」といふ尊敬の言ひ方があり、標準語ではむしろ「なさる」「遊ばす」などより一般的のものであるが、その起源は相當に古い。

胸打騷テ居タル處ニ御ヒルニ成ケレバ例ノ先朝政ニモ及給ワズ、夜ノヲトヽヨ出テモアヘサセ給ハス(延

慶本平家)

尙鎌倉時代には、名詞に「なる」をつけた形で、尊敬をあらはすものが出來た。

一院モ内々仰セナリケルハ(平家一)

例の嵯峨殿の御幸たりて還御なる(中務内侍日記)

春宮もおなじく行啓なる(増鏡)

又室町時代には、

コチヘ、同心サシメト王子朝カ菅ヘ云タソ(蒙求抄一二)

扁舟ハ只數尺ハカリニテ短トテナ笑ハシムナ(錦繍段抄四)

上れ／＼上らしめのう石神(狂言小唄)

古敎照心如來禪ヲモ、得サシメウスヲ、サモナクハソ(桃源抄四)

の如き尊敬があゐる。一見さながら使役の助動詞から出たもの丶やうに思はれるが、使役の助動詞の「しむ」とは少しも關係がないことは、次のやうな形から考へられる。

此程ハ貴方ノイラシムテ、山ニモ共ニノホリテ、遊ヒシカ(三體絶句、四)

學問バシサシムタカト云ソ(蒙求抄三)

貴方ノイラシム湖南ノ昔山ニ上テ(三體絶句四)

これらは連用形、連體形の場合に、又「シモ」「シマ」と云ふ形がある。

明日常州ノ毘陵ノ邊ヘ行テ、アトヲ回顧シモハ(三體絶句、四)

陽關ヲイテ、、安西ヘモイラシマハ(同、四)

余はこれら(註一)を古くからある尊敬の「せます」「させます」から出たものであらうと考へた。「せ」「させ」は本來下二段に活いたものだが、室町時代には既に四段にも活いて、次の「します」「さします」の如き形としても現れてゐるのを見るであらう。

高祖ニ、カシマセト義ソ(蒙求抄八)

若只今ノ緩急ノ、ハタラキヲ、高祖ノキカシマスナラハ(同一〇)

疾(とう)といはしませ(狂言萩大名)

のう〳〵最前の人何さしますか(同文相撲)

湯澤幸吉郎氏(註二)は、「せたまふ」「させたまふ」の變化であると解釋され、史記抄に

イマ一度重射サシタマヘ(一〇ノ二九ウ)

ス、メモサシャマロスハ(一六ノ四七才)

の用例を擧げて居られる。これも傾聽すべき説であるが、同じ抄者桃源の勅規桃源抄に、

勅修淸規を講シ始メサシマシタ事ハ慈氏和尚ノ權輿也(一)

があり、

宰相ニナラシマサウトハ、ヲモヒモヨラナンダ也（蒙求抄一〇）

といふやうなマスの系統の形も見える。又

清天ノイラシモウサンヲイテ、ワトノハラニ可恥歟ト云タゾ（同二）

宋ノ明帝ノ道教ヲ好マレムテ、虚無ノ方ヲ本ニサシムサルニヨツテ、心ガ不得心ニイラシムホトニ（蒙求抄一〇）

の如きは、「申す」が變化して尊敬の意味に用ひられて居るのを見ると、これら問題になる尊敬の助動詞は、種々のものが崩れて合流して居りはしまいかと思ふ。

室町時代以後、「まいする」「まらする」といふ助動詞がある。今日の(註三)「ます」は之から出たと云はれるが、江戸時代まで尚、さきの「坐す」から來てゐる同じ形が並び行はれてゐた形跡がある。「まいする」は「まゐらする」の變化で共に用ひてゐる。

ソンヨトリニヤリマイスルトテ流シマイラセタゾ（桃源抄三）

「まらす」も「まゐらす」の變化したもので、元祿頃にも用ひられた。

有難う存じまらす（萬歳丸）

私めが持ちまらした濁酒(同)

「まらす」は約つて、「まつす」となつた。狂言記に、

おう知りやらすは、教へまつせう(狂言鹿狩)

はてさて好うこそおりやつたれ、おすへてまつせう(狂言吟聟)

などと見える。室町時代の「まらす」は抄物に見える通り、

錫貢ハイツモハ、マラセヌマラセイトアルトキマラスルソ(山谷詩抄二)

昭儀カ帝ニ毒ハシマラセタト云程ニ自殺スルソ(蒙求抄八)

上計吏ハ、國々カラ人ヲ年貢ノヤウニ、京ヘマラスルコトソ(同五)

のやうに、謙讓の動詞として用ひるのみならず、助動詞となつてゐるものも、

溫公カ申ノ、太子ニ立マラセタソ(山谷詩抄五)

哲宗ヲハ、ナシマラセウトハ不レ思ソ(同一四)

星ニ物ヲカシマラセタソ(蒙求抄二)

遊人カナンゾノヤウニト云テ上ヘ訴ヘマラセタ(同三)

の如く皆「まゐらす」の原義を保存してゐるものばかりであつたが、室町後期になると、移つてこれらの謙讓の助動詞のうちから單なる丁寧の助動詞となつたものが見えて來た。天草本の平

家物語や伊曾保物語などに見えるのが卽ちそれである。

さらば夜がふけまらせうずれども(天草平家)

出ない都近い所は火かく憂い事もや聞きまらせうずらう、暇申さう(同)

侍共皆打立つて只今法住寺殿へ寄せうと出立ちまらせうず(同)

「出立ちまらする」は平家原本の「出立候つれ」を口譯したもので、正に今の「ます」にあたり、活用もまた旣に連用形が今日の「まし」の如く「まらし」となつてゐる。

「まらす」はまた「おまらす」と云ふこと、

ならう〲この小袖は水に濡れも致さねば、其方におまらするでもおりやらぬぞ(狂言入間川)

どれ〲そのこぶを買うておまらせうぞ(同、昆布賣)

の如きものがあるが、又、

其儀ならば、たゞもえ取りやるまいほどに何を附けておまつしよ(狂言八句連歌)

の如き、「おまつす」といふ形がある。これには、

けふは其方におまさうと思ふて、酒肴を調へおいた(狂言茶盃拜)

此太刀は持古したれど、我御料におますぞ(同、盜人連歌)

此は業よしなれ共此を其方へおますぞ(大藏流、同)

のやうな「おまをす」といふ形が見えるから、「おまらす」が「おまつす」となり、「おまをす」となつたのと並んで、「まらす」も亦「まつす」となり、「ます」とかはつたと想像されてゐる。それ故、元祿頃にはまだ謙譲の助動詞にも、丁寧の助動詞にも相混じてつかつてゐる。

八郎左衞門、才助に膳を据ゑ「誠に麁相ながら心ばせを上つて下さりませい。扨々武士程情なきものはなし。主が下人となり、下人が主となる。是皆親の敵討たしません手段とはいひながら、此盆を持ち、しやなんとなされました時は、扨々侍冥加も盡き果てたなど存じました」云々(武道達者)

「敵討たしません手段」の「ませ」は謙譲の助動詞、その他は丁寧の助動詞。「しませ」は狂言記にある尊敬と同じものにも見えるが、これは未然形で左樣に活いてゐる(尊敬の「ます」は四段)。使役の連用形が「し」にかはり四段の形式を得てゐることは同じ元祿の脚本に「一家を繼がしまして、れ」「そこへは乳飲ましまする給ふこと葛の葉でござんすに」「家を繼がさん爲よ」以上いづれも女人結緣灌頂)と同じ。又次の如きは尙尊敬語で、これが「まゐらす」から出た「ます」と合流して、今日はもつぱら丁寧の助動詞となつてしまつたのだらう。「ます」の活用中に、四段の形式の混じてゐるのも、この關係から來てゐると考へられる。

あゝ殿は早まりました〳〵。必ず早まりますまいぞ(武道達者)

まへの例の「しやばれしなされました」も、尊敬であつたかも知れない。今日のやうに「ます」が純粹に丁寧語になつてしまつてからは、對手のことをいふには「早まりなさいました」といふ

註(一) 拙稿「足利期言語の待遇法」(國語と國文學 昭和三、十二)

(二) 湯澤幸吉郎氏「足利期の待遇助動詞シヤ、シマに就いて」(國語と國文學 昭和四、九)

(三) 春日政治氏「「マイスル」といふ語」(九大國文學第一號)

四、否定の助動詞

否定の助動詞「ず」は、

ず(未然)　ず(連用)　ず(終止)　ぬ(連體)　ね(已然)

と活用するが、連用形には「ず」の外に「に」がある。

せむすべのたどきを知らに(萬五)

進むも知らに退くも知らに(續紀宣命)

見れどあかにけむ(萬一七)

など奈良朝にもあり、又、

中納言の君いへばえにかなしう思へるさまを人知れずあはれとおぼす(源氏須磨)

いへばえにいはねば胸のさわがれて(伊勢)

いへばえにふかく悲しき笛竹の（古今六帖）

とへばえにとはればうしとうらむなり（隆信朝臣集）

など、平安朝にも用ひられてゐる。又東國方言に屬するものでは、「な」といふ未然形がある。

新田山、峰にはつかなな（萬一四）

濟々舟の忘れはせなな（同）

わが手觸れなな（萬二〇）

帶は解かなな（同）

これらを考へると、「ず」とは別に「な・に・ぬ・ね」と四段に活いた古い否定の形があつて、後に之に左行變格動詞「す」が結びついて出來た「ず」が、未然・連用・終止にもつぱら用ひられるやうになつたものであらう。多くの國語に於て[n]音が否定にあらはれると同じく、わが國に於ても、否定の觀念は[n]音にあらはれてゐることは疑はれない。この否定の助動詞の發生が[n]音の融合から來てゐると考へるには、「まからんとす」がマカランヅとなり、「まからんず」「まからず」となつてゐることなども參考にならう。

今日の口語では、この助動詞の連體形「ぬ」もしくはその變化した「ん」が關西方言には用ひら

れてゐるが、關東方言では之と趣を異にして、形容詞から來てゐる「ない」がもつぱら用ひられてゐる。「ある」の否定には、「あらず」も「あらぬ」も用ひられず、「ない」といふ形容詞そのものが用ひられてゐることは、關東方言も關西方言も同じである。

古代語でも「なく」「なけれ」等が否定に用ひられたものがあるが、それは連用形についてゐるから、それと近代語の「ない」とは語性を異にするものと云はなければならない。

けふよりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は(萬一[illegible])

これは「顧み」が體言に準ぜられて形容詞があらはれたもので、

それに少將を暫く預らうと申すに、御ゆるされなきは(平家)

ナセニ御説キナイソト思タレハ(桃源抄、一)

不審定トハ早クマサタメナイカワルイト云心ソ(史記抄、一一)

それに少將暫く預りまらせうと申すをお許されないことは(天草平家)

も同樣である、又、

お見やる通りわらはも異なる事もおりないよ(狂言伯母が酒)

希代の朝恩ではござないか(天草平家)

意趣を殘さらずる儀でござなければ(同)

のごときも見えるが、いづれも今日の「ない」の如く動詞の未然形について、助動詞の働をしてゐるものとは、全く性質を異にしてゐるものと、云はなければならない。それ故に、これら兩者の關係を考へることは早計のやうであるが、又一方に、

言はなくに　　思はなくに

等、未然形にも廣くつく「なく」といふ否定の形が、古くより用ひられてゐたことを考へる必要がある。又それのみならず、東國語には、

會津嶺の國をさ遠み逢は奈波(ナハ)ば偲びにせむと紐結ばさね
眞小薦の節(フ)の間近くて逢は奈敝(ナヘ)ば沖つま鴨の嘆ぞあがする
武藏野の小岫が雉子たち別れいにし宵より夫ろに逢は奈布(ナフ)よ

等、「なは」「なへ」「なふ」と活く未然形につく特有の否定の助動詞が行はれてゐたから、之に似てゐる連體形につく「ない」がいつか是らに聯想して未然形につくやうな習慣を生ずることも考へられないではない。「ず」でも「ざり」でも皆未然形につくから、否定の助動詞は一般に未然形につくといふ意識が、この勢を助けたことは勿論大きいものがあらう。もしその上に、語間

語尾につくハ行音が、ソ行音もしくはア行音にかはつた時代があることを考へるに於ては、關東特有の否定形「なふ」の連用形が「なえ」となつたと考へられる故、之と極めて發音の近い「ない」が之に聯想して、未然形に附くやうになるのは容易なことであらう。「ない」が關東方言に於てあらはれたことも、その由つて來る所を思はしめるものがある。おあん物語に、

　　こはいものではあらない

といふ例がある。これは關東方言の「ない」とは別であるが、「ない」が未然形についてゐる。之で見ても、未然形が否定の助動詞を引きつける傾向のあつたことは分る。

「ない」の過去は「なかつた」で「なく」に「ある」の接續から生じたものである。「ぬ」の過去は「なんだ」でその由來は明かでない。新村博士は(註一)「なふ」から來てゐると說かれた。關東方言の變遷を示す文獻に乏しいから、この形の見えてゐるのは、よほど新しい。否定の助動詞の文獻に見えてゐるのは、殆ど「ぬ」「なんだ」である。

　悶ハ爭ハヌ、道叶ハヌニ依ツテ物ヲモ云ハヌ（古今眞寶之抄）
　殘リノ者ニハ頭ヲモアゲサセヌヤウニ思ツタゾ（蒙求抄五）
　歡樂チヤウ云テ出ナンダゾ（同一）

三日三夜雜談シアツタカ、チトモクタビレナンダソ(同五)

又「なんで」ともいつた。

唐ノ代ニハ鯉魚ヲ殺サナンテ候(蒙求抄一)

その起源は分らないが、「なんだ」よりまへにナムシといつた形のあつたのは、同じ性質のもので、之より古いものである。

一日ニ二度參スル日ハ候シカドモ不參ノ日ハ候ハナムシ(平家延慶本)

これらに對して、「ない」が未然形についたもつとも古い例は、

敵にあはなひで、死なゝひ時は(雜兵物語)

目釘に心をつけて、ぬけないやうにしめされい(同)

緒が短くて掛けられない所で(同)

などであらう。これは關東方言で書かれたものであるからである。

「ず」が「て」に接續するとき「で」となる。この形が變化して「いで」となり、今も關西方言に見えてゐる。院政鎌倉時代から引つゞいて今日に至つてゐるものである。

このみこはやらかるみこよ、かたびらにしりをだにかゝいでゆゝしうつきうたるこれをみたまへ(梁塵秘抄)

馬カス、マイデ、ヲドツテ足カキマメ、ス、マヌソ(蒙求抄五)
音もせいで、おこれ〳〵、鳥は月に鳴き候ぞ(閑吟集)
汁も菜も見もせいで御奔走と申されけり(醒酔笑)

「じ」は語形變化がなく、終止連體に用ひる。これも「ず」と同じく起源は「らし」「ましじ」等にあらはれてゐる推量の意味の「し」と否定の助動詞との融合から來てゐる。近代語には姿を沒して、今日の口語では「まじ」から來た「まい」が、その代りをつとめてゐる。「まじ」は奈良朝には「ましじ」といひ、

ましじ(終止形)　ましじき(連體形)

と活用し、「ましじみ」ともつかふ。

敢ふ未之(マシジ)時として(續紀宣命)
己が得(ウ)麻之字伎(マシジキ)みかどの寶位を(同一本)
暫くの間も忘得(ワスレウ)麻之自美奈母(マシジミナモ)悲しび賜ひ(續紀宣命)

平安朝時代に「まじ」となり、形容詞と同じ活用をするやうになつた。音便を生ずるに至つて「まじく」が「まじう」、「まじき」が「まじい」となつたことも、形容詞と同じである。但し「まじ

う」は平安朝に普通であるが、「まじい」は鎌倉時代以後に出來た。

存ズル旨ガアレハ、名乘事ハ有マジイゾ(平家、七)

和田が居らする座敷に祐成が居まじいかと(幸若)

尋常ノ事デハ、アルマジイトゾ(三體詩法抄二ノ三ウ)

此疏語ニハサクマシイト云テ、削ラセタゾ(桃源抄、一)

室町時代に「まい」を生じ、「まじい」と共に用ひてゐたが、今日は唯「まい」を殘してゐるばかりである。

南泉ノ弟子ト聞及タバカリデモ、一見セズンバ知レマイ(碧巖抄三)

轉處カ無ンハ何ノ役ニモ立ツマシイ(同三)

先ツ今ハ出マシイト云ヘドモ(古今眞寶之抄)

「まじ」は平安朝以前は皆動詞の終止形についたが、今日の「まい」は接續が複雜で、殊に加變・左變動詞に於て甚だしい。ほゞ四段には終止連體形に、その他には未然形につくとだけは云ひ得る。かゝる混亂は早く始まり、まだ「まじ」の時期に、鎌倉時代に、

みまじきと思へども、さすがにまた見らるゝ也(後鳥羽院御百首)

もいらふやみはせまじきことなりとか(宇治拾遺)

の如き、未然形につける習慣が見え、室町時代には四段活用の動詞にも未然形に附けた。

儒者ニハナラマイト思テ武ヲ立ルゾ(山谷詩抄一三)

甕ノ字テハアラマイカ(同、一五)

しかし、これは稀な例である。

註(一) 新村出博士「天平時代の國語」(東亞語源志)

五　時の助動詞　時の助動詞は之を分ければ、過去・現在・未來の主觀的時間段階を現す時階の助動詞と、動作の時間的態樣を現す動作態の助動詞とにすることが出來る。わが國語では、「き」「けり」が過去を現して時階の助動詞に屬するだけで、その他の時の助動詞に數へられるものは、概ね動作態をあらはすものであり、尚未來と云はれる「む」は本來は推量をあらはす助動詞に屬する。いづれの國語でも動作態をあらはすことは、古代語に於て榮えたもので、わが國語の形式を研究するにも、この方面から觀察することが必要である。

わが國語にあらはれてゐる動作態は、繼續・存在・完了の三態である。繼續態は動作の進行繼續、完了態は動作の完了をあらはし、完了した動作の結果の存在をあらはすのが存在態である。時階が話者對事實の關係の上にあらはれる主觀的の時間的差別であるのに對して、動作態

は動作それ自身の上にある時間的性質である。それ故にかゝる動作態は過去・現在・未來のなかにあらはれる具體的の動作にも、はたまた何時と瞬時的に指定されない概念的動作に於ても存する筈である。

奈良朝の言語に於て、「散らふ」「翔らふ」「まもらふ」などの形が豐富に見えて居り、之を昔は波行延言と稱けたが單に音調の爲に延びたものとすることは出來ない。これはともなほさず、繼續態をあらはした形式である。平安朝以後に於ては、この形式は特殊な語彙に限られ、「かたる」「かたらふ」、「すむ」「すまふ」、「とる」「とらふ」、「うつる」「うつろふ」の如く、同義語もしくは同源類語として殘り、もとの繼續態の意味を失ひ、又往々「たまふ」に對する「たぶ」、「ねがふ」に對する「ねぐ」の如く、もとの形を殆ど忘られたものもあるが、奈良朝以前に於ては自由に活動した構成で、「おそふらふ」「もみたふ」「忍ぶらふ」「照らさふ」「歎かふ」「まどはふ」「ぬすまふ」などこの動作態をあらはす豐富な語彙が見えてゐる。

「つ」「ぬ」は完了態をあらはす助動詞である。往々過去とせられ、又完了と稱せられても時間段階的に考へられてゐたが、決して時間段階的性質のものではなく、純然たる動作態をあらはす形式なのである。動作態としての性質をもつとも明かに示してゐるのは、その概念的に考

へこれに動作を云ひあらはす場合に用ひられたものであらう。續記宣命に、

(上略)却りて身を滅し災を蒙りて、終に罪を己も他も致つ。これによりて天地を恨み君をも怨つ。(中略)然るものを口にのみは淨しと云ひて、心にきたなきをば、天は覆はず地の載せ許さぬものと成ぬ。此を持つ伊は稱を致し、捨つる伊は謗を招つ。

これは皇位を求むる人の心について述べ給へるもので、「罪を己も他も致すものである」「天を恨み君を怨むに至るものである」といふ一般的事實を述べてゐるのであつて、「つ」も「ぬ」も具體的事實が過去に屬したのでも、完了したといふのでもない。

「ぬ」と「つ」とは共に完了態と云つたが、その間にもまた自ら差別があり、前者は單なる完了、後者は完了とともに動作の惹起す結果の觀念を伴ふもの。その區別を示す爲には余はかりに一を完了態として一を已然態といふ名で呼んでゐるが、相通ずる意味をもつて總括して廣義の完了態としておく。くはしくは拙稿「つ、ぬの本質」(「國學院雜誌」第廿二卷六號乃至第廿三卷六號)を參考されたい。

「り」と「たり」とは、繼續・存在・完了の三態をあらはし、「り」の方が古い。又「り」は後世は主として完了につかはれるが、上代語では繼續・存在をあらはす方が多い。「り」の原義(「あり」

の膠着)を保存してゐるのである。記紀に於ける用例の統計をとると、

繼續態　五　存在態　二九　完了態　一

唯一箇の完了態の例は、

よくすに醸める大御酒

といふので、古事記には「かみし」とある。紀の「かゐる」は新しいものであらう。後世に多く發達した「り」の完了態の用法はこの時代には却て殆ど存在しなかつたことが分る。

「たり」は動作態をあらはす形式として、最も新しくあらはれてゐる。中古以後盛になつたもので、後に至るほど、「り」よりも勢力を得たことは、次に掲げる統計が示してゐる。「たり」は紀記には存在しない。もしありとすれば遠飛鳥宮の歌に、「汝が佐陀賣流」とあるのを、守部が「稜威言別」に佐陀賣多流と補つたものがあるが、これは守部が濫に加へたもので、記紀には僅かに「たり」が一つもないのを見れば、古い頃にこの形の存在は疑はしく、萬葉の中でも上國の言語として古い形と思はれる十四・二十の卷には唯一個づゝあるだけである。然るに十七の卷には九個、十八の卷には七個、十九の卷には七個、之を「り」と比較する時は、その率、次の如く、後に至るほど增加してゐる。

	記紀	萬一四	萬一七	同一八	同一九	計	土佐	源氏（末摘）	同（明石）	計	十六夜
り	三六	十五	二六	一九	二四	六九	九六	五三	六二	一一五	一六
たり	○	一	九	七	七	二三	三七	九四	八二	一七六	四五
	0.0%	6.2%				25.0%	27.8%			60.4%	73.7%

この統計にも見える如く、「たり」は奈良朝時代に漸く現れはじめ、次第に勢力を增して、遂に後世「た」となると共にもつぱら過去をあらはす助動詞となつた。

時の助動詞のうち、「き」はもつとも早く影をひそめた。鎌倉時代に於て、既に「き」のかはりに連體形の「し」が多く用ひられるやうになつてゐる。

　父子共に朝恩にあづかりし。(平家)

　一所に死なんとて契深かりし。(同)

之について「ぬ」が亡びた。「つ」「ぬ」は並ぶものと普通云はれるが、室町時代には「ぬ」は亡びてゐるが、「つ」は用ひられてゐる、

　サル程ニ范蠡ハ呉ヲハ我カ功テ破ツ。(錦繡段抄二)

今日マテ士民ナレトモ、シツル事カ候ソ(蒙求抄五)
後ニ學問シタ時ニ、ネツタウ、ステツラウト云レタソ(同一)
人ノ地ヲ借テ田ヲ作ツ畑ヲ作ツナトシテ母ヲ養タ事ガアルソ(同一)
果然サミツル事ヨ、打レタハ又マツサウアラフスト思タ(碧巖抄五)
橋はひいつ、敵にはあひたし、鑓を傾けて立つた所に(天草本平家)
妬う馴れつらう返す〴〵(閑吟集)

などつかひ、いまも「行つつらう」「遣つつらう」「死んづらう」などの形が、方言(山口縣など)にある。「つら」といふ形は、山梨・靜岡・岐阜等に存してゐる。「けり」は「ける」といふ形に於てのみ殘り、感動の意味に於て用ひてゐる方が多い。

マウサテハ我ガ運ハ盡タケルトテ、ムクト起テナコリヲシミノ酒ヲ飲ソ(史記抄五)

今日用ひる「たつけ」はこの形から來てゐる。靜岡方言には「見つけ」「降るけ」の如きものが殘つてゐる。「浮世風呂」には西國者の言葉として、

ぎら〳〵する事、鯨ども洗ふた跡どもの如(ごと)あるけへ。

とある。

時の助動詞の多くが次第に亡び去つて、最後に殘つたものが「たり」の變化「た」である。およ

その院政時代に、「たり」から「た」が出來てゐたことは、保延頃の歌人藤原爲忠の家集に、歸雁を題に、

時きぬとふる里さしてかへる雁こぞきた道へまた向ふなり

と云つて、「來た」を北に言掛けてゐることで分る。又、

誰ソト問ヘハ鳥羽ヨリ女房ヲ只今打入テ敍シ奉リタ。トハ何事ソト云（平家延慶本）

根井又立出テ使ノ雜色ニ猫殿ノ參リタ。トハ何事ソト云（同）

と見えるから、院政から鎌倉時代にかけて口頭語の上に、おひ／＼出來てゐたものに違ひない。

室町以後はそれ故に「た」が過去の意味にも使はれ、又種々の動作態にもつかはれてゐる。過去の意味のほか種々の動作態につかふことは次の例に見られる。

梅ト此花ハ、ヲトツタ。カマサツタ。カ、定等差ヲ定メウソ（山谷詩抄、一五）

或人肉臠を銜んで河を渡るに、その河の眞中で銜んだ。肉むらの影が水の底に映つた。を見れば、己がふくんだ。よりも一倍大きなれば影とは知らいで銜んだ。を棄てゝ（天草本伊曾保）

物の數でもない小鼠どもをわが手にかけて殺さうこと、かへつてわが名をけがすに似た。（同）

學文ズキデスグレタ。オガアルソ（蒙求抄五）

面テノ詞トハ絶妙ノ詞ヂヤトホメタ心ゾ(同)

家語ニ少々アレドモチガウタゾ(同)

の如きは、決して過去ではない。文語の「たり」は形容動詞につかないのに、「た」は室町時代に、

一義ニ官次ガ、イヤシカリタゾ(蒙求抄七)

是ガス、メタ者ニ、アダナ者ハナカツタゾ(同)

命にもかへて惜しかつた馬を(天草本平家)

の如く用ひてゐる。これは過去の助動詞としては、「た」が唯一のものでなかつたことを示すものである。

連體には「たる」を用ふることがある。その例、

煬帝ノ宮殿ノアトハ百姓ノスミカトナツタルニタトヘタゾ(三體詩法抄二)

人ノ死ンダルシヤレ頭ヲトツテアツメ置テ(同二)

未然形「たらば」が「たら」となつてゐることは、次の如く室町時代既に今日の口語と同じ。

いとほしいと云ふたら叶はうずことか(閑吟集)

又次の如く單に物を並例するのも、今日の用法が當時に發してゐることを知る。

薪ヲ取ツタリ庭ヲハイタリスル形ゾ(古文眞寶之抄)

已然形に「たれ」を殘してゐるのは、今日の口語よりも原形を保存するに近い。

徽宗ノ天子トナツタレハコソ、天下ハ定タレ（山谷詩抄、一五）

天子ノ明ナ徳ガアレバコソ、臣ガツツトシタ功モユツタレトカウ云タゾ（蒙求抄四）

未來の助動詞と云はれる「む」は「む・め」と活くが、その起源に遡れば、「まく」「まし」の「ま」もまた同じ性質のものと云はなければならない。東國方言では、なほ「も」といふ形もある。已然形の「め」は、平安朝を以てその生命を終り、「む」は母音を失ふと共に、[m]が[n]とかはり、同時に[u]とかはり兩者並び行はれたが、否定の助動詞に「ん」を生ずると共にもつぱら[u]をのみ用ふるやうになつた。

院政時代にすでに「う」を生じてゐたやうである。

先帝聖靈ニコ、ロサシタテマツラセタマハウニウタカヒナク（法華百坐）

イキタラム師子ノ血トリテタテマツラムモノニハマウサウニシタガヒテ賞ヲシコナヒ（同）

古事談に、山林房覺遊といふ奈良法師が、合戰の日、いち早く逃げたので、先陣房リクレウといふ綽名のついたと云つてあるのは、「隱れん」を「かくれう」と云つた爲であるが、こんな秀句にまで用ひたのは、鎌倉時代にはもはや口頭語の上では、一般に「う」の方を用ひてゐた爲に

ちがひない。

「う」は又一部は「よう」となつた。「む」が「う」になつたとき、はじめは、

（一）　行かう　　來う

（二）　受けう　　爲う

（三）　起きう　　見う

になつたが、ついで四段・奈變・良變以外に於て、

（四）　受けよう　　起きよう　　見よう　　來よう　　爲よう

といふ形が出來た。閑吟集に、四段・奈變・良變以外の動詞の未來形のあらはれてゐるもの合計十三箇あるが、そのうちに既に後に「よう」といふ助動詞を生ずるに至る端緒が見えてゐる。

忘れう　　來う　　爲う　　暮れう　　何爲う　　爲よう　　寢う　　爲ようずらう

見う　　入らせう　　入れう　　何と爲うぞ

いづれも單純に「ん」が「う」となつただけであるが、そのうちに「爲う」はまた「しよう」といふ假字を以て書きあらはされてゐる。「う」は動詞の語尾と融合して長母音となつてゐたことを示すもので、「せう」はオ列拗長音となつてゐた爲に、「しよう」とも記してゐるのである。今日の

ごとく、「し＋よう」ではない。

これが進むと、多くの動詞の未來形がオ列長音もしくはその拗音であることから、上一段・上二段の動詞にも之に類推して、次の如きものが出來た。

見よう　　亡びよう

これもまだ後世の如く、「よう」といふ獨立した助動詞を分出してゐないことは、天草本の平家や伊曾保などに、歐字綴で「見ようと」「亡びよう」をあらはしたものが、

meōto　　forobeō

となつてゐるので分るが、之が繰返されると、そのうちに「よう」といふ音を獨立のものとして分析して來る。この分析にハ行ヤ行ワ行の二段動詞の未來形が、語尾と融合して「仕よう」「見よう(見えんノ意)」「植よう」の如く、「よう」そのものとなつてゐたことが、大いに關係のあることは、まづ考へて見なければならない。現に抄物にもすでに「よう」と假字書きにしてゐるのも稀でない。

(甚)トナコウスラウ(桃源抄一)

ナニカ孤ナル楚ト中ヲコクセウトテ六百里ノ地ヲアタヨウソ(史記抄一〇)

涯分扶持ヲクワヨウナント、云ッ(同三)

その結果「よう」が取離されると、動詞はもとの動詞の形を傷けられ、その概念を現すに足りないから、あらためて動詞の未然形に附けるやうになつて、今日の如き、「おぼえよう」「見えよう」「起きよう」の如き未來形を生じたのである。これはおもに江戶時代に關東方言の上に出來た。左變が「しよう」で、未來形を「し」として受けてゐることも、その一つの證據としてよからう。それ故に、江戶時代にも關西方言に屬するものには、依然として、次の如く見える。

主從の盃をせう(萬歲丸)

何と共方は下人か何と共方も抱ようか(同)

やがて歸參するやうに御水をあげう(一心女雷師)

見るもの每に惚れうならば(同)

江戶時代中期には關東では

もう出ようか〳〵おもふたが(八景聞取法問四)

今夜は我らちともめやうとて笊蕎麥を二分が買へば(同)

來年の盆には必ず來ようとおもふな(同三)

のやうに、四段以外には皆「よう」、たゞ左變だけは

一盃せうといへば(八景聞取法問三)

と使つてゐる。從つて、後期の浮世風呂、浮世床等にも、皆その例で

内の用心を見やうと思つて手燭を持つて(浮世風呂)
小裁を見つけたら拵へよう〳〵と思つた所(同)
雲とつけやうか(浮世床)

左樣だけやはり「せう」が多いが、間々

ム、仕やうョ(浮世風呂)

の如きものが見えて來た。

室町時代以後の未來の助動詞を數へるならば、「う」「よう」のほかに、「うず」を擧げなければならぬ。これは「んとす」の約つた「んず」が、平安朝時代に既に口頭語として存在したのが轉じたのである。院政鎌倉時代に既に「んとす」「んず」が單に未來をあらはし、やゝ「ん」よりは語勢の強いものとなつてゐたのである。

此ヲ取テ艶ズ調美シテ平茸ゾト云テ、此別當ニ食セテバ必ズ死ナムトス(今昔廿八)
父ノ御子此レヲ聞カバ此ク制止スルヲバ不レ知ズシテ、我ヲコソ被レ恨ムトスレト仰セ給ヒテ(同、二八)

慶喜トマフシサフラフコトハ佗力ノ信心ヲエテ往生ヲ一定シテムストヨロコフコヽロヲマフスナリ（親鸞消息）

これがまた、「うず」ともいひ、

名乘ラズ共頸ヲ取テ人ニトヘ、見知ウスルソトゾ、宣ヒケル（平家九）

千人ノ僧ノ中テ、大悟シタラウス人一人ニ布施ヲセウス、悟タラウ人ハ、名ノリ出ヨト云ソ（敕規桃源抄一）

コノ寒天ニ、イマチツトモイネタカラウズガ宰相ノコトナレバ出仕申サイデモカナハヌソ（中華若木詩抄五）

善コトヲモ惡ヲモ手本ニセウスルト云コトソ（蒙求抄一）

東坡ヲ以テ正トセウズ程ニ（三體詩法一）

百丈云ハフズ事カ先フテサヤウニ云ハル、カ（碧巖鈔七）

などいふやうになつた。この形が關西地方一般に行はれたと思はれ、天草本伊會保物語にも、

是非に本望を達せうずる

せめん農人の所作なりとも宛がはうず

とあり、同じ天草本平家物語にも、

定めて北面の者どもが中にあらうず。

御幸をなし奉らうずると思ふはいかに

など極めて普通で、その後も元祿頃まで用ひられて近松の淨瑠璃などにも散見して居り、その上、方言として今日も三河・尾張・遠江・美濃・信濃の諸方に、「書かず」もしくは「書かあず」の如き形として殘つてゐる。即ち關東方言に於ける「べい」といふ特殊の未來形に對して、關西方言の系統に屬する方言的形式となつてゐるものである。遠江地方の方言に、見セスカといふのは「見せようや」といふ反語の言ひ方であるが、既に室町時代に疑問の形として見えてゐる。

夏殷周三代ニ九廟アラス歟、七廟アラウス歟ト云事カアルソ（桃源抄）

關東方言の「べい」は、推量の「べい」から來てゐる。人の名にまれて昔から「關東べい」と云はれたほど名高い特殊の語形である。「書くべい」「起きべい」などいふ。又「かくべ」「起きんべい」など變化した形もある。東京にはないが、關東の諸地方、東北の諸縣に用ひられてゐる。

安くば乘るべい。（東海道中膝栗毛）

見付たら面の皮ア引めくつて呉れべい。（浮世床物ノ上）

六　希望の助動詞　希望の助動詞の「たし」は院政鎌倉時代に現れたもので、自然、歌には當時

嫌はれてゐた形迹がある。千五百番歌合の、

いざいかにみ山の奥にしをれても心しりたき秋の夜の月

を、判者定家は、「これを俗人の語にきくといへどもいまだ和歌によまぬ詞也」と批難してゐる。形容詞と同じ活用をしてゐるが、近代語に於て「たき」が「たい」となり、「たく」が「たう」となつてゐるが、室町時代には次の如く用ひてゐる。

シタイママニスル心ゾ、河山ヲモ分裂シテトラセタイ儘ニ取ラセタゾ（古文眞寶抄）

實接ノ體ヲモシリタウヲホジメサハ（三體絶句一）

「たう」の否定で、「たう」に助詞「も」を挾んで「ない」を附けたものは、當時「たうもない」から「たむない」となつて居り、

少游ハ人ニ知レタムナカルゾ（山谷詩抄、十）

高祖ノ人ニミヘタムナガラレタゾ（三體絶句、二）

など見え、更に轉じて、

今日程參りとむない事にない（狂言、清水）

法華にはなりともなうおぢやる（同、宗論）

となつた。從つて「見たうもない」は「見たむない」となり、「見とむない」となつて、今日の「見ともない」即ち不體裁の意味の形容詞を作り出したと想像される。その反對の意味の語に「見たもよい」といふのがある。

張毅カ事ヲ莊子ニ云ハ見タウモナイ程に(山谷詩抄、十一)
ミタムナイカホガ猶ミタムナカツタ(蒙求抄、四)
薪ウルタニミタムナイニト云ヘバナヲ歌ソ(同、五)
狩の門出に見とむない奴めが行居る事ぢや(狂言鹿狩)
アレカ女房ニミタモヨイソ(山谷詩抄、十三)

七　推量の助動詞　推量の助動詞の「べし」は形容詞と同じ活用をなし、形容詞に非常に似た性質を持つてゐる。語幹が單獨に用ひらるゝ如きは、その著しいものである。

いはむすべせむすべ知らに(萬五)

この「すべ」は動詞の「す」と語幹「べ」の複合して出來てゐる熟語である。形容詞の語幹が熟語を作るのと同じ趣がある。語幹に接尾語の「み」「ら」が複合して「べみ」「べら」となることも、形容詞の語幹に似てゐる。

いた泣かば人知りぬべみ(紀)

これは形容詞の「里遠み」「春淺み」の如きものと比すべきものである。「べら」は「べらに」と用ひ、又之に「あり」が複合して「べらなり」と用ひるのは、形容詞の「清らに」「淸らなり」、「さかしらに」「さかしらなり」などと比すべきものである。「べらに」は稀であるが、今昔物語に、

不レ知ヌ茸ト思スベラニ獨リ迷ヒ給フ也ケリ(今昔廿八)

と見えてゐる。又その連用形「べく」が「あり」と複合して、「行くべからず」の如き形に用ひられることも、形容詞の「多からず」「少からず」の如き例と比較すべきものである。

「べみ」は奈良朝時代に活動した語法で、平安朝には詩語のうちにのみ殘り、「べら」は平安朝にのみ特有な語法で、延喜前後殊に貫之の歌に多い。

散りぬべみ袖にこきれつ藤浪の花(萬)

さほ山の柞のもみぢちりぬべみ(古今)

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる(土佐)

平安朝時代に音便で、「べく」は「べう」となり、「べき」は「べい」となつた。

車より落ちぬべうまどひ給へば(源氏桐壺)

いまゆくするはあべいやうもなし(更級)

思へば怨めしかべい事ぞかし(源氏胡蝶)

この助動詞は「べい」「べう」といふ形で、後世までも行はれた。

ナカスヘイ處テ、ナカセ、ワラハスヘイ處テ、ワラワスルヤウニ機ニ應ズスルソ(桃源抄一)

然るべい使があらば(天草平家)

是シカルベイ者デアツタゲナ(蒙求抄三)

壁立モ及ベウモナイソ(同二)

室町時代に終止形にも「べい」を用ふるやうになつてゐる。

物外トコミツケタカ、物外トヨミツヘイ、智證大師ノ、唐テ物外ニ問タカソレモフツトコミツヘイト、北林ノ云タ(山谷詩抄十三)

定めて今に八島の大臣殿の見参にも入りつべいと存ずる(天草本平家)

今日關東方言に特殊の未來をあらはす「べい」と云ふのは、この助動詞の活用中、今日に殘つた唯一の形である。室町時代に、

循吏傳ヨリハ、儒林ハ上ニアリツヘシイカ、ナニトシタレハ、下ニアルソト云ヘハ(史記抄一五)

眞ノ山ノ居所ト云ツベシイ體ソ(三體詩法四)

雨原憲が樞に濕ほすともいつつべしい(天草本平家)

と云ひ、又稀には

翰墨場テハ伏波トモ、云ツヘイキカ、ナニモショウハ、ハヤ年カヨツタソ(山谷詩抄十四)

など「べしい」「べいき」とあるのは、「べし」の變化の上にあらはれた一種の異例であるが、一つべし」が慣用語として用ひられた爲に、この時代に偶然生じた特殊の形であらう。「つ」と共に用ひられた場合にのみ現れるものである。「べし」は用言の終止形が亡びると共に、その所屬に迷つて未然形につく例が多く出て來た。足利義滿の頃の「今川大双紙」には、

馬の右を御めにかけべし

馬の左のむなかひを取ておしつめてかけべし。

しるてのらせべからず

手をそへてさげべし。

の如くすべてこの形で使つてゐる。又抄物には、次の如く見える。

見ラレベキトコロノ實景ソ(三體家法三ノ三)

吳山ノ景氣ヲ、ナカメラレベキソ(同)

「まし」は現實に反する想像をあらはすに用ひ、平安朝時代には、多く上に假定の條件をおいて、

この風今暫し止まざらましかば、潮のぼりて殘る所なからまし(源氏明石)

見し人を松の千とせに見ましかば遠くかなしき別せましや(土佐)

のやうに用ひ、その活用形は、

まし(終止)　まし(連體)　ましか(已然)

としてあらはれてゐる。

さてその紛れに我も人も命堪へずなりなましかば、いふかひあらまし世かはと思し直す(源氏若菜上)

これが連體形の例である。奈良朝時代には、已然形がなかつた。それ故に、宣長は活かぬてにをはとして居る。

奈良朝時代にもある「ませ」といふ形をもつて、未然形のあつたものとする說がある。大槻博士をはじめとして、この說を持する人があるが、どうであらうか。宣長は玉緒に、これを「まくせば」の約といひ、義門は「玉緒繰分」及び「活語雜話」に、「一行かまほしくなどの「まく」にた[illegible]い未然形「せ」が添うて出來たものと云ふ說を唱へてゐる。近代語には、亡びて用ひられなくなつ

た。

「めり」は、萬葉集十四に、

小草男と小草助丁と潮舟の並べて見れば乎具佐可利馬利

とある可利馬利を元暦本・類聚古集等に可知馬利とあるによつて、「勝ちめり」と訓み、奈良朝時代に「めり」のあつた一つの例とする人もあるが、ほかにその用例もないし、連用形を受けてゐるのも異様であるから、この助動詞の奈良朝時代に於ける存在は疑問と云はなければならぬ。この助動詞は平安朝時代に生じ、多くは記載語として榮えて、後の時代にはやがて用ひられなくなつたものである。

この道もかしこからざめり(枕)

のごとく推量を原義とするであらうが、もと「目」「見る」などと語根を同じくし目撃する意味を現すところから、客觀的にさうと斷定してよいことを、「自分はさう見る」とやゝ斷定を控へる心持を持ち、斷定を婉曲に言ひ表す助動詞として用ひられるやうになり、院政時代以後は多くこの意味で用ひられてゐる。

例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人嫗といきあひて同じところにゐぬめり・・・さてぬし

の御名はいかにぞやと云ふめれば・・・ぬしはいくつといふこと覺えずといふめり・・・それにていと
やすく數へてむといふめれば(大鏡)

「らし」は奈良朝時代には、

らし(終止)　　らしき(連體)

と活用し、連體形として、

古も然なれこそ空蟬も妻を爭ふらしき(萬一)

の如き形を示してゐるが、平安朝にはたゞ「らし」だけになり、左の如き用法となつた。

らし(終止)　　らし(連體)　　らし(已然)

み山にはあられ降るらし外山なるまさきのかづら色づきにけり(古今)
ふる雪はかつぞ消ぬらし足引の山のたぎつ瀬音まさるなり(同)
松のねに風のしらべをまかせては立田ひめこそ秋はひくらし(後撰)

今日の口語の「らしい」は、又別に接尾語から轉じて出來たもので、

らしく(連用形)　　らしい(終止連體形)

とはたらいてゐる。

「む」「らむ」「けむ」は奈良朝から平安朝にかけてひろく用ひられ、平安朝には「ん」「らん」「けん」と發音がかはつた。「む」は未來の推量又は時に關係のない推量につかふ。未來の助動詞は之から出たものである。「らむ」は現在の推量につかひ、隱れたる事實を推量し、又眼前の事實から隱れた事情を推量する意味もある。

あごの浦に船のりすらむをとめ子が珠裳の裾に潮みつらむか(萬一)

立田姬たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ(古今)

前者は行幸の御供にある女房を、京に在して人麿が想ひやつて詠んだもの、後者は秋の木の葉の散るを見て、立田姬のぬさを手向けられるのだらうと想像してゐるのである。もしさる事情の分らぬ時は、疑問の語を加へるか、平安朝の和歌ではそれを省くことがある。宣長が玉緒に「かな」に通ふ「らん」といつたのは、この種のものである。

知るといへば枕だにせでねしものを塵ならぬ名の空にたつらむ(古今)

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ(同)

院政鎌倉時代以後「らう」となり、室町時代まで用ひられてゐる。

得サレバコソ得タレ、得タラバ得サラマジ賢得サリシカナニ得ニガラウニト說給ハマシ(沙石集)

千年ニモ二千年ニモナルラウト思フ古木ノ(湯山千句)

女ノ身テサコソアルラウ(山谷詩抄、十二)

傳書様ナ事モアリヤセフズラフト(三體詩法抄四)

其心はナントアラウズラフ不レ知(同四)

嗚呼我兄弟共ガ高キニノボッテ、頭ヲアツメテ會スル處、皆遍ク茱リヲサシハサミソヌルラフ、我一人其席ニ陪セヌコトソ、アナタニモ思ヒタスラフナリ(三體絶句五)

平安朝以前には、動詞の終止形についたものが、連體、終止同形となつてからは、連體形についてゐる。

江戸時代にも、

其方も彼袋の類と思ふて居つらうがおれがやうなこすいこた者に見付るが因果(八景聞取法問一)

のやうなものは見えるが、次第に衰へて、中國四國地方の方言に「ゆくらう」「行つつらう」など殘つて居るばかりである。

「けむ」は過去の推量の助動詞である。奈良朝時代には、「き」の未然形「け」が「けまく」「けまし」など推量の助動詞に接續するのと一般、「む」と連結したもの。平安朝時代には「けん」とな

り、古代語として亡びた。

八　指定の助動詞　指定の助動詞の「あり」は存在を意味する用言であるが、之が「に」と結び付くときに、「なり」となつて、命題を作る繋辭の役目をする。この「なり」を指定の助動詞と云つてゐる。「と」と「あり」の結びついた「たり」も指定の助動詞と云はれるが、「なり」の如く古い起源のものでなく、漢文訓讀のため起つたもので、形容動詞と云はれる、「昭々たり」などの「たり」と語形の起源は同じで、

汝ヂ宿業拙クシテ今生貧キ身ト有リ。而ルニ懃ニ我レヲ念ズ云々（今昔、一七）

但シ貧シキ身ト有ルニ依テ、命ヲ存セムニ便无シ（同、一二）

かゝる用法から出てくる。中古文學にも、

あくれば五日の曉せうとたる人外より來て（蜻蛉）

よみとげむ庵たるべくも見えなくに（古今六帖）

のやうなものが少し見えるが、多くのが使はれるに至つたのは、後に和漢混淆文の行はれるやうになつてからである。

室町時代には、「なり」の連體形「なる」が「な」となり、終止形も同じ形を用ひて、

唐ニハ度牒ヲ取カ大事ナソ(勅修百丈清規、兩序章)
誰モ無力ヲスル者ナ程ニ(蒙求抄四)
形ヲ土木ニスレドモ天然人爲ナホドニ(蒙求抄二)
竹雲ノ木ハ無點ナホトニゴテコソ候ラウソ(同四)
見ニ谷詩ニ眼モ明ニ成ル様ナソ(錦繡段抄三)
梁ハ横ナ、柱ハ竪ナ、横ナモ竪ナモ、各其用ニタツトムハ(莊子抄二)

などなつたこともあつたが、「にて」の約つた「で」と「ある」とを連ねて、「である」といふのを用ひるやうになり、それを省いて「であ」といひ、又約めて「ぢや」「だ」となつたものが、その後一般の指定を現すものとして使はれてゐる。ロードリゲースの語典に、「であ」が正しい、それをぞんざいに發音する時、「ぢや」となると説明してゐる。

李善が自ラスル註デアル程ニ(三體絶句一)
さてはこれこそ宮の御首であると定められた(天草本平家)
凡人よりも重罪に附することであ(天草本伊會保)
常人ニハナイ物デヤソ(湯山千句)
路ハ相伴ヂヤ程ニ、腹立ヽマイ事ヂヤニ腹立シテ(蒙求抄四)

室町時代には、これらの形は相通じて用ひたのである。

身ハ威儀デアルホドニ律ソ、ロハ經チヤホドニ教ソ(勅修百丈規兩序章)

室町時代に於ける「だ」の用例は多くはないが、次の如く見える。

楚項羽ニ書ヲ學セタレハ書ハ只姓名ヲシルス程ダニ書ハ無用ト云ヽ(湯山千句)

是不是共ニ打テ落シケヅリ落ス末下ニアル活處ダゾ(葛藤集)

無所得ニシテ理知ノナイガ獅子吼ダゾ、理致は野干鳴ダゾ(同)

身命ヲカヱリミス所存カ猛虎ダ(同)

これらは「ぢや」と混じて用ひてゐる。「ぢや」は後には終止にのみ限られるやうになつたが、初は連體形としても用ひて、

ソサウナト、云レタ者ヂヤサヘ、是ホドニ念比也(蒙求抄八)

罪人ヂヤ程ニ(三體詩法四ノ四)

爰ハ玄孫デハナイ、彦ヂヤヲ錯テ玄孫ト云ヽ(蒙求抄一)

「母ぢや人」「兄ぢや人」「親ぢやもの」なども、連體形の遺物である。稀に「ぢやる」といふ形も見えてゐる。

たゞ人には馴れまじものぢや、馴れて後に離るゝるるゐるが大事ぢやるもの(閑吟集)

「だ」と「ぢや」とは、關東と關西とで相對立する二種の形である。室町時代のものに見えるのは、おほむね「ぢや」であるが、抄物のうちに「ぢや」に稀に混じて「だ」が用ひられてゐるのは、關西でも「だ」を用ひたと考へるよりも、抄物は講義筆記であるから、筆記した人が關東出身のものであつたりする場合、その方言を混じたものと想像して然るべきものであらう。「倭訓栞」大綱に助語をつゞめることを説明した所に、尾張の人は「でや」と云ふのを江戸の人は「だ」と云ふとある。

國語調査委員會の「口語法別記」に、

だは東國の口語であるが、古くつかつてゐたか分らぬ。書物に見えるわ、江戸時代からで、それも初め誠に少ない

と云つて、

西翁十百韻　西國にて、くれないか是非是非花を所望だぞ

雜兵物語、上、足輕小唄　なまくらものでは切ぬものだ。同、上、槍擔小唄、各の腹中にあるべい事だとおもひ申せ

などあげてあるが、室町時代の文獻に「だ」と見えることが少いのは事實であるが、それは皆關

西方言で書かれてゐる爲で、事實は「おや」と並んで關東方言では「だ」を用ひ、それが稀にはこの時代の文獻にも現れてさきに示した抄物の數例の如きものがあるのである。

指定の對話語は、「あり」の丁寧な言ひ方が「侍り」「さふらふ」であるから、古代語に於ては、「にはべり」「にさふらふ」又は「にて侍り」「にて候ふ」で、

めづらかなる事に候ふとかたる(更級)

しかそれさる事に侍り(大鏡)

此らはもとより覺悟の前にて侍れは(保元)

是は東國方より出でたる僧にて候(謡曲融)

など云つたが、近代語では、「でございます(でござります)」「です」を用ひるやうになつた。

「ござる」は「御座ある」の約つたもので、室町時代後期に出來た。はじめは「あり」の尊敬動詞であつたが、ついで、「ある」を丁寧にいふ語となり、つひに指定助動詞の丁寧な言ひ方となつた。

この宰相と申すは淸盛の弟でござるが(天草本平家)

いかなる御事にてござるぞ(同)

はじめは單獨に用ひたが、後には「ます」と連結して「ございます」といふ形であらはれるやうになつた。狂言記などはその初である。

　叶はぬ事でござりまするに(烏帽子折)
　是は御芽出度事でござりまする(ひめ糊)

「です」は「ございます」より新しいもので、

　遠國に隱れもない大名です(狂言萩大名)
　羽黒山より出でたる駈出しの山伏です(同柿山伏)
　京内參りをすれば主に暇を乞はぬ法ですか(同二千石)

など見えるから、室町時代にも既にあつたものだが、今日の如く「です」と云つたものでなく長音で、江戸時代の、

　みかげの里に、かくれもない、びやくがうの彌陀六といふ男でえす(一谷嫩軍記)
　ひまでえすか(洒落本眞女意題)
　傍あたりの鼻があぶねへでえすは(浮世風呂前篇下)

と同じものである。又、

　河内屋の與兵衛でやすとつつと入る(女殺油地獄)

ア、りよく/\はいながら太夫であんす(加増曾我)

などとも關係がある。國語調査委員會の口語法調査報告によると、

であす青森縣南部　だッす山形縣北村山郡　であす青森縣南部　だッす山形縣北村山郡　だやす富山縣下新川郡

であんす茨城縣、山形縣西村山郡、島根縣簸川郡　でござんす島根縣簸川郡　だす大阪府　どす京都府

など種々の方言の形があるが、東京語で、「です」を使ふに至つた由來については、「口語法別記」に、「です」は、隨分古くから、つかつて來た語のようであるが、江戸でわ、元と藝人言葉で、輕薄な口調の「でげす」などと同じもので、明治以前わ、噺家、太鼓持、女藝者、新吉原の茶屋女などに限つて、用ひられて居たもので、その女が、素人になつても、「です言葉」が出て咎められて、困つたもので、町人でも、身分のある者わ、男女共に用いなかつた。それが、今のように、遍く行われるようになつたのわ、明治の初に、田舍の武士が江戸へ出て、柳橋新橋あたりの女藝者などの言葉を聞いて、江戸の普通の言葉と思つて、眞似始めたからの事であろう。それであるから、餘り馨ばしくない語であるが、今でわ身分のある人々まで用ひられて、もはや止められぬ程の言葉となつた」とある。「です」の語源については定説がない。中村通夫氏の「デスの語史について」(「國語と國文學」第百四十三號)は、これを研究する上に、參考すべ

き論文である。

九　比況の助動詞　比況の助動詞と云はれる「ごとし」は體言もしくは體言に準ずべき語と共に用ひられ、普通助詞「の」「が」等によつて接續し、一般の助動詞と云はれるものとは大いに性質を異にしてゐる。もと名詞の「ごと」から出たもので、助詞とともに用ひられることに於て、その體言的の性質を多分に維持してゐるが、その職能用言と同じく文の叙述を成す力を持ち、活用も「く・し・き」と云ふ形を具へてゐることに於て、形容詞に似てゐる品詞である。それ故に之を形式形容詞といふ名を以て呼んでゐる人もある。はじめは「ごと」といふ形だけで用ひられ、記紀の歌にも「ごとく」「ごとし」「ごとき」の如き形は一つも見えず、常に用言を修飾するものとしてこの形だけで用ひられてゐるが、次第に形容詞のやうな活用を發達させた後も、未然形のごときは奈良朝から平安朝にかけて用例を見出し得ない。恐らく用ひられなかつたものであらう。院政鎌倉時代に、次の如きものを見るのは珍しいものである。

傳說ガ如ニクハ生タリシ時佛法ヲ不信デ(今昔、九)

室町時代を過ぎると又次第に用ひられなくなり、見えるものは殆ど皆孤立した「ごとく」のみで、「ごとき」の如きは稀に用ひられただけである。これも助詞「に」もしくは指定の「な」等の助

を借りて、

小利根デ、コソラコトヲ云マワル如クナホドニ(蒙求抄五)
兒女ノ如クナトハ誰カ思ハウソ(山谷詩抄、九)
大道ハ白雲ノ如クナ物ゾ(三體絶句抄三)
昔ノ漢武ノ如クニ驕ヲ極テ(同一)

のごとく云ひ、「如き」は「の」の助を借りて、

談義ヲ能スル人ヲ評スルト云如キノコト(蒙求抄一)

のやうに云つてゐる。この助動詞は次第に衰へて、

此畫ニ對スレバ、サナガラ月明ニ三峽ノ中ニアリテ、聞ク猿ノヤウナソ(中華若木詩抄中)
小柴扉ノ邊ニ殘花ガアルガ、雨中ニ見レバ泣クヤウナゾ(同、中)
鷹ノヤウナ人ヂヤ(蒙求抄一)
我等ヲ草木ノ中デハ芝蘭玉樹ノヤウニナシタイソ(同、一)

の如く、「樣な」「樣に」といふ形のものに由つて代用されて行つた。「ごとき」「ごとく」が形容詞類似の活用を持ちながら、形容詞や形容詞類似の助動詞等とちがつて、イ音便・ウ音便を起してゐないのも、この形だけで孤立してしまひ、用法が局限された結果である。

十　**禁止の助動詞**　禁止の助動詞の「な」は、王朝時代に於ては、一般の動詞には終止形、良變動詞には連體形についたが、院政鎌倉時代以後、終止形が連體形に同化されてからは、すべての動詞に連體形に附くやうになり、今日も同樣である。「な―そ」はその間に一般の動詞の連用形、加變左變動詞だけは未然形をおく。「そ」は係の助詞「こそ」「ぞ」と同じもので、禁止の意味は「な」にある。初は

　はなはだも夜更けてな行き(萬一〇)

の如く、「そ」を伴はないものであつた。「そ」の濁音であらはれてゐるものがある。

　言痛けば小泊瀬山の石城にも率て籠りなむな戀ひぞ我妹(常陸風土記)

然るに、後に「そ」のみで禁止をあらはす形が出來て來た。平安朝にすでに、

　我兄子が振さけ見つゝ嘆くらむ清き月夜に雲たなびきそ(古今六帖)

のごときものがあるが、多くは院政鎌倉時代に見え、この時代の語法の特徴と見るべきものである。

　[illegible]はしおくれそ(大鏡)

　よべもようべもよがれしき。悔過に來たりとふ〳〵目にみせそ(梁塵秘抄)

さま〴〵に契りしらるゝ身のうきにいとゞつらさを結びかためそ（とりかへばや）

更にその御事、後めたくおぼしめしそ（同）

ちりぬとも外へはやりそ色々の木の葉めぐらす谷の辻風（夫木和歌抄）

牛の子にふまるな庭のかたつむり角あればとて身をばたのみそ（同）

肝をつぶし給ひそ（源平盛衰記、十九）

父ノ御故ニ命ヲ失ワム事歎カセ給ソト母上ヲナクサメ給ヘハ（平家延慶本）

室町時代にも、「な―そ」は行はれ、稀には「そ」のみの場合もある。

火筯ナアツカウソ、火アイマチスナ、小刀ナツカウソ、手キルナト云ヤウナ事ソ（桃源抄三）

皇后ナラデハ、ナ入ツソト云フ心ソ（蒙求抄五）

サノミ我ヲナ笑ヒソコト云ヒテ（古文眞寶抄）

サウナ云ソト云程ニ（三體詩抄四）

いとな泣いそ（天草本平家）

平家の方人をするとな思はせられそ（同）

「そ」のみを用ひたのは、

カマイテ人ニ見セソ、チト我トバカリ見フス（蒙求抄六）

の如きものである。

第九章　助　　詞

助詞をその職分から見ると、(一)文の成分の關係を規定するもの、(二)文全體の意味に關係するもの、の二大種類があることが分る。

　開けばけふから審査が始まるといふ

に於て、「ば」「から」「が」「と」は、皆文の成分の關係を規定するもので、之を除けば、文の論理的關係は分らなくなる。卽ち體言の格を示すものと用言の法を示すものである。思想上に於て、一の觀念が他の觀念と如何なる關係に在るかを示すものである。

　空には一片の雲だにもなし

の「は」「だに」「も」等は文の成分の存在に缺くべからざるものではない。文の意味を修飾するもので、之を除けば文の意味がかはるだけである。一を關係助詞と云ひ、他を修飾助詞と稱ける。是らのほかに感動助詞がある。「や」「よ」「かな」「かし」の如きものである。余は大きくこの三類を分けて、わが國語の助詞の發生沿革を述べて見よう。

一　**關係助詞**　これは體言の格を示すものと、用言の法を示すものである。「の」「が」は體言に附屬して他語への係屬を示す助詞であるが、古代語には體言相互の結合をなすものとして、このほかに「つ」「な」がある。共に古いもので、奈良朝時代に既に用法が限られて居り、なかには之に連ねられてゐる體言が一個の單語のやうな觀を呈してゐるものもある。

とつ國　家つ子　まなこ　たなごゝろ

「の」「が」は又主格について現れるが、古代語に於けるものは、主語に附く場合も、むしろ主語の述語への係屬を明瞭にするのみのもので、國語では、主格でも目的格でも何らの助詞を附けず、語序が之を示すだけであつた。それ故に、

うはなりが肴こはさば(記)

さゞなみの國つ御神のうら荒びて(萬一)

といふ「が」「の」は、「梅の花」「梅が香」が體言の係屬を示す如く、用言への係屬を示すだけである。然し「の」「が」の間には、自ら差別が出來た。近い例が、「この人」「その人」「かの人」の如き用法を見ても、「こ」「そ」「か」と「人」とが單に結合されてゐるだけであるが、「が」は「わが國」「汝が名」「誰が袖」などの如く、多く人を現す體言につき、やゝ所有格に近い意味を發

達させた。後世にいたる程この差別は深化して、平家物語では二個の體言を結びつけてゐる場合、第一の者が物の名であることは唯一個の例があるばかりであると、山田孝雄氏の「平家物語につきての研究」に示されてゐる。この關係は「正宗の刀」と「正宗が刀」の二つを比較して見ればよい。この結果「の」に由つて連絡される二つの體言は後のものが主となり、「が」によつて連結されるものは前のものが主になる。これが「が」が後に主格を示す助詞として發達して行つた所以で、「が」の場合はその標出されることが重く、自然「が」が「の」を凌いで、多く主格をあらはすものとして用ひられることになつたものであらう。中世以後「の」が多く係屬を示し、「が」が多く主格をあらはすものとなつた。

院政鎌倉時代に口頭語の上で、主語に「が」をつける習慣を生じ、記載語に及んで來た。

このさかひがゆゝしき大事にて侍る(定家卿消息)

愚息の小童が書きて候ふ(古今著聞集)

公行が詠まぬよしを申すなり(同)

然し始はかゝる語法は雅馴なものとは認められず、主語を示すに至つた新らしい用法を忌む保守的の感情は、體言への係屬をあらはす用法をも合せて、「が」の附く形一切を擯斥し去らうと

したのも面白い。顯昭の古今集注卷四に、

ハギガハナハ萩ノ花也、ノトイフ言葉ヲカトヨメルコトアリ、ムメノエヲムメガエトヨメリ、ムメノカヲムメガカトヨメリ、カリノネヲカリガネトヨミ、アシノチルヲアシガチルトヨミ云々　キヨミガセキヲモウルハシウイハバ、キヨミノセキトコソイフベケレ、コレラ大旨ハケタムコトバナリ、シヅガナドハサグルコトバトオボエタリ、オホヤケヲキミガヨトヨムコトハナメシトイフベケレド、ウヤマフコトバニヨミナラハシタリ

と云つてゐる。又宇治拾遺物語に、ある女房が爲家の侍佐多に「われが身は竹の林にあらねども、さたが衣をぬぎかくるかな」とよみにかいたのに、さたのしとこそいふべきに、かけまくも畏き守殿だに、まだこそこゝらの年月ごろまだしか召さね、などわ女がさたがといふべきことか」と罵つた話がある。

室町時代以後は「が」が主格、「の」が體言への係屬に用ひられる習慣が漸く確定した。

されぱこそ鶉が此所に一つ這うたぞ（室町時代小唄集）

鳩どもが群り居る處に、鷹が來て摑み殺さうといふ風情ぢやに由て（天草伊曾保）

異國にさるためしがある（天草平家）

「を」・「に」・「へ」・「から」は古今を通じて大體同樣で、「を」は感動助詞であつたものが、次第

に論理的關係を示す役目をもつとあるやうになつたもの。「へ」は邊といふ名詞から出たもの。

「と」は「それ」「されば」などの指示の意味のある「そ」「さ」と語根を同じくするもので（s—tの變化）、「とかく」「とまれかくまれ」「とある家」などの「と」とも關係があり、名稱・狀態・目標等を示す語に添へて「それ」と指示する爲に用ひるのが本義、引用の語句に「云々と云つた」と云ふのは、上の句をさして「さう云つた」と云ふこと。副詞を作る「さら／＼と」「ほんのりと」の「と」も擬聲語を承けて「そのやうに」といふ意味で、漢語の鏗然、莞爾などの然・爾と同じわけである。それ故に同じ趣の語句を並べる時、その下に附くとは、いづれもその上の語句を「それ」と指すのであるから、指示されるものに附屬して、一つづゝ添うたものである。

夏と秋と行きかふ空の通路は（古今）

然るに物を列擧する場合、「筆と紙と墨」などいふやうになつたのは、「と」が接續の意味にかはり、最後の「と」を省くに至つたからで、江戸時代から今日に至つて通例のこととなつた。「から」は記紀等に見える「かれ」とも通じて、本來・理由などの意味を持つ名詞から來たものである。

「より」は「から」と共に、動作の基點を示すことに於いて、相通じて用ひられたが、今は「から」の方を多く用ひるやうになつた。「より」には、中古以前は或地點に於ける動作の進行を示す用

法があつた。

いにしへに戀ふる鳥かもゆづるはのみ井の上より鳴渡りゆく(萬、二)

小墾田の坂田の橋の崩れなば、桁より行かむな戀ひそ吾妹(同、一一)

あたりよりだにな歩きそ(竹取)

彌生のつごもり方山を越えけるに、山川より花の流れけるをよめる(古今)

みなそこの月の上よりこぐ舟のさをにさはるは桂なるべし(土佐)

この門のまへよりしも渡るものか(蜻蛉)

垣の外より大路に笛ふきて吹く人あり(同)

前よりゆく水を初瀬川といふなりけり(源氏玉かつら)

「より」の古形に「よ」「ゆ」「ゆり」がある。奈良朝以前に用ひたものである。註二 吉澤義則氏は同時代の文獻からその統計を取り、(一)「ゆ」「よ」は歌以外には用ひられず、(二)「より」の形が最も多く用ひられてゐる。(三)「ゆり」がもつとも少いといふ事實から、「ゆ」「よ」は「ゆり」「より」の略體で、語彙の豐富ならんことを要する韻文にのみ用ひられたもの、「ゆり」は衰滅に近づき、わづかに餘喘を保てるもの、「より」は當時全盛をきはめ、今日まで殘ることを豫言してゐると論ぜられた。

「ば」「と」「とも」「ど」「ども」は用言の法を示すものである。「ば」は順說條件を示し、「と」「とも」、「ど」「ども」は逆說條件を示す助詞。「と」「とも」は動詞の終止形、もしくは形容詞の未然形につき（助動詞は之に準ず。形容詞に似たるものには未然形、その他は終止形）、また成立たない條件を假定するに用ひ、「ど」「ども」は動詞・形容詞、もしくは助動詞の已然形について、成立した條件をあらはすに使つた。

「とも」「ども」のかはりに、「も」といふ形を用ふることが鎌倉時代にあらはれ、室町時代以後多くなつた。

人はいみじくたけくも、力及ばぬことなり（愚管抄）

同じ御子豫王をこそ立てられしも、また捨て丶自ら位に卽き給ふ（神皇正統記）

室町時代に入りては、又「ても」といふ形が出來た。

啼クトモ更ニ歸リ得ルコトナケレバ啼テモ無用處也（中華若木詩抄上）

「が」「に」「を」は接續を意味し、また反對の結果を作ふ條件を示すものに發達してゐるが、「を」は萬葉集にも見えるが、「に」は平安朝にはじまり、「が」は鎌倉時代に生じた。そのうち「を」は鎌倉時代より無くなり、「に」は江戶時代より「のに」となり、「が」は今日まで用ひられて

る。いづれも格を示すものから轉じたもので、たとへば「月に叢雲」といへば、「月あるに叢雲あり」といふことが出てくる。それ故に、

> いつしかと心もとながらせ給ひて、いそぎ參らせて御覽ずるに、めづらかなる兒の御かたちなり（源氏桐壺）

などは、全く接續を示すのみである。しかし一般に兩命題が並ぶ時は、對照の意味を伴ふから逆說的の意味はおのづから出てくる。

> 風のおと蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるるに、弘徽殿には久しう上の御局にも參り給はず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊をぞし給ふなる（源氏桐壺）

の如きは、逆說的の意味は、前後の文意から來るものであるが、

> 朝夕の言ぐさには、翼をならべ、枝をかはさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ盡きせずうらめしき（源氏桐壺）

の如きものになると、明かに逆說的の意味を表すものとして發達して來たことが分る。いづれも連體形を受けてゐることは、もとの格助詞の性質を傳へてゐるものである。江戶時代も後になつて出來た「のに」になると、全く逆說的の意味を明かにあらはす助詞で、

> 夜なべに縫いでおけばさば〳〵布子も着られますのに（浮世風呂）

中を見てゐたつて始らねへ事だのに。(花暦八笑人)

「が」もともとは體言の格を示す助詞から轉じたもので、

いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり(源氏桐壺)

の如きものを、法を示す助詞と解するならば、無論誤であるが、

いたうそびやぎたまへりしが、少しなりあふ程になり給ひにけり(源氏松風)

の如きものを見れば、法を示す助詞への轉義の經過は想像される。はじめは單に二つの命題を並べるものに過ぎないが、近代語になると、多く前後背反の意味を以てあらはれてくる。

賴盛暫く支へたれども門より外に追ひ出さる(平治)

「を」も同樣に、本義は單に接續である。

くはしく御有樣も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべし(源氏桐壺)

しかるに第二次的に逆說的の用法を生じ、近代語では「ものを」の形に於てはつきり現れてゐる。

さうでなくば、その買物いたし方がござるものを、さて／＼困つたものだ(膝栗毛)

二　修飾助詞　修飾助詞の「は」は、事物を取出して之を標示し、「も」は物を標示して他のもの

に同列におく意味、古今を通じて殆ど變らない。

「だに」「すら」「さへ」は相通ずるところある助詞。「すら」はもつとも古いもので、一端を擧げて他端を推せしめる意味を表す。平安朝時代には既に衰滅に近づいて、「だに」が之にかはることが多く、

そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに容易く見まじきものを(竹取)

赫映姫、光やあると見るに螢ばかりの光だになし(同)

はかなき事だにかくこそ侍れ(源氏帚木)

の如く用ひてゐる。「すら」は平安朝には殆ど歌にばかり見えて用例も少いのは、一般に用ひられなくなつた證據である。院政鎌倉時代には「こそら」といふ形にかはつた。

兼テ仰セ有ラムニテソラ躬恒貫之ガ讀タラム様ニハ何デカ有ラム(今昔廿四)

只有ツルソラ打憑テ遙ニ來タル夫ハ去テ(同、廿四)

畜生ソラ哀レニ爲ル人ニハ尾不レ振ス様ヤハ候フ(同、廿六)

只ニ候ツル時ソラ御顧ノ厚ク候ヘハ(同、廿六)

然レハ蜂ソラ物ノ恩ハ知ケリ(同、廿九)

恒河沙ソラナヲハカリナシ(法華百坐)

又心ナキ野邊ノ雉ソラ子ヲ思故ニ野火ノ爲ニ身ヲホロボストカヤ(平家延慶本)

「すらに」といふ形は山田孝雄氏の統計によるに、延慶本平家に唯二つの例があるばかりで、口頭語では恐らく當時みな「そら」と云つたものだらう。しかも「そら」も用法が局限し、主格に附屬するものばかりであることは、後に亡びる前兆を示してゐるものであらう。傳康頼自筆寶物集には、「すらに」はなく、「そら」のみ四個、内一個は主格につくものではない。室町時代にもなほ用ひられた。

トテモ殺サハ世子ノ傅テアツタカ、無ㇾ罪殺サル、ヲソラ不知テ居タソ(史記抄三)

「だに」は本來

家の人ども物をだに言はむとて(竹取)
一文字をだに知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ(土佐)
それを見てだに歸りなむ(竹取)
こゝにも心にもあらでかくまかるに昇らむをだに見送りたまへ(同)
命だに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし(古今)

の如く、最小限を示す助詞である。この用法は室町時代にも、

我ハ昭陽宮へ近キダニ、エセヌホドニゾ(三體詩法二)

功成テタニアラバ、五湖へ向テ隠居セサルゾ(錦繡段抄五)

向ハ何トケガレトマヽヨ、我ダニ道ヲ守ラハト云ハヨイゾ(蒙求抄五)

張つてだにござるならば、よこしませうが(狂言ひめ糊)

などあつて、引續きなほ生きてはゐるが、又これを「さへ」で代用してゐることと今日の用法の如きものが多くなつた。「だに」は「すら」に比べれば、生命が長かつたけれど、その後間もなく用ひられなくなつた。「だに」は「すら」を兼ねて意義の擴張を行ふと共に、「だに」に「も」が附いて約つた「だも」を生じた。

夢にだもあふと見ることそうれしけれ、殘りのたのみ少なけれども(和泉式部集)

これは室町時代にも次の如く見える。

周公ヲ夢ニダモ見ザルトアルホド(蒙求抄五)

名ヲ求ムルダモ、生死ヲ忘ルヽゾ(莊子抄二)

「さへ」は一の物事の上に更に他の物事を添へる意味を持つてゐるもので、この用法は、

世になく淸らなる男御子さへ生れ給ひぬ(源氏桐壺)

いとあはれにかなしく心ふかきことかなと涙をさへおとし侍りし(同宿木)

などに見るやうに、古今に通じてゐるが、室町時代には「すら」や「だに」の用法を代つてするや

うになつた。

花盛ナルトキサヘ見ル人モナクシテサビシキニ（中華若木下）

彼の鶏さへないならばこれこそ拂曉には起されまじいものと思うて（天草本伊曾保）

「ぞ」は語源から云へば、指示の意味があつて、代名詞の「そ」「それ」等と語根を同じうするものである。それと強く指し示す働をもつてゐて、紀記の時代には「そ」とも云つた。古事記も日本書紀も、「こそ」「ぞ」相半ばしてゐる。「ぞ」は平安朝以後は、「誰ぞ」「なんぞ」などの形に名殘をとゞめた。

「ぞ」がある時は、文の結びは連體形とすることが、奈良朝から平安朝までの一般の慣習であつたが、院政鎌倉時代以後、終止形連體形が同形となつた結果、次第にこの係結の呼應の失はれた事は前に述べたが、室町時代の抄物に、

今度七國ノ亂イカヾアルベシ（中華若木抄上）

イカホド面白カルベシ（錦繡段鈔四）

サレハコソ梅花樹下ニハ有レ墓ランナリ（同五）

サココソ面白クヲモハレントゾ（三體家詩三ノ三）

など記してゐるのは、全般に係結の意識が衰へてゐたことを示してゐるものと云つてよい。後には、

破レダソ程ニ(錦繡段抄一二)

ともかくもなつたぞならば(天草本平家)

何事をかきゝわきまへられうぞなれども(同)

の如く、單に意味をつよめる用を成すものになつた。

「なむ」「なも」は「ぞ」に似てやゝ婉曲な指示の助詞。散文に多く、歌につかふことは稀である。「なも」が古く、奈良朝時代に榮えたもので、平安朝初期に「なむ」となつた。これが係となる時は、文の結びを連體形をもつてすることは、「ぞ」と同じである。鎌倉時代には衰へて、近代語には使はれなくなつた。

何はなも戀ひずありとはあらねども、うたて此の頃戀のしげきに(萬一二)

袂よりはなれて玉をつゝまめや是なむそれとうつせ見むかし(古今)

つれ〴〵になにか涙のたえざらむ人なむわれを思ふともなく(古今六帖)

などは、「なも」「なむ」を歌に用ひた例であるが、すべて結を轉じたものか、省略のある用法

で、連體形で結んだものは一つもない。

「こそ」は「ぞ」よりも一層強く物を指示する助詞で、「こ」も「そ」も語源は指示語。「それ」「これ」と同じ語源から來てゐる。多くの部類の中から、そのもの一つを拔き出して區別する意味を持つてゐる。「こそ」の係を已然形で結ぶ習慣は、他の係結に比べて最も後まで殘り、室町時代にも大體は守られてゐるが亂れてゐるものも少くない。動詞形容詞の例はそれぞれその條に擧げたから、こゝにはその他の品詞の現れてゐる例をあげて見る。

カヤウニシテコソ天下ハ治タレ(史記抄四)

詮ずる所は便宜に窺うでこそあらうずれ(天草本平家)

の如きは守られてゐるもの、又、

アノ下ニコソ吾親ハ居ルラント(中華若木中)

折節ハタヲコソヲラレツラウ、ハラリトキツタゾ(蒙求抄四)

竹雲ノ木ハ無點ナホドニ、ゴテコソ候ラウゾ(同四)

の如きは失はれてゐる者だが、かゝる已然形を失つてゐる者の上から、一般に「こそ」の係結も亡びて行つたのだらう。「らむ」との呼應に於て、「こそ」の結の無くなつて居ることが目につく

が、その起源は古いらしい。

　薬草ニコツハ候ラム（法華百坐）

これは院政時代の例である。

鎌倉時代から室町時代にかけて、「こさんなれ」「ござんなれ」といふ特殊の連語がある。「こさんなれ」は「こそあるなれ」、「ござんなれ」は「にこそあるなれ」の約つたものである。「ござんめれ」といふ同趣の連語もある。

　さては一家郎等ござんなれ（保元）

　敵の悪源太にては非ずして、よき身方ござんなれ（同）

　サテハ惜ムゴザンナレ（平家四）

は、「ござんなれ」。又

　見ルベキ程ノ事ハ見ツ今ハカウコサンナレトテ被立タリケルニ（延慶本平家）

　世の中は今はかうこさんなれ（平治一）

は、「こさんなれ」。これを一個の感動詞と見ることの誤を説かれた松尾捨次郎氏の説（註二）は動かないところである。又

　内カラノ御使ニハアラジ、平家ノ知リテ人遣ハシタルゴザンナレ（延慶本平家）

胡氏ハ孝文莊襄ノチヤツ〳〵ト死ナレタハ、呂不韋カ我子ヲ蚤ク立ントテ、弑シタコサンメレト云タソ（史記抄四）

其味ノニヤウタハ、アハレシタイゴサンメレ（山谷詩抄、十一）

アワ京人ゴザンメレト（三體詩法抄四）

は、「ごさんめれ」の例である。

「し」は「ぞ」「そ」と語源を同じくして、やはりそれと指示する意味の助詞であつたが、既に中古時代から「ぞ」や「こそ」と違つて用法が局限せられてゐる。當時衰滅に近づいてゐたものらしく、王朝時代に出來た係結の約束も、この上には發達しなかつた。

はたゝぎも此しよろし（記）

わぎも子がおもへりしくし面影に見ゆ（萬葉四）

酔泣するしまさりたるらし（同三）

の如き奈良朝時代の用法を見れば、古くは「ぞ」と同じに用ひられてゐたことを察することができる。平安朝時代には條件の假定もしくは確定の條件に用ひられて、

名にしおはゞいざ言問はむ（伊勢）

もみぢばのいろをしそへてながるればあさくも見えず山川の水（拾遺）

うとき人にしあらされば家とうじに盃さゝせて女のさうぞくかづく(伊勢)

の如き場合のほかは、「しぞ」「しも」「しか」「しこそ」などと他の助詞と結合して、

　はる〳〵きぬる旅をしぞおもふ(古今)

　あまた見しとよの御禊のもろ人の君しも物を思はするかな(拾遺)

　新しき年のはじめにかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ(古今)

　たれしかもとめて折りつる春霞立ちかくすらむ山のさくらを(古今)

　けふよりは今こん年のきのふをぞいつしかとのみ待ちわたるべき(古今)

などと用ひ、いよ〳〵用法は局限して、遂に「折しも」「必ずしも」「いつしか」等、一定の熟語の上にのみ残つて行つた。院政鎌倉時代以後榮えた「ばし」も、この「し」の他の助詞と結合したもので、その源は平安朝に在る。

　心も知らぬ人を宿したてまつりてかまばしも引きぬかれなば、いかにすべきぞと思ひてえ寝でまはりありくぞかし(更級)

「ばし」は「をばしも」が省かれたもので、初めは目的格にのみ用ひたものだが、後には必ずしもそれに限らない。

　むくろに手ばし負ひたりけるかと問ふに(古今著聞集)

人ニ頭バ○シ○切ラレウトテ不覺ノ人哉(平家延慶本)

など目的格であるが、

能々宮仕奉レ、相構テ御心ニバ○シ○違ナ、ド(平家)

知らざる者の馴々しく斯樣に申すとば○し○思ひ給ふな(曾我)

晉ノ嵆康劉伶ト杜ヲ一樣ニバ○シ○ミルナ(錦繡段抄三)

我ハ李廣ガ孫デソウナンド、ハ○シ○云ナ(同三)

心タテハ○シ○、一ツアルカ、用レ心ト、シヤケヲ用タカ、面白カゾ(莊子抄二)

金牛ノ振舞ハ顚狂テハ○シ○アランカ又提唱建立テハ○シ○アランカト也(碧巖抄八)

など、その他の場合にもついて、之をつよめる役目をしてゐるのである。然し室町時代の「ばし」は大體疑問か禁止にのみ用ひ對話に限られてゐる。江戸時代にも、

少將の子とある證據ば○し○あるか(傾城隅田川)

必ず人ば○し○恨むるな(松風村雨束帶鑑)

必ず疑ふてば○し○下さるなや(三十石艠始)

など、同じ用法に於て用ひられてゐるが、次第にすたれて、今日は佐賀方言・鹿兒島方言などに、わづかに疑問の場合に殘つてゐるばかりである。

「や」「か」は奈良朝時代より平安朝時代に通じて、文の中間と終止とに用ひられ、中間に在る場合には之を用言助動詞の連體形にて結び、終にある場合には「や」は終止、「か」は連體形を受ける習慣であつた。又上に疑問の語のある時には、「か」を用ひ、「や」を用ひないと云ふことも堅く守られた。しかるに鎌倉中期以後には、

わづかにまみゆる心地するを、あけにけるやと思ひて(調度歌合)

寂光院の北坊にて見侍る、みさせ給ひしや、いまたし(頓阿高野日記)

佛果の障は、內位の智を以て斷するやとゝふ(藤原基綱くらかさねの記)

など、「や」も連體形を受けるやうになり、又疑問の詞の下にも用ひるやうになつた。

姫君も何事にやと思ひ給へり(住吉物語)

此上可レ爲何樣哉由(東鑑三)

人雖モアリ災モヤタラン時、神佛コウラムル事アルベカラズ、イカナル方便ニヤアラン(沙石集元和活字)

コハ如何ニシテカヽル佛ニ有ルヤト思廻ラスル程ニ(沙石集大文本慶長本)

「や」は鎌倉時代を以て終を告げ、唯「やら」の形にのみ殘り、「か」は文の終止にばかり用ひられて今日に至つてゐる。

「やら」は「にやあらん」から來たもので、院政鎌倉時代に「やらん」となつてゐるが、

女ニハイカニスルコトヤランド心モエレド（今昔二九）

今度ハ如何候ツルヤラン（平家、四）

コハ夢ヤラントゾ、被レ驚ケル（同、五）

其氣ニテヤラン、是ハイタチニヲヅル（吾妻鏡）

佛性すなはち如來なりとおほせられて候やらん（親鸞末燈抄）

又「やらう」となり、

多イヤラウ、少イヤラウ、凡七日八日間ハハタト續イテ（平家、五）

これが又「やらい」となり、室町時代には、「やらう」と相通じて用ひてゐる。

眉吾モ連叔モナンタル者ヤラい（莊子抄、一）

尉ハウツノ言ヤラウ、イノ音ヤラウシラヌソ（蒙求抄、二）

龍ノ去ツタト云フハ、何ノ書ニアルヤラウ知ラヌテ候ゾ（同五）

單に疑問の「か」と同じ意味にも使つた。

トコヤラフデ、トロ〱ト震フタル雷ソ（碧巖抄五）

また、「やらん」と「やらう」、「やらう」と「やらい」とを並べても用ひてゐる。

煙雨ノ中トハ、春カスミノ煙ヤラン、雨ヤラウノ如クナルヲ云ソ（三體詩法、一）

ナニサマ節去ヲ知ルヤラフ不知ヤライツレニ折残ス枝カハヤウハル也(湯山千句)

これが單に並列をあらはすものとして今日に至つてゐる。室町時代の例

紅ナ物ハ桃ヤラ杏ヤラ白ハ梨ヤラ李ヤラフ烟雨中看紅白(湯山千句)

三　**感動助詞**　感動助詞は今日に比べて、古代語に豐富に使はれてゐることが、われ／＼の注意を惹く。今日は命令形につく「ろ」「よ」「い」感動をあらはす「よ」「な」「ね」「は」「ぞ」「ぜ」等があるのみである。

奈良朝の文獻に見えるものは、「や」「よ」「を」「な」「ね」「に」「ゑ」「が」「ろ」「ら」「か」「は」などである。

「や」は呼格について、「八千矛の神の命や」などと云ふ。これは今日にも殘つてゐる。「石見のや高角山の」の如きものは、單なる感動である。疑問の「や」はこれから出た。「よ」は今日も廣くつかふが、奈良朝に於ては多く「も」と連結してゐる。「もがもよ」といふやうな連結もある。

吾はもよ(記)　籠もよみこもち(萬一)　水にもがもよ(萬一四)

「よ」は感動の場合は、「や」と同樣であるが、「よ」は命令形を助ける助詞として發達したことが特徴である。命令形と離るべからざる感を與へてゐる。しかし、既に述べたやうに本來は命

令と「よ」とは關係がなかつた。四段活用には「よ」を附けず、その他には「よ」を附けると云ふのは中古以後馴致した一種の習慣に過ぎない。加變の如きは「よ」を附けない方が本體である。之に反して四段でも「よ」を附けることがある。四段につく「よ」は感動助詞で、その他につくのは活用形のうちであると云ふのは、勿論誤である。上二・上一が早くから殆ど凡て「よ」を附けるやうになつたのは、これらの活用は未然・連用・命令の三つまで同形であるからであらう。

「を」はもつとも古い感動助詞である。

かゝなべて夜には九夜日には十日を(記)

八重垣つくるその八重垣を(同)

などその例である。「春を淺み」「風をいたみ」などの「を」もその一種である。目的格につく「を」はこの感動助詞から出たものである。

「な」は文の完結したものにつく時、單なる感動をあらはすが、動詞の未然形につく時、願望の意味を生じてゐる。

「ね」は「な」と通ずるものである。「に」は、その變化であらう。

吾に匂はに妹に示さね(萬九)

住吉の出見の濱の柴な刈りそね(萬七)

「なむ」も同じ性質のものである。その古い形に「なも」がある。「な」と同じく動詞の未然形につく。

ほとゝぎすなほも鳴かなむ(萬二〇)

山の端逃げて入れずもあらなむ(古今)

「なむ」が他の動作に對する願望をあらはすのに對して、自己の動作に關する願望をあらはす助詞が、「ばや」であるが、これは平安朝に出來たものである。その例、

なほ人づてならで聞え知らせばや(源氏、若紫)

室町時代に、次の如く否定にかはると共に、亡びた。

報レ本アラハヤソ(桃源抄一)

家ニ錢モアラハ、買テノマンズルコトナレドモ、ソレモアラバヤ、(中華若木、中)

我ハ文ヲ、コトツカツテ、屆ル者デモ、アラバヤト云(蒙求抄一〇)

「ゑ」は多く形容詞の終止形につき、「やし」と連結して、

よしゑやし浦はなくとも(萬二)

となることがある。

「が」は願望をあらはし、「もが」「もがも」と云ふ連結をなした。

今も見てしが妹が姿を(萬八)

なでしこのその花にもが(同三)

常にもがもな常少女にて(同一)

平安朝以後には、「がな」と云ふ連結が出來て、

知りたる人もがな(枕)

これは室町時代にもなほ

湊の川の鹽が引けがな(閑吟集)

などその例があるが、既にこの時代に語性を變じて修飾助詞として表れてゐる。

猶よからん敵がな組んで今一人首とらんと思ひて(源平盛衰記)

なにがな進上したいと思へ共(昨日はけふの物語)

ナニヲカナマイラセウトスレトモ、何モナイホトニ(桃源抄二)

「ろ」は奈良朝時代、上國の言語では、「大君ろかも」「ともしきろかも」等、單純な感動にのみ用ひるが、東歌には

あどせろとかもあやにかなしき(萬一四)

白雲の絶えにし妹をあぜせろと心に乗りてこゝばかなしけ(萬一四)

とあつて、關東方言に於ける命令形附屬の「ろ」の起源を示してゐる。

「ら」は、

兒をら妻をらおきて(萬二〇)
麻苧らを桶にふさゝに績まずとも(同)

などあるが、これが後の複數の接尾語の起源をなしてゐるであらう。

「は」「も」は一方に修飾助詞の起源を成し、感動助詞としては、「はや」「はも」「もぞ」「もが」などの連結としても現れてゐる。

「か」はしば／＼「かも」「かな」と連結し、「かも」は奈良朝時代に榮えたが、平安朝時代に「かな」を生ずると共に衰へ、古今集以後の勅撰集には跡を絶つた。藤原公任は、

かも、らしなどのふるきことばなどはつねに讀まじ(新撰髓腦)

と云つてゐる。殊更に用ひたものは、古歌の模倣である。このほかに、奈良朝には「よし」「やし」の如きものもある。

平安朝に於て、「ゑ」「に」「ね」「ろ」「ら」「よし」「やし」等皆亡び、「が」は「もが」「もがな」

など云ふ連結をなし、「か」から「かな」が出來、又新しく生じたものに「ばや」の外に「かし」がある。「かな」「かし」は室町時代尚用ひられたが、その後は亡びた。

吾を助けられいかし(天草伊曾保)

一曲きかせられいかし(同)

憎い奴が根性骨かな、さては爲うことがあるぞ(同)

近代語では、係の助詞の變化した「ぞ」が出來、それが變化して「ぜ」と云ふこともある。「よ」からは「い」ができ、「な」からは、「なう」「のう」「の」「ねえ」「ね」が出來た。「な」「よ」「や」「ろ」は古代語から引ついでゐる。「は」も同じ性質のものだが、「わ」とかく習慣となり、それから出來たものに「わい」がある。

註

(一) 吉澤義則氏、國語國文の研究。

(二) 松尾捨次郎氏、國文法論纂。

(三) 現行普通文法改定案調査報告。

第十章　文

文とは統覺によつて統一された意識內容の表出であるが、文法上、文として取扱はれるものは、具體的の言語に於けるものよりも、範圍に於て狹い。實際生活に於ては、「泥棒」と叫んでも、はつきり何を意味するか分るし、食卓上の食鹽を取つて貰ふとき、「それを」と云つても表出の目的を達し、「ひとりで入らつしやいましたか」と云ふ問に對して、「父と一緒に」と云ふだけの答も、普通に經驗するところである。これが具體的の言語の場合に表出の目的を達してゐるのは、實際の環境が之を助け、又言語以外の表出運動、たとへば目の運動、話手の顏の表情等が意志表示を補ふからである。文法上の文は、觀念的に考へられた場合の文で、從つて具體的の言語に於ては、立派に文の役目を果してゐるものも、文として取扱はれないことが多い。さきの「泥棒」「それを」「父と一緒に」と云ふやうな表出は、一旦その環境や、言語を助ける他の表出運動と切離して、觀念的に考へられた場合には、文としての價値を失ひ、單に文の一斷片となつてしまふ。

文法上の文は、談話の連續の上に、一個の單位として、完結してゐなければならぬ。文は內面的には、意識內容の統一であり、外形的には何らか形式上の段落を有してゐる。「花が咲いた」のやうに、談話に述語の終止形が現れるとき、一個の文として取扱はれるのは、一個の統覺的聯合の言語的表出として、音聲の一團が常に經驗され、之が繰返されることにより、つひに之を以て談話に一段落を感じ、談話の一單位といふ觀念を生ずるやうになつたからである。勿論「咲いた」といふのが、「咲いた時」と云ふやうな連結を取つて現れることはあるが、かゝる時は、具體的の言語としても、一個の統覺的聯合の表出として、それを以て完結したものと經驗することは、普通ではないからである。用言、活用連語等が終止形を取る時は、それ故に談話の一單位として感ずる。これが文法上の文である。吾人の言語を文字に記すときは、一切の環境、他の表出運動から切離されてしまふが、觀念的に一段落となつた文は、常に一個のまとまつた單位と云ふ意識を作り上げてゐる。これは命令文の場合の「行け」と云ふ如き時も同樣である。これはこの種の文の性質上、命令形があらはれ、それだけで實際の談話の際に、一個の段落を附し、まとまつた者として聞いたからである。之に反して、「花が」と云ふのは、特定の場合には、まとまつた談話の單位として聞いたこともあるが、「花が咲いた」と云ふ場合も聞くし

文その方がむしろ「花が」と云ふよりも多く經驗してゐるから、具體的の談話から切離した場合には、完結した談話の單位としての意識は件はないのである。それ故に觀念上に於ては、かゝるものは一個の獨立の文と感じないし、之を文字にあらはしては、單獨の場合は、一個の文とはしないのである。かくの如くして、文法上では、「花が」とか「父と一緒に」と云ふやうなものは、文の斷片であり、「今日は休み」と云ふやうなのは、文の省略されたものである。省略されたものは、現されてゐるだけの言語によつて文の内容が認められるものである。

すべて言語にあらはれるものと、現れずして推知されるものとは別である。文は言語の形式である。文を論ずるには、たゞそれの言語としての性質を以てしなければならぬ。言語としての文は、音聲にあらはれたもの に就いて云はれる。推察によりて附加されたり、論理的にあとから解釋されたものによつて定めることは出來ない。

かう見て來ると、國語の文と云へば、常に用言もしくは活用連語の終止形(命令文の場合は命令形、要するに文の完結形式)が述語となり、述語たる用言のあらはす屬性の主體、もしくは客體を現す主語・客語、若しくは修飾語がその上に位してゐるわけである。この法則は、古今を貫いてかはらない。

然るに之に對して、「まあ、きれいな花」と云ふやうな述語のない文がある。文は主觀的特徴によつて、云ひ換へれば、感情的要素の加はることによつて、種々の形を呈し、感情的要素の大小は、その形の特徴を決定してゐる。客觀的に文が持つてゐる表象から見るならば、意識の統覺的統一たることに於ては、すべて一であるが、それは統覺的聯合のまゝで現されずして隨意的の再表出の形を取つてゐるものである。反射的の叫びごゑは言語ではない。音聲を象徴として、感情欲求警告等の意味を隨意的に表出した時、はじめて文となる。これは感嘆文と云つてよい。

又古代語に於て、從つて口語でも記載語に於ては、

うつくしき月よ

あはれの事や（源氏帚木）

の如き形がある。口頭語の場合のやうに、感動詞は附かないでも、「よ」「や」「かな」などの感動助詞は、よくこの種の感情をあらはす文を作る目的を達してゐる。

「まあ、ひどい雨だ」「おや、眞くらだ」と云ふやうな文、又實際の談話では、一種の音調をつけることによつて、感動詞をつけないでも、一種の感情をあらはすことが出來るが、形は平叙

文と少しも違はないから、今述べた感嘆文と一緒にすることは出來ない。平叙文が感嘆文の代用をしてゐるだけで、代用はどこまでも代用である。われ／＼の感情を表すにも、次第にかくの如く平叙文の形を取るやうになつたが、「まあ、ひどい雨」「おや、眞くら」と云ふやうな何ら述語を持つてゐないものゝ方が、感情を含むことは大きく、一層原始的な文である。往々にしてかういふ文を解釋するにも、論理と文法とが混同され、それに何らか述語の形を考へる傾があるが、これを省略と見て、述語を考へることは、この種の文に内在する感情を減却せしむることは勿論、事實に於て、「まあ、ひどい雨」と云ふとき、「降つてゐる」と云ふ動詞、「きれいな花」と云ふ時、「咲いてゐる」と云ふ動詞は、少しも念頭にはなく、聞く人の頭にも、この體言の形そのまゝで、その語られる意味が完全なものとして現れ、思想に於ても、發表に於ても、何ら省かれたもの、不完全なものとして感ぜられることはない。感嘆文は、多くの國語に於て、體言的性質を持つた文としてあらはれ、すべての點に於て、原始的な文の形式を示してゐる。特に律語に於ては、平叙文の形であらはし得るものも、好んでこの感嘆文の形を取る。わが國語に於ても、感嘆文は、古代に於て豐富で、長く和歌俳句には定形となつてゐる。

人ごとに折りかざしつゝ遊べどもいやめづらしき梅の花かも(萬五)

露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫のこゑかな(源氏横笛)

小笹ふくしづのまろやのかりの戸を明方になく時鳥かな(新古今)

むすぶよりはや歯にひゞく清水かな(芭蕉)

次の如きものもある。

ぬばたまの夜霧の立ちておほゝしく照れる月夜の見ればかなしさ(萬六)

秋はぎをしがらみふせて鳴く鹿のめには見えずて聲のさやけさ(古今)

つゝじ咲いて石うつしたる嬉しさよ(蕪村)

これらは散文にもある。

いとむねいたきわざかな(蜻蛉)

春宮にも久しうまゐらぬおぼつかなさ(源氏葵)

律語では、又次の如き形がある。

やすみしゝわが大君の遊ばしし、猪の病猪のうたき畏みわが逃げのぼりし荒丘の榛の木の枝(記)

神無月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神無備の森(古今)

梅の花あかぬ色香も昔にておなじ形見の春の夜の月(新古今)

これは具體的の談話に於て、「ひどい雨」「きれいな月」と云ふやうな何かの感動をあらはす品詞

がなくても、音調によつて感動をあらはすのと同じ性質のものである。かの歌に見る文は、これが一種の形式として固定したものに外ならぬ。

吾々の口頭語に於ける文の形式は、比較的簡單である。われ／＼の言語が、日常の實用にばかり生きてゐたならば、文の形式も憐むべき貧弱なものに終始したらう。言語が音調の藝術、すなはち音樂と結びつくことに由つて、文の形式は豐富になつた。言語は表象や概念を表出するのみならず、それと結びつく感情の表出である。記憶に殘つてゐる過去の表象を呼起しこれを結合して、われ／＼の心の前に幻想の世界を展開するのが藝術である。之がためには、表象は明瞭に、感情は強烈でなければならぬ。これは低級な日常語のよくする所でない。こゝに感情の直接の表現たる音調の藝術の助を借らなければならなかつた。

然し乍ら、感情と表象とは常に同等でないとともに、この音調の藝術と言語とは、常に同じ強さで現れることはない。表象の世界は感情の世界よりも勢力を擴張し、音樂の世界はだんだん狭くなり、遂に言語と袂を分つた。まへには謠でうたはれたものが、今度は言語だけで作られ、ただ音樂から出て、音樂と交渉のある韻律によつて助けられるだけである。かくして歌が成立つた。言語の藝術として、音調の藝術より新しいものである。この詩に於ける韻律が晩か

れて、叙散文は發達した。

この外に古代語には、また願望をあらはす一種の感嘆文がある。

老いず死なずの藥もが(古今)

いかで思ひ給へらるゝ事をも明らめ侍りにしがな(源氏賢木)

一は體言が「も」を介して、願望をあらはす助詞「が」を作るもの、他は「明らめ侍りにし」を主分とする連語を體言化して、「がな」が附いたものである。

すべて感情は一般に分解できないものであるから、之に伴ふ表象をたゞ體言の形で投出したものが感嘆文一般の特徴で、あるものは、この通性に從つて平叙文の形をそなへる文全體を體言的に結集して、感嘆文を作つてゐるものもある。この種の文は近代語には全く無くなつてゐる。

以上見る如く、すべて感嘆文は體言を以て終り、もしくは體言に準ずる形を以て結集せられたものであることを知れば、

もゝしきの大宮人の熟田津に船乘しけむ年の知らなく(萬三)

磯毎に海人の釣舟泊てにけりわが舟泊てむ沖の知らなく(萬一七)

あまの川あしぬれわたり君が手もいまだまかねば夜のふけぬらく(萬一〇)

鳥といふ大をそ鳥の言をのみ共にといひて先立ち去ぬる(靈異記)

ちると見てあるべきものを梅の花うたて匂の袖にとまれる(古今)

わが宿の梅の立枝や見えつらむ思の外に君が來ませる(拾遺)

の如きものも、同じ性質の者と分る。—知らなく—「ふけぬらく」は、奈良朝時代の名詞法である。その他は、もはや感嘆文とはいへないけれども、感嘆文の性質を多分にもつてゐるから、連語が連體形をとり、體言に準ぜられて、助詞「の」「が」を伴ふ體言に連つてゐるのである。萩原廣道が「てにをは係辭辨」で、上の緒の「の」の係を除いたいは、この意味で正しい。

次の如きものは、又これが類推して出來て來たもので、「詞の玉緒」に變格としてあるが、かゝの如き特殊の形を呈してゐるのは、全く感嘆文を母胎として出來たからである。

あひにあひて物思ふころのわが袖にやどる月さへぬるゝ顔なる(古今)

たにの戸をとぢや果てつる鶯のまつに音せで春も暮れぬる(拾遺)

かしまなるつくまの神のつくづくとわが身ひとつに戀をつみつる(同)

ほどもなき山路をくらみさ夜更けてこの木の末ごとに紅葉てらせる(後撰)

今日の「花がさく」と云ふ平叙文一般の形も、その由來するところは、感嘆文にあると云つてよい。近代語に於て、連體形・終止形の區別が失はれたのと並んで、主語を助詞を以て明示する要求が大きくなるに從ひ、この形がかゝる形を同化するやうになつたと解釋せざるを得ない。

第十一章　文の成分

文は一個の單語から成ることもあるが、多くは二個以上の單語の連結で出來てゐる。二個以上の單語の連結は、相依つて一個の品詞と同じ取扱を成し得るものがある。「白い雪」。これは全體として、單に「雪」と云ふのと、同じ資格で取扱はれる。之を同極關係と稱ける。

同極關係には、同格關係と從屬關係とある。前者に於ては、「紙及び墨」のやうに、相伴つて一個の名詞と同じ取扱を受ける。單に並列することもある。「筆、墨、紙」と云ふ類である。又「且遊び、且學ぶ」「あたらものに言ひおもふ」(落窪)、「この子おほきくさとくかしこし」(宇津保)の如きは、用言の同格關係による連結である。

從屬關係に於て、その成分は、主分と從分とから成る。「青い松」と云ふ連結は、「青い」が從分、「松」が主分である。その從分が、又主分と從分とから成ることがある。「いと青き松」と云へば、「いと青き」が從分で、松が主分であるが、「いと青き」は、又「いと」と云ふ從分と「青き」と云ふ主分との連結である。同時に又主分が主分と從分とから成ることもある。「かの青き松」

と云へば「かの」が從分、「青き松」が主分であるが、主分「青き松」は「青き」と云ふ從分と「松」と云ふ主分から成つてゐる。

かくして、單語の連結がすべて同極關係から成つてゐる場合は、その連結は、その中の究極の主分（總主分）と同一の資格に歸する。もし同極連結なる時は、二個以上の單語が總主分たることがある。「かの青き松とこの白き砂」と云へば、「松」及び「砂」、「高く飛び、いと緩かに舞ふ」と云へば、「飛び」と「舞ふ」とが總主分である。

　　我舟を水に浮ぶ

これは主語・客語と述語とから成つてゐるが、これも從屬關係である。「我」は從分、「舟を水に浮ぶ」は主分、「舟を水に浮ぶ」は「水に浮ぶ」が主分、「舟を」が從分、更に「水に浮ぶ」は「浮ぶ」が主分、「水に」が從分であつて、「浮ぶ」は「我舟を水に浮ぶ」と云ふ全體の連結を代表する總主分である。「雪は白い」といふやうな文は之と違ふ。

「雪は白い」と云ふ文では、雪はやはり主語であるが、「は」といふ助詞の爲に、「雪」は述語に從屬せず、「雪は」は「白い」に對立する。「あの人が通る」は從屬關係であるが、「あの人は通る」がさうでないことは、「あの人が通るのを見た」と「あの人は通るのを見た」とを比較せよ。「あ

の人は通るのを見に」は「あの人」は「通る」に從屬せずして、何人かゞ通るのを「あの人」は見にと云ふことになる。それ故に、「雪は白い」の如きものは、對極關係と稱ける。「通る」が準體言であれば、「あの人が」は從屬關係であるから、「あの人が通る」も同じ資格として取扱はれるが、「あの人は通るの」は一成分としては取扱はれない。「雨が降る時」「雨が降るけれども」「雨が降るのに」と同じく、「雨が降れば」と云はれるが、「雨は降れば」とは云はれない。對極關係は他と連結するとき、種々の制限がある。

對極關係は判斷に於ける主辭と賓辭との對立である。「あの人は鷄に餌をやつてゐる」と、「あの人が鷄に餌をやつてゐる」とは違ふ。前者は判斷であるが、後者は表象である。我々は單に物を見たり聞いたりすることがあると同時に、又それに就いて判斷することもある。その違ふことは、判斷するが爲には、表象に對する注意力が減ずることもあり、表象としては細微なものに注意することもある事實を考へても分る。これは物を見たり聞いたりする時には、自己の全努力を物に集中するが、判斷する時には、注意力はもつぱら選ばれたものに對する判斷に集中するからである。言語はもとより概念の記號には違ひないが、われ／＼が日常に語るところは、概念に關係しないことが多い。概念を現す單語を連結して、この文は出來てゐるが、云

つてゐる所は、單に今見てゐる映像にのみ關してゐる。

國語の主語述語の關係が必ずしも、對極關係でないと同時に、對極關係は必ずしも主語述語の間にのみ成立つものでない。

　　この本は僕が書いた

これは提部と稱するものに於ける對極關係である。英語では、論理的主語は必ず文法上の主語である。それ故にこの文は、This book was written by me. と云はなければならない。

國語の客語や論理的主語以外の主語は、述語の客體たり主體たるものを言表して居り、述語の補充成分である。用言の說明してゐる概念は、その主體・目的・標準・場所・時間等を捨象したる物の屬性概念を云ひあらはすに過ぎないからである。國語の文に於ては、主語のないことが極めて普通である。國語の主語述語の關係は、論理的主語以外は、同極關係で、主語は述語に從屬してゐる。英語の主語述語の關係が、對極關係で、從つて動詞の語形變化は主語と相應じ、動詞が終止すると否とが主語と相俟つて始めて定まるのと違ふ。

主語と述語との關係が同極關係であり、主語は述語の從分であることを理解するならば

　　櫻は花がさいた

支那は人口多し

と云ふ形が國語に特にあらはれるのを怪しむに及ばない。「花がさいた」「人口多し」は一個の用言と同じ資格を以て文の構成に與る。それ故に體言を主語とするものの述語となつて、「櫻は花が咲いた」「支那は人口多し」等の文を造つて、判斷の主辭たる「櫻は」「支那は」を主語として、その述語の役目を果してゐる。「櫻は」「支那は」等は、總主と云はれてゐる。

文はまた修飾語と述語とから成つてゐることもある。「打てば響く」と云ふやうな構成は、常に見うける國語の事實である。われ／＼は普通之を完全な文として、何人も之に主語や客語の存在を考へることはない。

然らば文の成分は、どういふ位地・形式を以て文の構成に與るか。平叙文や命令文では述語は常に文の終に在る。疑問文でも、平叙文と述語の位地の變らないことは、西洋の諸國語と比較して注意すべきことである。

主語は述語の上に在る。初に遡れば、主語は單に述語の上に位すると云ふ丈で、それをあらはす體言は、何ら形態上、特別の變化を發達させてゐない。西洋の言語が、體言の格をあらはす特定の形式を發達させてゐるのと、趣がちがふ。

主格をあらはす助詞も初はなかつた。

韓國をいかに言ふことぞ、目頰子來る。向放くる壹岐の渡りを目頰子來る(紀)

よもすがら雨やまず(土佐)

院政鎌倉時代以後「が」が主格をあらはす助詞として發達し、近代語では主語の位地が明瞭になつて來た。「が」「い」は共に、もとたゞ係屬をあらはすものであつたことは助詞の條に述べた通りであるが、こゝに至つて、「の」はもつぱら係屬をあらはし、「が」は主語をあらはすこととなつた。

客語もまた單に述語の上にあると云ふ外はない。客語をあらはす體言に格を語形上發達させてゐないことは、主語の場合と同じ。それ故に、總じて體言の格は、國語では文章法上の問題で、品詞論の問題ではない。

客語と主語との關係は、普通の場合は主語が客語よりも上に在る。それ故に、國語の文の成分は

主―客―述

と云ふのが、最も自然の順序である。

客語には「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「まで」等の助詞が附く。このうち「を」は古くは附けなかつた。

尚その事申し侍らむ、そこに侍はむはいかに(枕)
月夜あきてむ馬しましとめ(萬一九)
御返り疾く賜はつて參りなむ(源夢浮橋)
からうたこゑあげていひけり(土佐)

「を」はもと感動助詞であつたことは、前に述べた。この助詞は古代語では一般に發達が不十分であつた。中世にも假名書論語に顏淵問レ仁、仲弓問レ仁などはつねに、「がんねんしんとう」「ちうきうしむとふ」と云ふやうに訓み、子不レ語二怪力亂神一は「し、くわい・りよく・らん・しんかたらず」と云ふやうに訓んでゐる。また中世之がうける名詞が撥音で終る場合、融合して「の」となつてゐるものがあるのは、當時の連聲の特殊の習慣である。

莊子カ小知小見ノ破ントテ、ウクワツヲ云也(莊子抄一)

次の如きは、全くこれからの類推であらう。

玄冥ハ玄ハ深ク遠イ處、冥ハ幽寂ノ稱シテクライ處ソ(莊子抄三)

修飾語は、修飾されるものゝ前に在る。連體修飾語は體言の前に在り、連用修飾語は用言の前に在る。

總主や提部は國語の文に於ける特殊の成分で、主語の上にある。提部は又

　大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す

　帝國議會は毎年之を召集す

と云ふやうに、之をもう一度客語として繰返すことがあり、國語としては異樣であるが、これは全く漢文の訓讀法から來たものである。漢文に於ける「之」は代名詞と云ふよりも、むしろ述語に從屬する助辭として、殆ど無意味に用ひるものが多い。

　夫貉五穀不レ生、惟黍生レ之（孟子告子章句下）

國語の提部再說は全く、その影響に過ぎない。

感嘆文は、平叙文が常に用言、もしくは活用連語で終るのに對して、體言もしくは體言の性質を有するものを以て、總主分としてゐることを特徴とする。

詠嘆をあらはす感嘆文には、「よ」「や」「を」「はや」「はも」「か」「かも」「かな」等の感動助詞を伴ふ。その修飾語は、用言、活用連語もしくは之を主分とする連語なる時はその連體形

を以て從屬し、體言もしくは形容詞の語幹が修飾語なる時は、助詞「の」の助を借りる。

心をぬさとくだく旅かな(古今)

ありがたのわざや(竹取)

和御寮に心筑紫弓ひくに心強の心や(閑吟集)

形容詞の語幹にうごいついて出來た體言が總主分たることがある。この場合には、修飾語が本來の體言である時と、用言、活用連語であるのとで、從屬の仕方がちがふ、前者に於ては助詞「の」をつけて

こゑのかなしさ(後撰)

から思し歎かすばかりなりける宿世の高さよ(源氏夕顏)

と云ふが、後者に於ては

見るがわびしさ(古今)

さゝがにの振舞しるき夕ぐれにひるますぐせと言ふがあやなさ(源氏、帚木)

のやうに「が」を用ふ。

願望をあらはす感嘆文は體言もしくは體言に準ぜられたものに、願望の助詞「が」「がな」を

加へたもので出來てゐる。

本來の體言の場合は、「も」を介して「が」「がな」に連る。

老いず死なずの藥もが(古今)

大空に覆ふばかりの袖もがな(後撰)

の如きは體言に準ぜられたものに「がな」のついたものである。

いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがな(竹取)

今はいかで見聞かずもありにしがな(蜻蛉)

體言が連體修飾語を持つて、感動助詞を伴はずに感嘆文を成すことは、述語に於ける形式と見るべきである。

第十二章　文の連結

文は連結して、一層大きな文になる。平叙文は用言、活用連語の終止形を以て完結してゐるが、これを他の活用形に變へ、又助詞の助を假りて、他の單語連語もしくは文に從屬したり、接續することが出來る。普通に文章法に於ては、主語と述語とを具へてゐる文が、他の文に連結する場合を標準として、文の構成を研究し、その上で文の種類が論ぜられてゐるが、國語の文は主語を具へないことが多いから、「檜、人近からぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし」と云ふやうな類の形式を具へてゐるものは、實際に於ては、さう多くなく、

それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし(枕)

人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり(同)

と云ふやうなものが普通であり、之を單文・複文・重文の形式にあてはめて論ずるところに說明の無理があり、觀察の不完全なところが生じて來る。今日までの文章法は、かりに西洋の文章法の形式に當てはめて、國語の文を觀察して見たまでのもので、西洋の文が對極關係にある

のに、國語の文が必ずしもさうでないことが分れば、根本に於て大きい間違のあることを想像し得る筈である。「打てば響く」と云ふやうなものも、國語では一個の文であると述べた。「ありや、なしや」と云ふやうな文もある。一は、從屬關係、他は同格關係である。「酒はいたゞきません」と云ふやうな對極關係の文もある。同樣にたゞ一つの客語が文に從屬することもある。

　中の品になむ、人の心々おのがじゝの立てたる趣も見えて、わかるべき事かた〴〵多かるべき(源氏帚木)

と云ふやうなものである。反對に又一個の述語に文が從屬することもある。

　受領と云ひて、他の國の事にかゝづらひ營みて、品定まりたるなかにも、亦きざみ〴〵ありて、中の品のけしうはあらぬ、えり出でつべき頃ほひなり(源氏帚木)

今日の文章法として說かれてゐるものゝ不完全なことは、誰も認めてゐることだが、實際に於て國語の文の構成は複雜で、今日に於ては尚簡單に說明し得るまでになつてゐない。それ故に今は文は單語や連語や文に從屬もするし、接續もし、又單語や連語や文が他の文に從屬したり、接續するものとして、文が從屬したり、接續したりする場合の、文の成分に於ける制約を觀察し、又從屬したり接續する場合の連結の方法を研究するにとゞまる外はない。

文の連結を、從屬性の大小を以て觀察すると、對極關係の文は、從屬關係の文に比べて、從

屬することが困難である。

同じ從屬と云つても、引用文のごときは、文の成分としては從屬の位置にあるが、引用文そのものは、原形を崩さずに挿入され、半ば獨立のものだから、この場合は特に對極關係のあらはれることが最も容易であるのは勿論である。

引用文ははじめは

楫取の申したてまつることは、「このぬさちる方に御船すみやかに漕がしめ給へ」と申してたてまつる

（土佐）

或は

人々いはく、「この河飛鳥川にあらねば、淵瀬かはらざりけり」と云ひて

と云ふ形を取り、宣命や祝詞には定型となつて居たが、後には、

大殿「あやしき物の師をこそまつはし物めかし給はめ、煩はしきことなり」と宣ふに（源氏若菜上）

と云ふやうな、下にだけ引用を示す形になつた。國語の文章法としては省略の行はれたものと云ふべきである。

引用文は普通「と」を伴ふが、「など」を用ひて

世に久しかるまじき心地なむするなど宣はせし(源氏若菜上)

と云ひ、中古語には全く「と」の代りをしてゐたが、院政鎌倉時代以後、「など」の下に又「と」をつけ、又「なんど」といふ形もあらはれた。

一念こそよけれ、と念こそよけれなんどまふすことも(親鸞消息)

從屬するものは、他の文に對して、主格ともなり客格ともなり、又修飾格に立つ。

御前の若楓、柏木などの青やかに、繁りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出し給ひて、「和して清し」とうち誦じ給ひて(源氏胡蝶)

これは一の文の述語が連體形になつて、主格に立つものである。この場合、奈良朝時代には、終止形そのまゝのものがある。これはその文が存在繼續態の助動詞で終つてゐる場合で、それを受ける述語が「見ゆ」と云ふ動詞に限られてゐるのを見れば、前の時代の用法が慣用語として殘つてゐるものと見られる。

潮瀬の波折を見れば遊び來る鮪が鰭手に妻立てり見ゆ(記)

あしひきの山にも野にもみ狩人さつ矢たばさみ亂りたり見ゆ(萬六)

蜑女玉求むらし沖つ波かしこき海に舟出せり見ゆ(同六)

印南野は行過ぎぬらしあまづたふ日笠の浦に波立てり見ゆ(同七)
蜑小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦回に波立たり見ゆ(同)
久方の月は照りたり暇なく海人のいさりはともしあへり見ゆ(同一五)
稚はたぶせの下にわが夫子はにふゞに笑みて立ちませり見ゆ(同一六)

さきの連體形の用法は、往々下に體言の省略されたものと解釋されむとするが、嘗てはかゝる終止形が同じ用法に立つてゐたことを見ると、連體形の場合も、體言としての取扱ひを受けたまでゞ、省略と見ることの誤であることが明かである。

河ぞひ柳のおきふし靡く水影など疎ならぬをかしきを見ならひ給はぬ人は、いと珍らしく見捨てがたしとおぼさる(源氏椎本)

これは客格に立つたものである。

修飾格には連體修飾格と、連用修飾格とがある。

聲にくからざらむ人なむ思はしかるべき(枕)
ことさらに人來まじきかくれがを求めたるなり(源氏夕顔)

これは前者の例である。

色深くそめし袂のいとゞしく涙にさへもこさまさるかな(後撰)

その男がしりはな血あゆばかりかならず蹴たまへ(宇治拾遺)

秋津野に朝ゐる雲の失せぬれば、昨日もけふも亡き人思ほゆ(萬七)

いみじき過ありとも、心弱く赦しつべき御有様かなと見奉り給ふ(源氏、帚木)

これは後者の例である。

奈良朝時代には、述語の終止したものが「に」を作ふことにより、連用修飾格に立つことがある。これは殆ど「なし」の場合に限られてゐる。

慰むる心はなしに雲隠りなきゆく鳥の(萬五)

過所なしに關とびこゆる霍公鳥(同一五)

上代語では、文の主語に、「が」「の」のあらはれるのは、述語が連體形である場合に、限られてゐるが、文が從屬の形をとる時には、「が」「の」が好んで主語の下に用ひられる。かれに於て、「の」「が」のあるのは、下の述語たる用言の體言的取扱を受けたものに從屬することを示すものであつたが、これに於ても、文が從屬する上に主語が從分たる位地にあることを明かにして、成分の關係を緊密にするために、この助詞が用ひられるのである。

連體修飾格には、對極關係は殆ど無く、

鳥は今ねぐらを占むる梢にも、花はとまらぬ春風ぞ吹く（新續古今）

の如きは、希有の異例と云はなければならぬ。

連用修飾格に於ては、順說には既定の條件をあらはす場合、

宮はその頃まかんで給ひぬれば、例の隙もやと覗ひありき給ふを事にて、大殿にはさわがれ給ふ（源氏、紅葉賀）

の如く云ふが、假定條件にはない。

對極關係の文が連結するのは、接續する場合卽ち次に述べる同格に連結する時に於て最も普通であり、又其の次に多いのは、逆說の條件をあらはす場合である。

わが宿の櫻の色はうすくとも花のさかりは來ても折らなむ（後撰）

から人の袖ふることは遠けれど立居につけてあはれとは見き（源氏紅葉賀）

一の文が他の文に接續するものは中止形を以てする。

本ごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ（土佐）

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ（枕）

中止形を用ふるかはりに、助動詞「つ」の連用形の助詞のやうな役目をしてゐる「て」を連用形

につけて用ふる方法がある。

そのはじめは、

此所をうち過ぎて、濱松の浦に來りぬ(海道記)

の如く、「て」は完了を意味し、或動作が終つて、他の動作に引續く意味を持つてゐたことは疑はれないが、次第に單に連結の役目をのみ成すやうになつたもので、中止形を用ひたものとの間は區別の附けられぬものが多い。

月落ち、烏啼きて、霜天に滿つ

は、たゞ三つの文が同格關係を以て、接續してゐるばかりである。形容詞の連用形に「て」をつけた

かの草とおぼしきものはなくて稻のみぞ多く見ゆる(東關紀行)

の如きは、もつともその趣が明かである。後世に至るほど、中止形そのもので連結することは少くなり、この「て」による連結が多くなつた。それ故、今日の口語で、中止形を用ふる方は、記載語に偏つてゐる。

之に接續詞を補ふことが、新しい時代に多くなつた。漢文の影響から來てゐる。

其の子一百八十一神ありて、以て天下を經營し(中朝事實)
天皇の命を承けて、且つ父の業を成さむと欲し(同)

國語では、論理的關係のない場合でも、文はいくつでも文法的の方法で繫るのを特徵としてゐる。

今昔、上東門院ノ京極殿ニ住マセ給ケル時、三月ノ廿日餘ノ比花ノ盛ニテ、南面ノ櫻、艶ズ榮亂レタリケルニ、院寢殿ニテ聞カセ給ケレバ、南面ノ日隱シノ間ノ程ニ極ジク氣高ク神サビタル音ヲ以テ、コボレテニホフ花ザクラカナト、長メケレバ、其ノ音ヲ院聞カセ給ヒテ、此ハ何ナル人ノ有ルゾト思シ食テ、御障子ノ被レ上タリケレバ、御簾ノ内ヨリ御覽ジケルニ、何ニモ人ノ氣色モ無カリケレバ、此ハ何カニ誰カ云ツル事ゾトテ、數ノ人ヲ召テ見セサセ給ケルニ、近クモ遠クモ人不レ候ズト申ケレバ、其ノ時ニ驚カセ給テ、此ハ何カニ鬼神ナドノ云ケル事カト恐チ怖レサセ給テ、關白殿ハ□殿ニ御マシケルニ、急ギ此ル事コソ候ヒツレト申サセ給ヒケレバ、殿ノ御返事ニ其レハ其ノ□ニテ常ニ然樣ニ長メ候フ也トゾ御返事有ケル(今昔二七)

かう云ふ長い文の連結は、西洋の言語には見られないものであらう。

感嘆文は感嘆文と連結して、

かひがねをさやにも見しが、けゝれなく横ほりふせるさやの中山(古今)

いたづらにたつや淺間の夕煙、里とひかぬるをちこちの山(新古今)

と云ふ形のものもあり、平叙文と合して、

尋ね見るつらき心の奥の海よ、汐干のかたにいひかひもなし(新古今)

其の身はさながら苔の下にくちにければ、わづかに埋られる名ばかりを、しるしとゞむるあはれさよ(十訓抄)

となることもある。

引用文法史料略註

〔一〕奈良朝時代

古事記　和銅五年(一三七二)太安萬侶撰

日本書紀　養老四年(一三八〇)舍人親王、太安萬侶等撰

延喜式祝詞　祭祀の詞であるから、原形は古く成立したもので、延喜式(延長五年)に收められるまでに、變化改刪を蒙つたに違ひないが、宣長の云つた通り、大寶令の頃か、又はそれより以前、天智文武兩朝頃に大體は固定したものと見てよからう。

佛足石歌　佛足石落慶直後と思はれるから、天平勝寶四年(一四一二)の作だらう。

萬葉集　天平寶字三年(一四一九)頃にほゞ成立し、平安朝に至るまで後人の補修が加わり、現存の形になつたのは、平城天皇の御代か(久松潜一氏說)。

續紀宣命　文武天皇元年(一三五七)即位の詔から、桓武天皇延曆八年(一四四九)の詔まで六十二詔。

日本靈異記　弘仁頃の成立だが、傳說と共に歌は奈良朝時代のものと思はれる。

〔二〕平安朝時代

神樂歌　奈良朝末より平安朝初に作られたものが多く、之に整理を加へたのは、清和天皇の御代から圓融花山兩朝頃までの間で、最後に源雅信(一五七九―一六五三)が大修正を施したと云ふ。

催馬樂歌　大部分地方の民謠若しくは童謠で、神樂歌と同じく、奈良朝末から平安朝初期に出來たもの。弘仁(一四七〇―一四八三)前後から、貴族の間に遊宴の餘興として謠はれるものとなつた。

竹取物語　藤岡作太郎氏の說の如く、貞觀から延喜(一五一九―一五八二)の間の作と見てよからう。

伊勢物語　在原業平の歿(元慶四年、一五四〇)後、間もなく出來たもの。但し現存の形を具へたのは、延喜前後と云はれる。

大和物語　天曆年中(一六〇七―一六一六)成立。

新選字鏡　昌泰年中(一五五八―一五六〇)昌住撰。抄本と完本とある。享和三年の刊本は抄本。本文一冊校異一冊ある。完本は天治年中書寫のもの、全部十二卷ある。

古今和歌集　延喜五年(一五六五)紀貫之等撰進。但し延喜七年頃の歌があるから、奏覽はそれ以後と云ふ說がある。

和名類聚集（和名抄） 醍醐天皇の皇女勤子内親王の仰せにより、朱雀天皇の承平年中（一五九一―一五九七）源順撰。

土佐日記 承平五年（一五九五）紀貫之が土佐守の任果てゝ海路京に上る時の日記。

後撰集 天暦五年（一六一一）撰進。

蜻蛉日記 天暦八年（一六一四）から天延二年（一六三四）までの日記。

宇津保物語 圓融花山二帝頃（一六三〇―一六四六）の作と云ふ説があるが、異説もある。

落窪物語 圓融花山兩朝ごろの作であらう。

古今六帖 貫之は古今集以前の成立と考へたが、後撰以後拾遺以前の成立とする契沖の說を取るべきであらう。

拾遺和歌集 八雲御抄には、長德（一六五五―一六五八）頃の成立とし、保己一は長保三年（一六六一）とする。

和泉式部日記 長保五年（一六六三）から、同六年（一六六四）までの日記。

枕草子 寛和二年（一六四六）と思はれる記事が最初で、長保二年（一六六〇）と思はれる記事が其後であるから、その以後に完成したものだらう。

源氏物語　寛弘五年（一六六八）に、一部は出來てゐたことが明かだが、その完成はいつだか分らない。

紫式部日記　寛弘五年（一六六八）から、同七年（一六七〇）までの日記。

狹衣物語　藤岡作太郎氏は、永承、天喜頃（一七〇六—一七一七）の作とし、津田左右吉氏は、白河院御在位（一七三三—一七四六）頃の作とする。

更級日記　寛仁四年（一六八〇）より、康平二年（一七一九）と思はれるまでの日記。康平二年以後一二年の間に追記したもの。

〔三〕院政鎌倉時代

今昔物語　宇治大納言源隆國（一六六四—一七三七）の作と云はれる。

榮華物語　堀河天皇の御世（一七四七—一七六七）に出來たもの。但し上篇は長元二年（一六八九）—同六年—（一六九三）に出來たと云ふ和田英松氏の說がある。

大鏡　作者は萬壽二年の作のやうに装つてゐるが、白河天皇（御在位一七三三—一七四六）以後の作である。

法華修法一百坐聞書抄　天仁三年（一七七〇）に行はれた百坐の法華修法會の說經を筆記したもの。現存の法隆寺所藏のものは、後の抄出にかゝるが、天仁を去る遠くない頃のもの。

讃岐典侍日記　嘉承二年(一七六七)から、天仁元年(一七六八)まで前後二年間の日記。

類聚名義抄　菅原是善撰と云はれたのは誤で、この時代のものに違ひない。山田孝雄氏は「後一條天皇頃から堀河天皇の頃までの間に出來た」と云はれる。

童蒙頌韻　天仁二年(一七六九)三善爲康撰。

色葉字類抄　橘忠兼撰　二卷本、三卷本、十卷本の三種がある。天養より長寛頃(一八〇四—一八二四)までに作つたものが二卷本で、もつとも古いもの。三卷本は之れを增補して治承頃に出來た。三種の傳本中もつとも重要なもの。前田家所藏のものは中卷が缺けてゐるが、撰者の時代に近い頃の書寫で傳本中最も古い。黒川家所藏本は三卷揃つてゐるが、後世の書寫に成る。十卷本は鎌倉時代に何人か增補したもの。

梁塵秘抄　後白河天皇(御在位一八一七—一八一八)の御撰。

とりかへばや物語　原作は院政時代で、鎌倉時代初期に改竄されたものであらう。

山家集　西行(一七七八—一八五〇)の歌集。成立の年時は未詳。

寶物集　平康頼撰。成立は異説があるが、治承二・三年頃(一八三八、九)であらう。

千載和歌集　序文によれば、文治三年(一八四七)成立。

古今集註　顯昭撰、壽永二年(一八四三)頃より起筆し、建久二年(一八五一)完成。

後鳥羽院御百首　正治二年(一八六〇)御撰。

千五百番歌合　建仁元年(一八六一)後鳥羽院以下當代の名匠三十家の作。

新古今和歌集　建仁元年撰進の院宣下り、元久二年(一八六五)に成立。その後しば〳〵切繼が行はれた。

宇治拾遺物語　成立は建保年間(一八七三―一八七八)と云はれる。

平家物語　建久以後承久二年(一八八〇)成立と云ふ說に從ふがよからうが、異本が非常に多い。現存異本中最古のものは延慶本。

源平盛衰記　平家物語の異本の一種と見るべきもの。

保元物語　原作の成立は、平家物語と相前後して居るが、流布本には後の增補が加つてゐる。

平治物語　保元物語と同一作者の手に成ると見られてゐる。流布本には、保元物語と同樣、增補が加つてゐる。

建暦御記(禁秘抄)　室町時代以後禁秘抄の名に定まる。書名は建暦帝記と云ふほどの意味で、成立年代をあらはすのでなく、建保六年(一八七八)御起稿、承久三年(一八八一)御脫稿と見られる。

字鏡集　菅原爲長(一八一八―一九〇六)の撰。

萬代和歌集　寶治二年(一九〇八)撰。勅撰集に見える歌も見えるが、主として鎌倉時代の人々の作。私撰類題和歌集の先驅。

親鸞消息　親鸞は承安三年(一八三三)に生れ、弘長二年(一九二二)歿。

吾妻鏡　治承四年(一八四〇)頼朝擧兵から、文永三年(一九二六)惟康親王が將軍に擁立されるまで凡そ八十七年間に亙る鎌倉幕府の日記體の記錄。

開目抄　文永九年(一九三二)日蓮撰。

沙石集　弘安二年に書き始め、弘安六年(一九四三)に書き終へてゐるが、永仁三年、德治三年等の加筆がある。

中務内侍日記　伏見天皇に仕へた中務内侍の日記で、後宇多院の弘安三年(一九四〇)に始り、伏見天皇の正應五年(一九五二)に終つてゐる。後年追憶して、書き加へた所もあると云ふ說(池田龜鑑氏)がある。

夫木和歌抄　著者藤原長淸は冷泉爲相(一九二三—一九八八)に學んだ人だから、伏見天皇の朝又は之を距る遠からざる頃出來たものだらう。

假名がき論語　元弘三年(一九九三)成立と云はれる。

增鏡　建武中興(一九九四)後、間もなく出來たものと云ふ伴信友の說に從ふ。

〔四〕室町時代

平他字類抄　元中(二〇四四―二〇四六)頃の撰。

義經記　成立については定説がないが、室町時代の初期から中期までの間であらう。

今川大双紙　今川了俊(一九八五―二〇八〇)の撰。

謠曲　今に存するもの約五百番。内百番が最もよく行なれ、之に次ぐ外百番の他に、番外百番、續番外百番、續々番外百番等がある。應永(二〇五四―二〇八七)頃から豊臣氏の時代にかけて作られたもの。

勅規桃源抄　雲章(二〇四六―二一二三)の講義を瑞仙桃源(二〇九〇―二一四九)が筆記したもの、寛正三年(二一二二)完成。百丈清規抄と題した本もある。

史記抄　前記桃源の抄。

蒙求抄　享祿二年(二一八九)の抄。

湯山千句　明應九年(二一六〇)桃源の弟子周麟(景徐)の抄したもの、寛永七年刊。

四河入海　笑雲清三抄。大永七年(二一八七)始筆、天文三年(二一九四)絶筆。

山谷詩抄　林宗二(二一五八―二二四一)の抄。各巻に奥書がある。例、永祿九年丙寅七月十五日申刻抄之。宗

二六十九歳(十九巻末)。

古文眞寶抄　此抄者一元和尚就桂林和尚聽之聽書也の奥書があり、永正十五年戊寅(二一七八)の抄。

三體詩絶句抄　元和六年刊。

古文眞寶之抄　桂林徳昌、萬里周九、一元、湖月信鏡の手抄を笑雲清三が集大成したもの。大永五年(二一八五)の奥書がある。

中華若木詩抄　月舟の弟子如月壽印の抄。

碧巖抄　寛永十八年刊。

莊子抄　正保二年刊。巻三の文中に「サックルトコムト萬里ノ云レタツ」とあるから、成立は他の抄と同じ頃であらう。

三體詩法三體家法　紫陽素隱の鈔、寛永十四年刊。

錦繡段抄　月舟壽桂(二二〇三殁)の抄。

宗門葛藤集(句雙葛藤鈔)　元祿五年刊。

閑吟集　永正十五年(二一七八)に出來たもの。連歌師柴屋軒宗長を編者とする説(志田延義氏)がある。中流以下に行はれた作り歌及び民謠三百餘首を集めてゐる。

狂言記　もと口傳によつて傳つたもので、萬治三年以後版になつた。今日傳るもの、繪入狂言記(萬治三年刊、寛文二年再版)、同(寛文五年刊)、新板繪入狂言記外五十番(元祿十三年刊)、繪入續狂言記(元祿十三年刊)、繪入狂言記拾遺(享保十五年刊)等がある。これらは自然、改作を經た疑があるが、淨瑠璃が成立當時の語法であると同樣、室町時代の用語をあまり變へてゐないであらう。

天正日記　内藤清成(德川氏の臣)の天正十八年の日記、慶長の殘闕が少し添へられてゐる。

天草本平家物語　眞の名は、Nifon no cotoba to historia uo narai xiran to fossuru fito no tameni xeua ni yavaragetaru Feiqe no monogatari 文祿二年(二二五三)天草出版。

天草本伊曾保物語　(Esopo no Fabulas) 同。

ロードリゲース日本語典　(Joao Rodrigues, Arte da lingoa de Japan) 慶長九年(二二六四)長崎出版。

〔五〕江戸時代

おあんものがたり　石田三成に仕へた山田去暦と云ふ者の娘が、慶長五年の亂に、大垣城に立籠つたときの話を口語體で書いたもの。

醒睡笑　安樂庵策傳が幼時より聞いた笑話を、元和九年七十歳のとき書き記したもの。

きのふはけふの物語　慶長末の記事がある。その頃の成立。元和から寛永初年頃刊行。

雑兵物語　雑兵の談話に托して、故ら俚言を以て書いたもの。松平信興(二二八九―二三五一)の撰。

武道達者　元祿六年(二三五三)、京都都萬太夫座興行歌舞伎狂言本。

萬歳丸　元祿七年興行同狂言本。

日本月蓋長者　同狂言本、武道達者と同じ頃のもの。

兵根元曾我　元祿十年(二三五七)江戸中村座興行歌舞伎狂言本。

京ひながた　元祿十二年(二三五九)京都亀屋座興行歌舞伎狂言本。

一心女雷師　同年江戸山村座興行歌舞伎狂言本。

成田山分身不動　元祿十六年(二三六三)江戸森田座興行同。

傾城角田川　寶永元年(二三六四)山村座興行同。

傾城曉の鐘　同五年(二三六八)京都亀屋座興行同。

八景聞取法問　滑稽本。寶暦四年(二四一四)刊。梅廳撰。

太平樂卷物　洒落本。平賀源内(二四三九歿)撰。

品川楊枝　同。寛政十一年(二四五九)刊。芝晋交撰。

東海道中膝栗毛　享和二年(二四六二)に初篇を出し、文化六年(二四六九)までに八篇を出して、發端一篇を文化十一年に作る。

浮世風呂　前篇二册は文化五年(二四六〇)脫稿、翌年刊。二篇は文化七年(二四七〇)、三篇四篇は同九年(二四七二)刊。

浮世床　初篇は文化八年(二四七一)の自序あり。二篇の序は同九年。三篇は文政六年(二四八三)に出來た。

花暦八笑人　瀧亭鯉丈撰。初篇文政三年、二篇四年、三篇同追加は不明、四篇同追加は天保五年(二四九四)に出來、未完であつたが、一筆庵等が嘉永二年(二五〇九)に五篇を出して完結。

索引 ——数字は頁数——

き

く

け

こ

た

ち

つ

て

と

な

日本文法史

昭和十一年九月十五日印刷
昭和十一年九月二十日發行

定價二圓五十錢

著者 小林好日

東京市神田區駿河臺三丁目六番地
發行者 關根喜太郎

東京市神田區神保町一丁目三四番地
印刷者 尾藤光之介

東京市神田區駿河臺三丁目六番地
發行所 刀江書院
電話神田（三一八九・二七）
振替東京七三一一八

東京文理科大學教授 保科孝一著

國語政策

新菊判二二〇頁　定價一圓五十錢　送料十四錢

最新刊

世界各地に割據する民族國家は、互に生存の權利を主張して、いまや世界再分割の論すら提唱せらるるに至つた。日本もまた自然の膨張は南進論を生み北方政策の論を捲き起してゐる。事實、日本は膨張した。しかし、躍進日本、膨張日本は更に飜つて内に自らの團結を强固にする必要がある。日本語は日本人同志の心の通路である。日本人は國語によつてのみ、その心を理解し合ふことが出來る。内に國民の團結を强固にし、外に日本精神を傳播するものは、軍備よりも經濟力よりも何よりも先づ國語の普及によつて遂げられる。現下の日本にとつて世界各國の國語政策をみ、わが國語政策を再檢討してみることは緊急の要事ではないか。國語教育を左右するものは國語政策である。我々はまづこの巨星の叫ぶ國語政策の熱論に耳を傾けねばならぬ。

文學博士 金田一京助著　**改訂增補 國語音韻論**　定價二・五〇　送料・二二

文理大教授 神保格著　**國語音聲學入門**　定價一・〇〇　送料・一〇

早大教授 山口剛著　**日本文學史概說**　定價一・二〇　送料・一四

昭和十一年夏

石川治書